

# 墮天少女と中二病少年

AQUA BLUE

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

—— 我の前に、墮天使（？）が現れた。

内浦付近のとある中学校の一教室に、新年度開始の始業式を終えて中学2年生となった生徒達が集まっていた。そんな中、突如一人の少女が妙な言い回しで名乗り出す。その少女の名は、「墮天使ヨハネ」こと津島 善子（つしま よしこ）。彼女は……いわゆる中二病の少女であった。

だが

クラスにもう一人いた。同類が。

自らを黒騎士と称する少年、手尾 湧丞（てお ようすけ）。彼もまた、中二病を患う者だったのだ――。

※「墮天少女と中二病少年」はかつてここ「ハーメルン」様にて投稿させていただいたものではありませんが、本作は一応そのリメイク版となります。また、旧版は小説投稿サイト「暁」様にも投稿させていただいております。

# 目次

## 本編

堕天使と黒騎士は邂逅する	1
決戦!?	8
堕天使と黒騎士は契約した	17
26 堕天使と黒騎士の甘美(?)な昼休み	
堕天使が風邪を患ったらしい	35
26 堕天使が風邪を患ったらしい	44
黒騎士も風邪を患ったらしい	58
80 堕天使と黒騎士は蜜柑少女	80
↑舞いし羽は堕天使と黒騎士をも掻き	
乱す↑	102
堕天少女とただの少年	125
133 堕天少女とただの少年	133
堕天使と黒騎士は祭囃子を辿る	
黒騎士も風邪を患ったらしい	66

144

墮天使と黒騎士は祭囃子を辿った

??

墮天使と黒騎士、魔の地（校外）へ赴く

237

155

墮天使と黒騎士の仲違い | 前の章 |

160

墮天使と黒騎士の仲違い | 後の章 |

172

墮天使と黒騎士と聖なる夜 |

墮天使と黒騎士は…… |

墮天少女と中二病少年 |

番外の章

争奪 Guiltty ジャッジメント

230



## 本編

### 墮天使と黒騎士は邂逅する

「天界より舞い降りし墮天使！ ヨハネ……降臨っ!!」

突如教壇の中央に立った、容姿の良い少女がそう叫んだ。おかげで空気はたちまち凍り付く。大半の男女クラスメート達が驚き、あるいは目を点にして彼女の方へ向いた。

——なんだこの子は、と。

呆然とする彼らをお構い無しに、少女は独特のポーズを決め、そしてクリクリとしたつり目を細めて続けた。

「……私と一緒に、墮天しない?」

ふわりと舞った、シニョンを束ねたセミロングの毛が落ち着いていく余韻を感じながら、少女は自信満々に全体を見据える。しかし彼女のパールパールがキラキラすると裏腹に、室内は暗くざわめいていた。隣の席同士でひそひそと話す女子や、笑い声をあげそうになるのを堪える男子が主な原因である。ちょうどHRをしに扉を開けて教室に入ってきた若手の女性教師も、この状況には顔を引きつらせた。

「っ、津島さん?」

「違う——私はヨハネ」

「……」

教師は気を取り直して声をかけるも、なお堂々とした様子の少女に面喰らい押し黙るしかなかった。

内浦付近に位置する、とある中学校。その、本日新2年生となったばかりの生徒らが集う教室に——

1人の、異端児がいた……。

「……ククッ」

否、まだ終わりではなかった。静寂を打ち破る声があがったのである。少女のではない。教室内にいる他の誰かのものだった。

初めは聞き間違いだと同は錯覚した。だが彼らが聴こえた方向に視線を向けると、悲しくもそれは現実であった。

最後列の窓際の席に座る少年が——高らかに笑っていた。中肉中背、平凡な外見。特



徹的なのはせいぜい右目を覆うほど長く伸びた前髪と、着崩した制服程度。しかし彼は強気に机の脇に立て掛けてあったレプリカの刀を持って少女に向け、

「ククツ、ハハハハツ！ 面白き刺客が現れたものだなア……！」

異端児は、彼女だけではなかったのである――。

~~~~~

窓から差し込んでくる暖かなる日光<sup>エナジー</sup>。外には可憐に舞ってやまない桜吹雪<sup>ミラージュ</sup>。少々離れた場所に位置する海を抜け出して、ほんのり漂ってくる僅かな潮<sup>ブルーウインド</sup>。風とその香り。そしてクラスメート共が和やかに談笑しているこの教室……嗚呼。心地良くて素晴らしい、我を映えさせるに最適な空間ぞ。

しかし、しかしだな。

「我が満足に至ることのできぬ理由がある……それがわかるか？」

「……」

「ハア、やはりわからないか」

「……えっ？ ちよつと待って、あなたさつきから誰に話しかけてるの？」

「お前にだよ津島善子ツツツツ！」

引いたような目で見てくるこの女に、我は思わず突つ込んだ。

「む……善子言うなーっ!!」

彼女はうるさく騒ぎ立てる。そしてポカポカとこちらを叩いてきているが全く痛くない。墮天使とかほざいていたがえらく弱い。ところでその理由とは……彼女にある!

何故だかは解せない。先刻彼女が名乗り、ホームルームが終焉してからだつたらうか——私の机前まで歩いてきたと思つたら、何か言いたげにずっとこちらを睨むのだ。これではさすがに落ち着けまい……。

ゆえに、ヤツにはヤツの領域<sup>席</sup>へ還つてもらいたい。そのため面倒ではあるが話をす。退却への誘導はそれからいい。この手の刺客は、まず穩便に接するのがポイントだ。

「すまない。名を間違えたか？」

「あ、合ってるけど……それは仮の姿の名前よ！」

「そうか。では時に津島善子、どうしてお前は自身の名を嫌う」

「それは——つて、なんであなたに教えなきやいけないのよ! 馴れ馴れしいわ!」

ふむ、解せぬ。馴れ馴れしいのはお前とて同じであろうに。我は半ば呆れながらも会

話を続ける。

「フン、こっちの台詞だ。HRが終わってからというものの、ずっと我をジロジロと睨み付けて……なんなんだお前は」

「バレていたの!？」

「……お見通しだ」

もう徐々に指摘へと繋げるのが煩わしくなったので問題点を切り出したところ、津島善子は嘘でしょうと言わんばかりの面で驚いた。ああ、言葉も出ぬ。なんとあれで隠密行動をしていたつもりだったらしい。そもそもはじめにこちらへ近付いてきた時点で、少なからず何かをしようとしていたのは明白だったではないか。

「まっ、まあいいわ。それよりあなたに訊きたいことがあるのー!」

「ほーう」

恥でも感じたのか、たじろぐ津島善子。我はそれらしい反応を返しはしたが、ほぼどうでもよかった。ヤツの底は知れた、そう結論付けていたからだ。

「あなたは一体——何者なの? 下界の人間とは別のオーラを感じるの……」

が、油断した我が愚かであった。彼女の目付きと声のトーンが変わったのだ。鋭さ、妖しさを孕んだものに。これは墮天使と名乗っていた際と同様の——なるほど、な

かなかに良きかな。一時は見込み違いかとも考えたが……やはりこいつ、できるツツ!!  
 我はヤツの顔を2度見した。なるほど、どうやら評価を改める必要があるらしい。

「く、貴様ア」

「どうしたのよ」

「……いいや、何でもない。質問に答えてやろう。貴様の言う通り、我は普遍的な存在ではない」

「じゃあ、あなたも墮天使っ!？」

取り乱した心を鎮めるべく、1度深呼吸する。我にはルールがある。たとえなんとなくでも、直感でも、「認めれた相手」には、正体を明かすことだ。

「津島善子……もとい墮天使よ。お前の推測はおおむね正しいが、一点だけ勘違いしてゐる」

「か、勘違いですって……?」

墮天使のやつは我のことを同類だと思ったようだったが、残念だったな。アーン・トゥル外れだ。

墮天使が息を呑む。いつの間にかやら民々も我が続けて答えようとすることを真摯に見守っていた。いいだろう、この際だからついでに周りにも我の存在を知らしめてやる。

ふふ——驚け、戦慄わななけ、緊迫しろ。

我は響き渡るよう声高に告げる。

「我は墮天使ではなく——黒騎士!!」

また……人間での名を、ておようすけ手尾湧丞!」

どつ、と周囲に笑いの渦が展開した。一斉にどいつもこいつも吹き出した。

おそらく、彼らはあまりのインパクトを受けて精神に異常をきたしたのであろう。悪いことをしてしまったものだ。気圧されたのか、墮天使はポカンとしていた。ただ、どこか嬉しげに——。

人間的時系列で表すと、今日は中学2年生になった始業式の日。かくして、我と墮天使は邂逅した。

そういえば、皆が笑い転げているどさくさに紛れて民の誰かが「あいつも中二病患者だよな!」とか呟いていたのを我は聞いた。

我が病に侵されていると? それがどんなものかは知らないが一応、心しておこうか。ククツ……もつとも我は無敵の存在なので病など関係ないがな。

## 決戦!?! 墮天使 V S 黒騎士

我が黒騎士として覚醒したのはほと三ヶ月前。近所の100円均一ショップ……失敬。ダンジョンを探索していた中、置いてあった「黒刀」を目の当たりにした時であった。

ダンジョン内にいた男（一般人共は店員とか呼んでいたな）に、我はこの名刀につき問いかけた。男は「西洋風な刀のレプリカですね。108円からお買い求めできますよ」などと意味不明な返答をしてきたが、とにかく容易に入手可能なようだったので奴の話に乗った。

その日の帰還道中、夕闇の淡き光に照らされながら——初めて刀を手にして掲げたあの瞬間。忘れやしない、あれが我の原点。少し幼稚かもしれぬが、我は心から思ったのだ。カッコイイ、と。

さて、エターナルメモリー過去の足跡を振り返るのはほどほどにしておいて……。

「いつまで尾行する気だ?」

進める歩を緩めて我は言い放つ、さすれば後ろから「うっ」と小さな呻き。やはりそうだった。どうりで学校を出た辺りから、誰かに見られているような感覚がしたわけだ。愚かにも、我をつけてきている者がいた。

「身を潜めてないで、姿を現すがいい」

「うふふ、あなたの後ろから……ヨハネ墮天降臨っ！」

さらに声をかけると、私の足を細い影が素早く<sup>よぎ</sup>通り、正体が眼前へ飛び出してきた。

私は薄ら笑む。つけてきていた者は想定通りであった。妙にキラリとした風格、華奢なシルエツト、頭部右側で目立つお団子<sup>魔王</sup>。それは紛れもなくヤツ——墮天使ヨハネと自称する少女、津島善子。

「……私の恐ろしさを省みず、ぬけぬけとついてきた点については褒めてやるぞ、津島善子」

「ふんっ、当然よ。ヨハネは墮天使なんだから！ あと、善子言うなあ！」

彼女は無駄に勝ち誇った顔で胸を張って余裕を演出したと思いきや、直後くわつと訂正を促してきた。いちいち表情の変化が忙しいヤツだ。

いかなる企みがあったのかは不明だが、ともかく必死に尾行していたのは見てとれた。サイドの球体を含めて彼女の髪は風に美しくなびいているものの、制服が若干乱れている。

「用件があるのなら、さっさと済ませ。我とて暇ではない」

我は彼女を促す。学校での営みは始業式祭典のため11時——つい先程に終焉し、我は今まさに家に向かわんとする途中であつた。早急に還り、武器の手入をせねばならないのだ。少しぐらいなら話を聞いてやらんでもないが、あまり長々と関わるのは避けたい。

息を整え、津島善子は言葉を紡いだ。ただ、その内容は我がまるで予想だにしないものであつた。

「ヨハネと……勝負しなさい！」

「なにい?」

まさかの聖戦誘発<sup>ユウバツ</sup>。てつきり彼女はくだらぬことを要求してくるものと踏んでいたのに、これには驚いた。

「呑めぬわ。第一、我は黒騎士。『騎士』と名の付く以上、迂闊に武力は用いたくはない。それにこれといつて潰し合う理由もあるまい、わかるか?」

とはいえど、それとこれとは話が別である。我は基本、訳のない闘いへ臨むことはせぬ主義。我は努めて丁寧に津島善子の申し出を断り、家<sup>拠点</sup>の方角へと踵を返——

「じゃあ、始めましょう?」

「……おい、貴様。何を勝手に決めている」



「はーやーくー!」

津島善子、無視して制服の袖を掴まんできた。例の墮天使テンションで呼び掛けてくるといのが、なおのこと我への煽りを強めている。こいつ、強制戦闘型エンカウンターなのか？ まるで聞く耳を持たない。というか、もはやこれは駄々をこねているレベルだ。ヤツが墮天使なのか、些いさか疑わしくなったぞ。

「放せ、交渉決裂だ」

「ちよつと!?!」

制止しようとする津島善子に構わず、まっすぐに歩を再開する。付き合いきれぬ。しかし、ヤツは懲りずに我に付いてくる。

「待ってってばーっ!」

「断る!」

我がかわし、津島善子が進行を阻む。長いことその流れを繰り返した。ヤツはしつこく粘っていたが、暫くすると追ってこなくなつた。

—— やつと諦めたか。

「それでいい……では、またな」

ぴしやりと静まった彼女に首だけ向けて別れを告げ、我は拠点へ行く方向へ足を進め出した。かわいそうだが、仕方なきこと――

「――そう……負けるのが恐いの？」

耳元で、吐息。

すぐ横を見ると、至近距離にて津島善子が我に不敵な笑みを向けていた。

触れられては不快な深淵に触れたような気がした。手の開閉を何度か繰り返し、我は確信する。

戦 闘 モ ー ド が 覚 醒 し た

「……なんだと？」

「ふふっ、その気になったみたいね」

「ああ……お前の思惑通りな。黒騎士が敗れることはない。我が闘志に火を灯させたこと、後悔するなよ」

我は通学アイテムBOXバッグを道の脇に置き、チャックを開けてそこから「黒刀」を取り出し、鞘から刃を抜ばっして片手に構え――戦闘の態勢をとった。

「つて、それただのレプリカじゃない！」

「とうっ!!」

津島善子がわけのわからぬことを叫んだがどうでもいい。我は全力で、彼女の間合いへ踏み込んだ。

「その前に取り引きよ!」

「む」

……が、そう言つて津島善子が掌をかざしたため我は体にブレーキをかける。

「ぜーつたいにあり得ないでしょうけど、ヨハネ相手に勝利を手にできたら、あなたの望みを一つ叶えてあげるわ。逆に、私が勝つたら——」

「勝つたら、なんだ?」

「や、やっぱりいいわ……後にするっ!」

「ならば、戦闘開始といこうか」

望みか。だとすれば、なおさら気を引き締めなくてはならなくなった。我が億が一敗北し、黒騎士としての力を吸い取られでもすれば致命的だ。どういうわけか、津島善子の奴がやけにもじもじとしていたが……。ヤツにどんな目論みがあるのか想像もつかぬ。

——いや、ひとまずは戦いに集中するだけのこと!

「一騎討ちでいいな? お前も何か武器があるなら出しておけ」

「いいえ、いらぬわ」

「ほほう……そうか、素手とはいい度胸だ」

互いに下がり、距離をとる。準備が完了するのを確認し合い……ついに決闘が幕を開けた。

「では行くぞツツツ！ うおおおおお!!」

「とりやああああつ！」

我と津島善子は、眼前の敵めがけて一直線に走り出した。

——分かる。軀からだが加速するほどどんどん強く吹き付ける抵抗の風と、我らの辺りをとめどなく散る重圧の気が。

目測20m、15m、10m。刻々と間が詰まっていく。

勝負はおそらく一瞬で着く！

「へふっ！」

「……あ」

本当に一瞬で着いてしまった。津島善子が不意にコケたのである。

「お、おい」

「うう……いたた……」

寄ってみると、彼女が右膝を擦りむいているのがわかった。大事には至っていないが、とりわけ軽い傷というわけでもない。目に涙を溜めて津島善子は痛がっていた。墮天使にも、ダメージという概念が存在するらしい。

「チツ……待機している」

我はそう言いつけ、一度通学バッグが放つてある地点まで行き、消毒液リカバリーウォーターと絆創膏リトルプロテクターを持ち出して彼女の元へ戻った。

「痛覚に刺激がいくだろうが、耐えろ」

すぐさま、傷口に消毒液を吹きかける。本当は先に水洗いするのがいいが、近くになるので仕方ない。ピリピリしたのだろう、津島善子は涙目のまま僅かに身を震わせた。だがしつかり我慢しているようだった。

「喚かないだけ上等だ」

「うっ、うるさい!」

憂さ晴らしついでに、調子に乗って撫でてみると津島善子は悔しげにそっぽを向いた。また、他にも色々と思うところがあつたのかもしれない。

「治癒完了。動いていいぞ」

我は絆創膏が傷口を覆うように貼り付けてから、彼女を解放した。応急処置する機会は今これまでにあまり経験がなかったので慣れておらず、案外時間を要してしまった。

「……………ありがとう」

「ぬ!？」

と、我は再び衝撃を受けることとなった。津島善子が我に礼を言ってきたのだ。照れくさいのだろうか、ヤツは顔を宝石ルビの如く紅くしていた。だが……まあ、悪くない気分だ。

「今、何か言ったか？」

「………何も言っていないけど？」

「だが、『ありがとう』とかなんとか」

「なっ——聞こえてないフリしてたの!？」 墮天の力であなたに災難が降りかかるようにするわよ!」

半乾きの涙を袖で拭って、脅迫を試みる津島善子。しかしヤツのそんな仕草はむしろ可愛らしくさえあり、威厳は皆無だった。

「ククツ……面白い、やってみろ」

「このーっ!!」

——今日は実に、騒々しい日だ。

雲の流れ行く青空を仰ぎ、我は苦笑するのだった。

## 墮天使と黒騎士は契約した

マイスベース・ゲート  
自室のドアが開門する音で、遠のいていた意識がほんの少し鮮明になる。

「ん？ ……んんう」

しかし我は意に介さない、慌てはしない。おおかた、母が起こしにでもきたのだろう。黒騎士は朝に弱いのだ、まだエネルギーのチャージが要る。眠りに沈みそうになりながらも、我は途切れ途切れに問いかけた。

「母……よ。時間の猶予は未だ健在のはずう……遅刻<sup>デットエンド</sup>だけにはしない、我に、一さじの休息をくれまい……か？ ぐう……」

「……」

返事はなかったものの、無言であるあたり母は了解をしたに違いない。沈黙は肯定とみなす。よし、これで安心して回復につける。我は気を取り直してひとつ寝返りをうち、思考を――。

「起きなさいい!!」

止めたその時、耳に不<sup>大</sup>予測<sup>音</sup>のアラームがぐわんと響いた。

「っ!？」

たまらずにかけ布団スリーフエザーを蹴り飛ばして身を起こす。開けた視界ひらに部屋の真つ白な壁紙が飛び込んできたところで、ようやく我は起こされたことを理解した。

こんな形で邪魔を受けたためか、心へ強い不満の情が渦巻いてきた。おかげで、僅かに残っていた眠気が泡のように消えていく。

——還らぬ安息のひとときを返せッツ！

「よ、よよっ、よくもやってくれたな!!」

想いをぶつけるつもりで我は母が立っているであろう方へ向く。

「はあい、リトルデーモン」

だが。そこには母ではなく、別人が立っていた。我が通う中学校の女子生徒が着る制服を纏う少女が。しかも、肩から背中の中まで続く漆黒マントを羽織っていて——普通の奴はこんなもの身につけない。

だから、見間違いでは断じてないというのはすぐさま判別できた。我は咄嗟に後ろに飛び退き、憩いをぶち壊した当人を指差して叫んでしまう。

「ななな……っ、何故ここにいるんだ墮天使いい!?!」

いたのは、津島善子あまだったのである。彼女は間抜けに絶叫する俺を見て、愉しげに瑞々みづみづしき口元を緩めた。

「眠りを切り抜けたようね。……それと案外可愛らしい寝顔するのね、あなたって」



「やかましいわー！」

満足そうな、それでいてからかうふうに語りかけてくる津島善子。当然声音は墮天使クオリティ。私の気も知らないで、全くどうしようもないヤツだ。

……む、そもそも津島善子は、どうやってここに侵入インスライドしたのだ？ 自室の窓は開いていない、すると彼女は玄関を通ってくる必要があったはずだ。また、この時間だと母親と対面することになる。では我が母は、墮天使的振る舞いを目にして敬遠はしなかったのか？!

「こら湧丞！ あんまり善子ちゃんを待たせちゃだめよ、お友達なんでしょー！」

思考を巡らせていると母の注意がドアの向こう側から飛んできた。ここで我は悟る。

——こいつ、母に対面したときは人間津島善子として挨拶したのかツツツ！

「さあリトルデーモン、学校に行くわよ！」

状況を呑み込むので精一杯な我をよそに、津島善子は私の腕をぐいぐい引つ張ってそんなことを促してくる。

「くっ、迎えに来いとは頼んでないぞ！ だいたいなんだ『リトルデーモン』って。妙なあだ名を付けるんじゃない！」

「へ……？」

我がやけくそ気味に言うと、ヤツはきよとんとしてこちらを見つめ——やがて体をぶ

る。ぶると震わせ始めた。

「む、悪いことでも口にしてしまったか？」

「よ………」

「よ………」

「湧丞のバカあーっ！ これでもくらえっ！」

「おぶあっ?!?!」

顔面に、圧迫の砲弾が直撃<sup>ダイレクト</sup>。津島善子がベッド上にあつた枕を取り、それをこちらめがけて投げつけたのだ。本体の柔らかさ故に痛みはなかつたが、インパクトある振動が当たつたそこに数瞬伝つた。

「ええええ!! 理不尽すぎるんだけど!!」

我は起き上がり、訴えかける。ダメージは皆無であつたが、我の素をうっかり引き出させるには十分すぎる威力の出来事であつた。

「忘れたの!?! 昨日契約を結んだばかりなのに……」

「けいや……えっ? ど、どういうことだ!」

むくれる津島善子の口から『契約』とのワードが出たが、何のことかわからず我は首を捻る。

「……………あっ」

けれども、ふっと思い出して。

「確かに契約したな、墮天使よ……」

我は他人事のように呟いた。

~~~~~

あれは昨日——決闘が一区切りついてからのこと。

本来ならあのまま別れるつもりであったが、我と津島善子はどこまでも延々と続かずらみえる防波堤沿いの道を歩いていた。なんと家の方向が同じで、しかもかなりのご近所だというのが判明したためだ。

「——津島善子」

「なに？」

なんとなく呼びかけると、津島善子は疲れた様子で答えた。先程まで練り広げていた決闘の影響であろう。……いや、おそらくは決闘後に意地の張り合いをしすぎたせいだ

が。我にも変な疲労がたまっている。

「呼んでみただけだ」

「用がないなら話しかけないでよね。ヨハネは魔力の供給で忙しいんだから……」

我の中身なき返しに、ふうつと溜め息をつく津島善子。だがヤツはハツと顔を上げると、いきなりあたふたとした。

「さっきの勝負って、どっちの勝ちになるの!？」

「あー……そういえばその点が曖昧であったな」

どうも決闘の勝敗について気になっていたらしい。我は顎に手をあて少々思案し、結論を出す。

「負けだ、我のな」

「……なんでよ？」

あつさり和我が敗北宣言したことが気にかかったのか、津島善子は怪訝そうな目をこちらに向けた。

「考えてみれば、我は敵とはいえ女に武器を振り回したのだ、それは〃黒騎士なりの騎士道〃に大きく反する。仮に勝ったとて意味などなからう」

「ふーん、結構ちゃんとしたポリシー持ってるのね」

「まあな。ということでお前の勝ちだ、満足か？」

「理由はわかったけど、ちよつと不本意」

微かに複雑げな表情をする彼女に、我は続ける。

「実際は中断したつきりだからな。いいだろう、いつか再び剣を交え——おつと、騎士道上もうお前とは戦わぬ」

「うふふ、あなたの騎士道つてどうにも脆そう」

「かもな。が、お前こそ墮天使としてボ口を出しすぎているではないか？　クククツ」

「うっさい！　……ふふ」

最後は双方とも小言をこぼし、笑い合った。

ああ——心踊る。必要以上に馴れ合ってしまったからかもしれないが、津島善子とは波長が合うように感じる。

「ねえ……えつと……その」

と、急に津島善子が静かになり——たどたどしく言葉を紡ぎ始めた。

「どうした？」

なかなか話の本筋に入らないので問うてみると、彼女は緊張した面持ちでこんなことを言い放ったのだった。

「よ——ヨハネのリトルデーモンになりなさい！」

「ぬ？」

~~~~~

……そうだ。昨日をもつて我は彼女の『リトルデーモン』になったのだ。別に比喻ではない。リトルデーモンは、リトルデーモンだ。あ後は彼女の家で儀式やら呪文やらをやらされて大変だった。

「思い出したならいいの！」

津島善子はぶつきらぼうにそう言って背を向けると、ドアの方に歩いていく。毒気が抜かれた我は、漠然と起床及び登校の意を固め、おもむろにベッドから降りたのだった。

「……ああ、学校に赴くとするか」

——決闘する前に津島善子が言おうとした、彼女の欲する勝利代償。それは『リトルデーモンになつてもらうこと』。彼女いわくクラスの民々にも頼んでみたことがあるらしいが、男女ともに話がうまく通じなかつたそうだ。

気持ちは理解できなくもなかつた。我も3ヶ月前に黒騎士になつたと初めて学校で

宣言した時は、クラス的全員からあからさまに困ったような顔をされたものだ。あれがどれほどこたえたことか。

結局のところ、津島善子の望みを端的に言うなら『友達になって』ということ。

「さっさとしないと置いていくんだからね！」

「うむ。それなら我を置いてさっさと行け」

「ちよつとは焦りなさいよー！」

つくづく困った墮天使である。まあ、我は制約に従ったに過ぎぬ。異論を唱えるつもりは毛頭ない。

「だったら落ち着くことだな、墮天使よ」

我は墮天使をなだめつつ、通学バックを手取るのだった。

——我は黒騎士。またの名を手尾湧丞。昨日をもって津島善子こと墮天使ヨハネの『リトルデーモン』になった、類い稀なる騎士だ。

「つて、パジャマのままじゃない！ 刀も忘れてるわよ！」

「あ……すまぬ」

世界は、今日も平和である。

## 墮天使と黒騎士の甘美（？）な昼休み

我が「墮天使」の存在を知ったのは、なにも邂逅したあの日が最初ではない。そもそも我らは、はじめから同じ中学校に通っている。クラスは違えど、1年時から見かけることぐらいはあったものだ。決定的に違ったのは……その頃から奴は既に彼女は墮天使で、当時我が黒騎士ではなかったということ。すなわち、元来の我は「平凡」だったのである。

我が黒騎士に目覚める最終的な<sup>契</sup>きかけ<sup>機</sup>は、ダンジョンにあった黒刀だ。

しかし。

普遍的な存在であることに疑問を抱かせるようになった根本の原因は、異質に成り変わろうと我を奮起させたルーツは――。

くくくくくくくくくくくくくくくくく



「さつきからなによ?　じーっとこっち見つめて」

「……………たまたまだ」

「さてはヨハネの美しさに——」

「あー、麗しい。麗しいとも」

「むっ……………」

適当に流したのが気に食わなかったのだろう、墮天使が小うるさく我を咎め始めた。そんな彼女に沈黙を返しつつ、広げた風呂敷の上にある箸を手取る。

現在の刻は、午前の授業が終焉したことによりもたらされた昼<sup>ミディアム・レスト</sup>休み。ゆえに、今は

昼食を取っている。ただし場所は教室ではなく屋上だ。初夏の日射が直に照りつけてくるので若干むし暑さを感じるが、我のような黒騎士にとって民<sup>クラスメート</sup>々が賑わう教室は性に

は合わぬ。ここは校則上立ち入り禁止となつてゐる場所ではあるが、教師らに見つかりさえしなければ問題は無い。黒騎士は一般の枠にはおさまらぬのよ、フハハハハ。

ぬっ、今日の玉子焼きうま——

「聞けーっ!」

「うっ!?!」

なんと唐突、額にコツンと軽い衝撃。虚を突かれたため、体が微弱ながら跳ねてしまふ。勢いあまって玉子焼きを飲み込み、喉が詰まりそうになる。ちなみに箸は地べたに落ちた。とんだ災難である。整理がつけられず至急横を確認すると、こちらにじとりとした目付きを向けている墮天使。

「はあ、やつと反応したわね」

ヤツの指は丸に近い形を型どつていた。遅ばせながら理解する、どうやら我は指弾デコピンを浴びせられたらしい。だが、拳を浴びせたりしないあたり、なんだかんだでヤツの優しさが見え隠れしていた。

「不意打ちとは味な真似をツツ！」

「だって上の空みたいだったしー」

「……否めぬな」

言いつ分はまったくの事実なので認めると、墮天使は意外そうな顔をした。おいなんだその顔は。大人げなく反発するのが標準だとも思っていたのか墮天使ヨハネよ。我は二重の意味で敗北感を覚えて項垂うなだれた。

ああ、元はといえば今日とて食事を共にする予定まではなかったのだ。教室を出たら、ヤツが付いてきたのである。禁じられし境地に赴くのだぞと釘を刺したりもしたが、余計にヤツの背徳心を掻き立ててしまった。結果、今に至る。墮天使のリトルデー

モンになってからというもの、時間を共有することが増えた気がする。

「つて、まずいぞ。箸が落ちた」

「あ。そういうば今ので……その、ごめんさい」

「落ち着け、責めるつもりはない。まったく、墮天使ともあろう者が邪悪性皆無とは笑わせる。むしろいい子だな、さすがは、善子、」

「だから、ヨ・ハ・ネ!!」

とはいえ、墮天使を忌み嫌っているわけではない。ヤツと過ごす時間は愉快ですらある。その中身が他愛なき痴話喧嘩であることが多々であるのは置いておいて、な。

津島善子

彼女という墮天使の前では甘さが出る。いつからか、こんなに丸くなっている。我は

己の黒騎士らしくなさに苦笑をこぼした。何故か、どこかあたたかな弾みを胸中で感じながら。

さて。放っておいてもいいが、ひとまず我は首を横に降りヤツを宥めにかかる。遠目の斜め下に見える校内の時計は近いうち昼休み終了の刻を指そうとしている。したがってヤツとの話にひとまず区切りをつけ、迅速に食事を済ませなければ。

「ともかく、今の惨事は我に非があるのだ。気にすることはない。拾って使えば問題あるまい」

「えっ? ……ダメよ、病気になるかもしれないじゃない」

「黒騎士を舐めるなよ。たかが一度、しかも1分にも満たない時間しか地に伏していない箸を用いた程度で、病気を患う我ではない」

「そういう問題じゃないわよ」

とは決めたものの、なかなか会話は終わらない。衛生面を考慮してか、我が落ちた箸のまままで食事をすることを墮天使は躊躇う。ふむ、ちゃんと常識に乗っ取っている。一応墮天使のくせに。

「ククツ、いつも墮天使を主張するわりには変なところで生真面目だな。ではどうするのだ。弁当を手掴みで食えと？ それとも犬食いか？」

少しばかり、挑発気味に笑ってみせる。意地悪したいわけではないが、困った様子の墮天使をなんとなくからかいたくなった。む、やはりこれは意地悪ではないか。それはさておき、次にヤツの口から出た結論は我が想像するところをあっさりと超えていくものだった。

「いいわ、じゃあ箸を貸す」

「……な、は？ なんだと？」

淡々と返された答えに、我硬直。そして、唐突に起こされた1ヶ月前以来か一瞬素が出る。思わず目の開閉を繰り返す。

「そのままの意味よ。困っているリトルデーモンに救いの手を差し伸べるのは、然るべ

きことなのです……!」

「違う、そうじゃない」

いつもみたく声のトーンを変え、そして自信満々に両手を空に向かつて拡げる墮天使だが、ヤツはなんにもわかっちゃいない。いや、わかって言っているのかもしれない。こいつ、わざとなのか? まさか逆手に取ったのか? 我はしてやられたのか? ヤ、ヤツの思考が読めぬツ……! 黒か白かは定かではない。しかしいずれにしろ、我に箸を貸すということは――。

「フフフ……なあに? 言いたいことがあるなら、ハッキリ告げてごらんなさい?」

「察しろ。その手の色事は、大切な存在が隣り合った際の瞬間のために残しておけということだ! 恥ずかしいから一度しか言わんぞ。それをしたら、俗にいう間接キ――ううんツツ! ……いいか? わかったら直ちにその案を棄てるのだ」

白だった。平然、堂々といった言葉が似合っていた墮天使の面構えが崩れ去ったのが証拠。自分がしようとしている行為の難点を理解したらしい。

「や、野暮なこと気にしてんじゃないわよ! ったく子供じゃあるまいし!」

どうやら我は展開の処理を誤ったようだ。空気が刻々と気まずつくなっていく。すっかりペースを乱したヤツの顔には、ほのかな朱が差していた。

我は黒騎士として失格だと久々に痛感した。この度、完全たひに焦ってしまっている。ただ、かのような現場に居ずらい雰囲気になったことは未経験なのだ。言い訳するつもりはないが、本当にどうすればいいかわからない。滞った展開を打開すべく、至急口を動かす。

「よよよ、よーし。ならば厚意に甘え、頼もうではないか……」

されど焦りはミスを生む。やってしまった。先に意地が勝利してしまった。こんな時に限って、頭に描いていたのとはまるで反対のことを——我は内心大いに悔やんだ。墮天使がさらにわなわなとし始めた。

「な……本気!? た、タイムよ！ ちよつ、タイム！」

「問答無用、さあ貸せ」

「うわあーっ！ やめろ変態！」

なんと変態呼ばわりである。が、もう後には退けぬ。ヤツがアイデアを取り下げるまで煽るしかない。

「自ら提案しておいてそのザマか」

「うっ」

「実はシャイだなんて、随分と可愛らしいものだ。フツ、ヨハネとあろう者が聞いて呆れる」

「……言ってくれるじゃない! こうなったら墮天使の本気を見せてあげるわ!」

盛大に逆効果であった。墮天使の方もやけくそになってしまった。必死だったためか忘れていた、ヤツにも意地ところつ張りな性質があつたことを。

「ちが……は、早まるな。ここは穩便に」

「問答無用っ!」

「ぐぬぬ、さっきの台詞がそっくりそのまま還つてきたア……!」

「覚悟はいい?」

「くうツ!! 退却!」

「あつ、待ちなさい!」

「おおつ、落ち着け、落ち着け墮天使くツ!!」

かくいう我も、まるで落ち着いてはいないのだった。

こうして。墮天使と黒騎士、たった二人しかいないために僅かに広く感じる屋上を舞台とし、意図せぬ鬼ランアンドランごっこが始まった。

傍からすれば、微笑ましき追いかけてこの図に見えるかもしれない。だが一般の奴らにはわかるまい。この戦いは戯れのそれではなく、意地と恥メリーゴードとの空回りなのだ。

なお——後になって（ちょうど午後開始の鈴が校内を抜けた時だったか）、双方とももつとも簡単な解決策に気付いた。そんなに焦らずとも、初めから箸を洗いに行けば事は済んだのである。互いに盲点だった部分を自覚してからは、恥ずかしいというのを通り越し、なんとというかどうしようもなくなつて、とぼとぼと教室に戻つた。

正直茶番以外の何者でもなかつた。ゆえに我は、もうこの件を闇に葬ることにする。黒歴史というやつだ。それは、墮天使も同じようだった。ちなみに、結局飯はロクに食べられなかつた。ちくししようめ。



## 墮天使が風邪を患つたらしい — 前の章 —

時が過ぎさるるのは早く、墮天使との昼休み騒動から約2週間が経過した。初夏をやや通り越し始めた現在5月中旬、あれからはこれといった出来事もなく、平和な日々を過ごしている。

というの否……窮地が迫りつつあった。しかも二つの方面の。

「ははははははっ！」

学校から家へ還る最中、たまたま誰もいない通学路にて。我は辺りを駆け回りながら笑っていた。左手数十メートル向こうに見える大海はやや荒れている。ただいま蹂躪している大地には、滴が軽く跳ねる勢いの雨が降り注いでいる。おかげで水と一体化。だが『危ない』なんて問題ない、我は直に大空への闊歩を始めるのだから——。

「あつはつはつはつはあ！」

自暴自棄になつていゝのではない。そういうくだらぬことをしたい心境なのだ。自暴自棄になつていゝのではない！

「ははは、は……」

我はしだいに身体の力を抜き、やがてその場で押し黙つた。さすがに今回ばかりは己

の行為が馬鹿馬鹿しく思えてしまった。黒騎士だつて時には自重する。クールダウンしたせいとか、ずっと漂つていた湿り気の濃い匂いが一際鮮明に嗅ぎ取れた。

……まあそんなことよりも、だ。我は雨に打たれながらも、腕を組んで熟考する。この窮地ダブルショック、如何いかにして捌さばいてくれようか。

まず第一の関門は『中間テスト』。恥ずかしながら、我の勉強の力量といふのはてんでたいしたことがない。国語だけはそこそこの成績を残せなくもないけれども、他は壊滅的だ。約一週間ほど前に戻つてきた英語の小テストなど、もはや目も当てられぬ結果であつた。とはいえそここのところは一夜漬けでどうとでも事を運べるであろう、おそらく。むしろ第二の関門の方が深刻性は高い。

来月あたりに予定されている東京への修学旅行、その班決めである。ホテルの部屋割りや新幹線のシート配置については、元より出席番号順および男女別で勝手に割り振られるからいい。困つたのは自由散策時や夢の国を渡り歩く際のグループ、ここだ。班決めは今日の学級活動の時間、多くの奴らがだいたい固めたのだが……。

簡単に言うとな、我には組む相手が現れなかつた。もちろん行動しなかつたわけではない、自らクラス中の奴らを誘つてみたりもした。が、敬遠されてしまった。既に店員人数オーバーだの相手がいるからだの、理由は様々。しかし明らかに浮かない彼らの顔つきを見れば、単に嫌だからというのがよく伝わつてきた。

『そのの貴様！ この黒騎士と組み、新天地を踏み往かないか？』

おかしい、アレは完璧な結束申請だっただけなのに。いったい何がまずかったのか理解に苦しむ。まあ我は最終的に単独行動でも問題はないのだが、厄介にも最低二人以上という学校行事独特の制約があるゆえ絶対に誰かと組まねばならない。散策仲間を定める期限は今月いっぱい。余ったの人間は我を含めた数人……ただし、多くは女子。若干輪の中に入りづらくある。

「……かといつて、じつとここにいても仕方ないか」

しばらく思考したものの、妥当な案が導き出せなかつたので歩みを再開する。我は家へと還るだけではなく、これから他にやることがある。こいつこそ最優先事項だ。

津島善子<sup>墮天使</sup>への通達。

というのも実は今日、墮天使が学校を欠席した。教師いわく風邪だそう。よって学校で受け取ったお知らせのプリントといったいくらかの配布物をヤツの家へ届け出ねばならなくなつたのである。宿題の内容といった伝言も兼ねる。この役回りはどんな者でも請け負えるそうだが、満場一致で我に任せられた。何故だ。正直言つて仕事を預けるのなら同姓の方が適任なのでは、と感じる。

うんうんと唸っているうち、ちょうど墮天使が住み着くマンションが目に入ってきた。高い。10層以上の構成なのだから当然か。下から眺めるとなおのこと迫力あり

だ。ただ、我とヤツの住み処はごく近いためよく登校時には見かける上、我が敗北して（少々強引ではあったが）契約の儀式をさせられたあの日、内部へ足を運んだ経験はある。もうさすがに啞然としたりはしない。

さあどうする。赴くか、それとも仕切り直してから通達に出るか。荷物を軽くしてき  
てからでも悪くはないし、直行してもいいかもしれない。

……ヤツの容態が気になる。ちよつとだけ、ほんのちよつとだけな。初めて墮天使抜きで1日を過ごしたが、調子が狂うのなんのだった。はじめは静かになるぞとほくそ笑んでいたのに不思議なものだ。

「……っ」

ヤツのために錯雑とした想いを抱くのも癪しやく。やはり赴くツツ。我は突入を決意し、マシヨンの入り口へと前進……していこうとして、立ち止まる。肝心な点を思い出したのだ。危うくスルーするところだった、訪問するにしては——我はあまりにも濡れすぎ  
ていた。

機敏に方向を変え、己の拠点めがけて我小走り。通学バッグには専用の雨具ファイルターをかぶせてあるため渡すものは無事だが一時撤退は必至。おのれ雨め許さぬ！ いや、逆恨みは  
よそう。自業自得。

せつかくだ。赴く準備が整ったら、出直しついでに最寄りのスーパーで土産でも買っていこう。そして、ヤツへの納品と報告を済ませたら速やかに去ろう。『心配しているの?』などとかからかわれでもしたら、たまったものではない。言わずもがな、悔しくなるという意味で。

——急ごう。病魔に侵おかされていようとときつとあいつはいつもと変わらぬだろうが、着くのが早いに越したことはない。

先刻から衰えを知らない雨の殴打を尻目に、我は走る速度を僅かに上昇させていくのだった。伝う粒が初夏に似合わず、ヒヤリと冷たかった。

く　く　く　く　く　く　く　く　く　く

——あれ。今何時?

意識が覚醒して最初に考えたのは、そんな他愛もないことだった。自室の明かりが点いている。そういえば寝るときに消灯したか曖昧だったような。そもそも風邪引いてたんだっけ。それで学校にも行けなくて……。

ぼんやりする頭のまま、私はゆっくり身を起こす。瞬間、少し頭を締め付ける感覚に襲われた。体もまだ軽くない。

「クツ、まさかこんな形で墮天してしまうなんてね」

誰もいない空間でそんな言葉を紡ぐ。だけど掠れ気味で、声に小悪魔感たつぷりの張りは込もってくれない。

「しんどい……」

体調がどのくらいか、とりあえず知っておかないと。私はベッド脇にある体温計のケースを手繰り寄せて本体を抜き、そつと腋に挟み込む。その間にかすった肌には、確かな温かみがあった。少なくとも病み上がりには届いていないみたい。

十秒くらい待っていると、ピピピと測定完了の合図。最近の体温計は測定早いじゃないとか、できれば平熱近くが望ましいわねとか思いながら、熱と危険度を知らせてくれるそれを引つ張り出す。

無情……ッ。四捨五入したら38℃に繰り上がる数値が示されていた。

「んうっ」

静かに、だらつと。私は再びベッドに倒れ込んだ。さすがのヨハネも今回は大人しくしているしかなさそう。

寝返りを打つたら、よく座っている机が目についた。上には広げつばなしの黒風呂敷と隣に蠟燭付きの台が。椅子には裏の布地を除いては漆黒なローブがかかっている。そうそう、朝に除悪の儀式をしようとしたんだ。だるくてできなかったけど。改めて執り行おうかな、ちよつと迷う。

……やめた。今は何をする気も起きない。

「……」

なんだか心細くなってきた。ママは仕事を休むわけにもいかななくてご飯だけ作って会社へ行っちゃった、だからこの部屋はもちろんその向こうもひとつこひとりいない。外から大雨と、水が弾ける音が途切れることなく聞こえてくるだけ。

学校はどうなっているだろう。昨日聞いた話じゃ修学旅行の班決めがあるとか言っていたし。というか、一人ぐらい諜報がてら見舞いに来てくれたっていいじゃない！ ああ、これが神々による墮天使へのさらなる追撃だというの……？

涙が出てきた。疲れているからかしら？ ……いいえ、泣いてなんていないわ。これは風邪のせい。墮天使の泪はある。でも、墮天使は涙を流さない——。

その時、白いような光が射し込んだ。何が起こったかはすぐわかった。雷だ。  
「…………え」

にも関わらず私は驚きの呻きをあげた。というのも、不意に部屋が暗転したから。追つて、今度は重い雷鳴が突き抜ける。

放心していると、また空が光に染まった。次いでこつちを嘲笑うように重低音。普段から「魔界」とか「地獄」とか言ってるけど、まるで本当にそういう所に突き落とされたみたいだった。

いつしか体が震えていた。特別雷に苦手意識を持つているわけじゃないのに、変よ。墮天使なんだから、こんなのなんてことない。きつと私は弱<sup>ヨハネ</sup>っているだけ。間違いないわ、そうに決まってる。

屈しない、屈しない、屈しない。  
効かない、効かない、効かない。

自分にそう言い聞かせる。それでも沸き立つ不安は収まらない。張り詰めた気持ちだが、すごく嫌なのに鼓動をもっと早めていく。さつきうっかり布団を蹴り飛ばしたせいで、寒気も強くなってきた。しまいには、目に溜まったものが溢れかける。

怖い——。



そこに耳へ飛び込んできたものがあつた。それは留守か否かを問い掛けるインターホンの余韻。必死すぎて、呼び出しを受けているなんて全く気付いてなかつた。

——誰？

薄ら寒いので雑にタオルケットを羽織つてから、おそるおそる玄関に歩き出す。体と足取りはどうしても重い。だけど行く。助けて欲しい。縫すがりたい。ねじ曲がった亜空間みたいにざわついた心の波を抑えようとに努めながら、私は部屋の向こうへと進んだ。

## 墮天使が風邪を患つたらしい — 後の章 —

扉からぬつと出てきた墮天使を視認して、我は大きく動揺した。ヤツの様子はお世辞にも快活というラインには程遠いものだったから。最低でもそこそこの快活さはあるだろうと想定していた、それが甘かった。

熱で汗をかいたのだろう。額やこめかみの所々にはべたりと毛が張り付いている。また、髪は完全に下ろされておりお団子も作られていない。服装も質素な薄。パジャマ。いつもの綺麗な付属品は見当たらない。病魔の所為か、目はどこかとろんとしている。

が、中でも一番気にかかったのは墮天使が瞳に涙を湛えていること。総じて、ヤツはあまりに弱々しかった。

「ど、どうしたのだ。何があつた」

「……」

訊けば墮天使は答えずに俯き、唇を噛みしめた。何かを堪えるようにして。我はかけ言葉を探すが、こういう時に限ってまともに脳が仕事をしない。普段なら憎まれ口含め、いくらでも浮かんでくるというのに。

「……っ、うっ」

対応に悩んでいると、やがてとんでもないものが聞こえてきた。嗚咽だ。いまいち事情が飲み込めないが大変だ。墮天使が泣き出してしまった。予想だにしていなかった急展開の連続に、頭が混乱してくる。

そして——同時に苛立ちが込み上げてきた、己自身に。経緯は不明にせよ、涙を流す女を見過ごしていいのか。おのずと握っている拳の力が強くなる。辛気臭くあるのは屋外で暴れる雷雨だけで十分なはずだ。

(……よっ)

墮天使には何をやってるのと思われるかもしれないが構わぬ。浮き足立っているようでは本末転倒だ。我は持参してきた土産入りのビニール袋を緩やかに地面へと手放し、両手を頬付近へと添え——

「どっせいやッツッ！」

勢いを込め、素早くぶち当てた。

破裂を彷彿とさせる音が抜けた後、じんとする衝撃が双方の頬に浸透していく……痛いつつ。墮天使がぼかんとする。やはり奇行には驚きを隠せなかつたかつたらしい。

が、気は引き締まった。呆けるヤツをよそに、我は胸に手を当て博打の一言を投げかける。

「飛び込んできてもよいのだぞ?」

許せ墮天使、あるいは彼女の生みの親たちよ。今の我には冗談めいたフオローしかできなかつた。くそつたれめ、己の応用力の無さを嘆きたい。だが、もはや何でもよいのだ。ドン引きされようが笑われようが、すすり泣くヤツを元氣付けるツツ!

そうやって決意していたからこそ、我は墮天使の反応に頭が真つ白になった。

「つそ、それなら……つ、あなたの胸を借りるわね」

温もり、宿る。我の胸に顔を埋める墮天使と、背面に腕が回されている感触でようやくピンときた。

——墮天使が、本当に飛び込んできたのか。

「ちがつ……うのよ、変な意味じゃつ、ないのよ。あ、あのねつ、なんか安心しちやつて

……つぐ」

「お、おう」

墮天使は絞り出すように教えてくれるが、我は氣の利かない返しで精一杯だった。なにしろこのシチュエーションに付いていくのにやつとなのである。黒騎士とはいっても、女に抱きつかれた経験はない。しかも解決になつていない、むしろヤツが泣きじゃくってしまった。

ただ、墮天使から先程までの悲壯溢れる雰囲気は感じ取れない。もういつそのことヤ

ツの涙が枯れるまで待った方がよいやもしれぬ。それにしても……ククツ、自信をなくしそうだ。我がこれほどへっぴり腰レだったとは。大胆だと自負していたものだから、呆れの度合いは割り増しだ。

「墮天使」

「ひつくつ……うん」

「通達に來たんだ。ハツドコンディション絶不調のところ悪いが、お前の時間を少しもらうぞ」

「……うん」

……まったく、調子が狂う。墮天使がすつきりとするまで、我はヤツの肩を軽く叩いて宥めるのだった。

~~~~~

「……調子はいかがかな？」

羽休めに勤いそしんだ効果は出たか」

「最悪よ……」

「だろうな」

電力がまだ回復しないゆえに暗めな廊下を、二人して歩く。立ち話もなんなので、墮天使の部屋で詳しく情報交換をすることになったのだ。

……などと言えば聞こえはいいものの、実はいくらか事情が異なる。中での談話を発案したのは我。元はすべての用件を玄関で済ませるつもりであったが、どうしても今の墮天使を放っておく気にはなれなかった。墮天使によればヤツの母は仕事に行っていないとちようど独りだったとのことで、だからなおさらだった。

「停電になっていたとはな……」

「天気が天気だからしようがないけど、余計に取り乱しちゃったわ」

進みがてら本音を吐露する墮天使。こんなことを口にできる辺り、高ぶった心はだいぶ平常を取り戻したようである。だが、さっき外で見た限り顔色は優れていなかった。加減はどのくらいなのかヤツからまだ聞いてはいないが、完治はしていないだろう。

そんな分析をしていると、墮天使が右斜めの扉をここと指差した。どうやら着いたらしい。

「む？　貴様の部屋はこんな位置だったか」

「自分の家だし、多少暗くてもわかるわよ」

納得して墮天使の後に続く。間もなく境を越え、ヤツの自室へ。足を踏み入れるのはこれで二度目。よもや今日邪魔することになるとは思ってもみなかったが。

カーテンが閉まっていけないので、外の世界が明かりのアシストとなつた。無論あちら側も暗めではあるものの、電気ひとつ点かないこの屋内よりはよほど光の度合いが強い。おかげで内装はこの目にもある程度明瞭に映る。

以前一度来ているというのに、つくづく心が踊る。ここにはなかなかどうして興味引かれる小道具が多い。中世の宮殿にありそうなデザインの見やクロゼット。傘状の広がりと交差した模様が美しい電気スタンドに、独特の愛らしさを放つハロウィーン風のぬいぐるみ達。カーペットとカーテンも深紫を基調とした「魔」を感じさせるもので——語りだせばキリがないくらい、他にも未知なる掘り出し物がわんさかだ。とどのつまり、墮天使のマイルームは素晴らしい。そこらの者には到底理解できぬセンスだらうな。

「あんまりじろじろ見ないでよね」

「おっと、失礼したな。前も思っていたが、あまりに素晴らしい部屋なのでな」

「……へえ、なかなかわかつてるじゃないの」

舐め回すように室内を見渡す我に墮天使が釘を刺してきたが、褒め称えるとあつさり

口元を緩ませた。こいつ相当隙だらけだ。世間の言い方を借るなら、「チョロい」というやつか。

と、墮天使がだるそうに布団へと潜っていくのを見て我に返る。迂闊、当の目的を忘れてかけていた。我はヤツに通達しにここへ赴いたのではないか。本題に入らなくては。ひとまず魅力的な内装のことを頭の片隅に追いやり、我は荷物と共に床へと腰を下ろした。

☆

「それでな? 我との結束を誓う者がいなかったんだ、一人もな。薄情にもほどがあるとは思わぬか」

「えー……あなた、どんな誘い方したらそうなるのよ」

「『その貴様! この黒騎士と組み、新天地を踏み往かないか?』と、こんなところか」  
「あら、悪くないじゃない。なんでかしらね……」

「だろう?」

通達を終えたあと、我と墮天使は雑談するに至った。使命を果たしたゆえ帰還しようとした折、ヤツに『ちよつと待ちなさい』とストップをかけられたのだ。カッコ良く立



ち去るハラだったのに、予定とはあてにならぬものだ。ちなみに停電はあれから回復した。

「まあいい、ところで容態はどうだ。……随分と聞くのが遅れてしまったが」

「うーん、なんとも言えないわね。さつきまでは結構辛かったんだけど、話してたらちよつと楽になった気もするし」

「なんと中途半端な……」

そんなこんなで話は体調の話に転がるが、墮天使は首を傾げた。本人にもコンディションを掴みきれていないとは、実にリアクションしづらいものがある。

「ちゃんと処方箋は服用しているのだろうか？」

「そうね……リトルデーモンが墮天する直前まで眠りについていたから、朝に飲んだつきりね」

「おいおい、それはまずいのではないか」

「ぎくつー!」

少々茶化しただけのつもりだったが、墮天使がいきなり体をびくつかせた。セルフ効果音付きで。

「い、いや。ちゃんと後で飲むから大丈夫……よ、うんうん」

露骨に視線を泳がせる墮天使。なるほど確信犯だ。我は悟った。こいつ、処方箋が苦

手なのだ。かといつてい、睡眠と食事のみでは病魔の衰弱は遅くなる。処方箋を服用していないとなれば、飲ませなくては。

別の話題を出そうとでもしたのか、墮天使が考え込んだ。その一瞬を逃さず我は捲し立てる。

「良薬は口に苦し、という諺ことわざがあるではないか」

「た、たとえ病に襲いわれていても、それを墮天使はもろともしないのよ！」

さつとお約束の墮天使ポーズを取り、説得に応戦する墮天使。上がった口角は引きつっている。ほぼ間違はなくこの余裕げな態度は取り繕ったものだろう。しぶとい、それでいて往生際が悪い。……そもそも今の反論、論点がずれていたような。ああ、よほど服用したくないのか。わかりやすい。

「お前の意思、しかと受け取った。あくまで不服用を貫くわけだ」

こうなった墮天使はなかなか聞く耳を持たない、ならば無理矢理でもしないと打つ手はない。我はやれやれと息を吐き、例のビニール袋に手をかけた。元々は普通にギフトとしてヤツへと授ける所存であつたが、致し方あるまい。最終兵器だ。

許せ墮天使。リトルデーモンという名の友人である以上、鬼にならねばならぬ時がある。ゆえに我はあるモノを取り出して、満面の笑みを作った。ヤツ視点だと悪意全開に

見えるであろう。

「刮目せよ、墮天使！」

「なっ!? そ、それは！」

「いつだったか、教えてくれたよな。コレが好物だと」

「チョコレートトツ……」

墮天使が動揺、そして物欲しそうな表情をチラつかせたのを確認して我は確信する。釣れた、と。

「どうした、欲しいか。我は今、偶然にも必要としていなくてな。くれてやってもいいのだが？」

「と、惚けないでよね……最初っからお土産で持ってきてるのはわかってるんだから！」  
抗議する墮天使を「何のことだ？」とあしらひ、我は一方的な交渉を続行する。

「が、タダというのも面白くない……よって条件を出す」

不満げに我に顔を向けたまま、墮天使は口をつぐんでいた。我がこれから言うことを察しているのだろう。

「処方箋の服用だ」

「ううっ、そこをなんとか無条件で——」

「甘あいツツツ！ まさにチョコレートのような！ お前が墮天使だというのなら、

そのリトルデーモンだって悪どく・わるしく成長するのだ。試練を見事突破したならば、蕩ける甘板チヨコレットを譲渡する」

「そ、そんなあ」

「至福を手にしたくば難関に挑め、覚悟を決める。処方箋を流し込む水は我が手配する。キツチンまでは遠かろう」

墮天使、軽く涙目に。ちよつとかawaiiそうな気もする……というのは我が甘いのだろうか？ かなり大人げなかったが、ともかく墮天使を完封することに成功した。

「わかったわよお……」

これ以上なくスローに、墮天使は処方箋の入っているであろう紙の中を探り、そこから小袋を摘まみ上げた。白い粉薬だ。錠剤ならば果たしてここまで苦悩するかは疑問であったので、案の定。

最後の抵抗か、ヤツは我を一瞥した。我は無言で微笑みを返す。拒否権はないのである。

墮天使は大きなため息をつく、小袋の切り込みを真横に引き裂いた。すると本当に微かにだが、甘いのか苦いのかわからない香りが出てきた。実際この手の処方箋は複雑な匂いに違わず、色々な特徴の混ざった妙な味をしている。ヤツはそういう部分があまり受け付けられないのかもしれない。

ごくりと唾を飲み込み、開封された小袋と逡巡するようならめっこしてから——やがて墮天使は口を開け、ついに。

快晴に至らず曇り空だが、大荒れだった外の雷雨はすっかり鳴りを潜めた。墮天使が眠るベッド脇にある、横長型の目覚まし時計は5時過ぎを差している。

「んう……へへ」

「床とこから眠りの世界に落ちれば、いつもの強気はどこへやらだな」

穏やかな寢息を立てて眠る墮天使を見守る我は、こつそり苦笑する。果たしてどんな夢を見ているのか、ヤツはだらしなくニヤけている。

我が課した試練しけんを墮天使が達成して以降一悶着あつたりもした、しかしそれから早かった。処方箋副作用の眠気が出たのか、ヤツはだんだん無意識の奥へに沈んでいった。

なんにせよ、この分なら一安心だろう。

「頃合い。これにてお役御免だ……んっ？」

我が立ち上がるうとする、どこかを引つ張られている感覚があることに気が付いた。何事かと視線を巡らす、されどその根元はほとなく見つかった。

「ククツ……」

また、笑みがこぼれてしまう。我が纏う灰色コートの袖。そこを、墮天使の指がきゅつと摘まんでいた。……思えば本格的に邂逅し、決戦した日もヤツはこうやって引き留めてきていたな。

「……………いいだろう。今日ぐらいは、要求を呑もう」

……。  
どうやら帰還はあと僅かに遅れそうだ。我は今一度、墮天使の布団をかけ直した

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

それから数分後。津島宅の扉が開かれた。家内へ入ってきたのは——津島善子の母。サイズぴったりのパンプスを脱いで靴棚に片付け、彼女は愛娘のいる部屋へと向かう。間もなくたどり着き、コンコンと隔たりとなるドアをノック。

「善子ちゃん、具合はどう？　ごめんね。遅くなっちゃった——」

おもむろに押したドアの先に、津島善子の母は見た。彼女は少し驚き、そしてその表情を柔らかくする。

「あらあら……」

眼前に広がっていたのは微笑ましい光景。気持ち良さそうに寝言を呟きながら床とこについている善子と、彼女を看護する体勢のまま眠る少年の姿だった——。

## 黒騎士も風邪を患つたらしい　—前の章—

「は……はつくしよん！」

——我、黒騎士。我、黒騎士なりイイイ！

我は心の中でひた叫ぶ。とち狂つたというわけではない。あくまで自己への発破なのだ。明け方に目が覚めて起きてからというものくしゃみやみが頻発しているゆえ、鼓舞が必要と考えたのだ。だいたい、寝坊助ねぼうすけの我があのような時刻に目を覚ますのも異常だ。

「クソツ、むずむずするぞ！……はあああああつ!!」

あからさまな寒気もするので、黒刀を振り回して吹き飛ばす。すなわちヒートアップの舞。自室の中央にて行っているため、安全対策は万全。墮天使と落ち合つて学校に向かうまではあと僅かに時間があるため、それまでは体に付きまとう謎の害悪と格闘だ。

先日墮天使の心身を脅かしていた病魔が乗り移つた、というのには有り得ないだろう。第一我はそんなものには負けはしない。敢あえて言おう、『馬鹿は風邪を引かん』とな。

本当のところ、一時期はそんな考えが過よこつたりもしたが、なにせ普段と違つて妙な高揚感があるのだ。要するに絶好調、こんな状態で世間一般でいう風邪にやられているなんて可能性は……断じてないツツツ！



「っはっくしょん!!」

~~~~~

結局休んだ。おかげでベッドから出られぬ。

「クククッ……ハーツハツハツハツハ〜」

あれだけ否定しておいて、こうだ。一周回って爆笑だ。

あれから念のためと母に違和感についてリークしたところ、「それ行っちゃだめ」と宣告されたのである。風邪ではないはずだと登校を試みたが母はそんな我をいっしゅう一蹴、休暇を告げる電話を学校によこしてしまった。当初は反抗を示す我だったが、病院での判定は風邪。もはや弁解の余地は無くなった。

ただ、大人しく赴かずにおいてよかった。あれから倦怠感が押し寄せてきた上、38℃を超える熱も出た。これでは仮に学校に出ていっても、平常通りには立ち回れなかったであろう。今となっては母の判断に異論はない。

我が母に不調を密告した少し後に墮天使がやって来たりもしたものの、共に学校へ行くことはできなかつた。こちらの事情を聞いたヤツが、ぼつの悪そうな顔をしていたのが記憶に新しい。墮天使はああ見えて根は優しき女。「風邪うつしたかも」などと要らない責任感に囚われていなければよいのだが——どうしているだろうか。それと『せいぜい体を休めてなさい』と残していったけれども、あれはどういう意味なのだろうか。いいや無用な心配か。ヤツはマイペース、なんだかんだで楽しくやっていると思う。たぶん墮天とか召還とかほざいて。自ら考え出したことだが、墮天使について考えを巡らすのもうやめよう。なんというか、負けた気になる。

ともかくにも、現状において我はとある難点に直面している。それは——

「……暇だ」

そう、暇なのだ。あまりにもすることがない。これが夜ならまだ救いはあつたが、あいにく昼間だ。強いて挙げるとすればじつと回復に努めるのがすべきことだが、かれこ

れさつきまでずっと眠っていたゆえ、しばらくは無意識へと身を任せるのも難しい。

ぼうつと天井を眺めるしか時間を過ごす方法はないのかと、我は途方に暮れる。と、ここで名案が浮かんだ。

——「アレ」を読破してみよう。

かつて——といつてもついこの間だが。我は父によりブックカバー書物の衣のかかった本を託された。父はこの本を我に渡す際、中身の詳細につき口を割らずに『真髓は己の目で確かめろ、息子よ。年頃のお前の助けになってくれるはずだ』とニヤニヤ笑っていた。また父は、『俺が持つてると母さんにバレた時にヤバイ』とも言っていた。さっぱり意味はわからなかったが……。ただ時間はたつぷりある、確かめるにはまさにタイムリーではなからうか？

我はベッドを下り、本棚から例の本を持ち出す。そして、また戻つて一呼吸。

——中にはいつたい、何が記されているのだ？

どくん、と心臓が大きく波打つ。奇しくも我は緊迫していた。未知なだけに、父親が真相を濁していただけに、僅ながら恐怖に近い感情さえ湧いてくる。やはり開かない方が……。けれどもやつぱり気になる。

「とりやつー！」

最終的に好奇心が勝った。我は幾度と息を呑んだ末、閉じられし入口をめくった。

——が。

その先には私の思考に渦巻いていた想像がちんけだと思えるほど、強烈な内容が展開されていた。

「うわあっ!？」

あまりの刺激の大きさに、やけどした時みたく俊敏に身を引く。我的手から放された本は開けっ広げの形でポスンと床に落ちた。

荒く呼吸を乱した我は、しばしそれを虚ろに眺めた。

「ぐぬ……………ぐぬぬぬ……………」

やりきれなくなつて唸つた後、我は爆弾処理班の如く慎重に本を回収、さつと抱え込む。中身？ 官能的だった、とだけ言っておく。

「……………次元レベルが高すぎる」

してやられた。父には後日苦情を入れるにしろ、これはまずい。うっかり母に見つかるものなら、私の尊厳は半永久的に砕け散ってしまう。本来は父の私物なのに。

本を片手に、自室の扉をうつつすらと開く。物音がしない。どうやら我以外不在のよう

だ。思い出した、母はそのうち買物へ行くと言っていた。きっとちようどその頃合いなのだろう。なんたる幸運、今のうちにこいつを消し去る！

安静にしないというのは罪悪、ただしこの瞬間だけだ。したがって外出する。なんとかしても、私のすべてを懸けて、こいつを処分しなければならぬ。さもなければ社会的死！

私は現体調で出せるスピードをフル活用して自室を飛び出し、玄関へと走った。距離は大してないため即座に到達。続いて私は並べてあった自身の靴を履き、外に――

「……っあ!?!」

出るわけにはいかなくなり、その足にブレーキ。足音が聴こえたのだ、それもよりによつてかなり近くから。さらにはこっちに向かつてきているのか、どんどん大きくなってくる。まさかツツ!?

扉の除き穴  
ドアスコープに目を当て、先の風景を一望すると……いた。

鹽津島 天善子 使が。

楽しげな面持ちだ。服装は（裝飾込みの）学生服のままだが、なにやらエコバッグを引っ提げている。見舞いに来たというのか！ 『せいぜい体を休めてなさい』とはこういうことだったのか!?

いやいや、危惧すべきはその点ではない。このままだと——最悪の展開にツツツ！  
我は靴をゆつくり脱ぎ、玄関へカムバック。そうして一歩下がり、二歩下がり、そろそろ。それから自室へ最速戻り。

丁寧に本棚へとしまっている余裕はない。いつインターホンが押されてもおかしくないのだ。しかし最低限の隠しは行わなくてはならない。母に見つかるより、墮天使にこの本が露呈する方が何億倍も取り返しがつかぬ。

——まずい、まずすぎる。

運命とは残酷。部屋に本を隠せそうな代物は皆無であった。咄嗟に何らかの機転を利かせる他に、恥を回避する術はない。

「……やむを得ん」

使用しているベッドを見据え、我は小さく頷くのだった。

数秒後、インターホンは鳴り——。

☆

「クッククツ……あなたを奈落へと引きずりこむ悪魔、少しは弱まったかしら？」

「あ、ああ。すごぶる快調だーッ！ あはははははははっ！」

「なによ、無駄にテンション高いわね。しかもすごい汗……」

「あはっ……いやー、なにしろ今日は暑いからな」

「昨日の方がずーっと暑かったじゃない。今日なんて涼しいくらいよ？」

「そ、そうか！ つくづく風邪というものはおそろしい！ 感覚まで狂わせるのだから！！」

「わっ我としたことが、ハハッ、ハハハハハッ！」

「……湧丞、なんか変よ？」

訝しげな視線を向ける墮天使に、冷や汗が止まらない我。ドジを踏めば名誉の揺らぎかねない対面が——幕を開けたのであった。

## 黒騎士も風邪を患つたらしい — 後の章 —

大袈裟に慌てふためいてしまったが、いざ始まつてみれば案外どうということはない。在処あつかがベッドの下では古典的すぎると考えた我はあの本を布団の中に持ち込んだ、それは確かにリスクある選択であつた。しかし、この場を離れなければうまくいく……そう整理が付いたことで冷静に返ることができた。精神の安定が功を成したか、墮天使にギリギリ追及されずに済んだ。絶望絶を乗り切つたのである。

されど受難はまだ続く。墮天使がすっかり乗り気なのだ。看病に。

「こほんつ。……喜びに打ち震えなさい、苦しみの鎖に捕らわれしリトルデーモン。今日は特別に——ヨハネが傍にいてあげるわ」

キレある口調でその旨を告げ、墮天使はすと腕を組む。以前の弱々しさはなんだつたのか。あれは単なる幻か？ 良くも悪くもぶれぬ奴だ。

「ちなみにだが拒否権は？」

「うふふふ……」

墮天使が私の疑問をさりげなくスルーしたのは突つ込まないでおくとして、足元に置かれたエコバッグが非常に気になる。ローブらしき黒布地が見えている、あれは後のちに召



還か儀式でもするためのものだろうか。だとしたらかえって熱が上がるかもしれない。なんて、ヤツに失礼か。

ただ、墮天使が完全復活に至っているのには正直安堵した。ヤツがしおらしくてはやりづらくて困るのだ。ゆえに澆刺はつらつとする墮天使の姿はある意味、今の我にとつていい薬になっている。すぐ調子づくから口外はせぬが、ヤツと過ごすのは退屈しない。

とはいえど、だらだらと話したがために墮天使へまた病魔が憑いては意味がない。我は帰宅を促す。

「立ち寄ってくれたところ悪いが、我は着実に健康を取り戻しつつある。世話になる必要はない」

「うわ、バツサリね。むしろ清々しいわね」

「残るはそれなりの熱と、倦怠感ぐらいのものだ」

「見た感じちよつとそんな気はしたけど、わりと「元気？」」

「うむ。お前がどうしようと思ったことではないが、長居しては病魔がうつるかもしれないな」

「でも……まだ治っていないということね。それなら、留まらない理由にはならないわ」  
去るつもり、ゼロらしい。あつさりいなくなったらそれはそれで虚むなしいけれども。

「……ふん、勝手にしろ」

どちらにしても本調子でないには変わりなし、休息しなくてはならない。とんとん拍子で結論付け、墮天使に捨て台詞を吐いた。

そんな矢先。

「うお」

私は驚愕し、滑稽な呻きをあげてしまった——墮天使の華奢な腕が伸びてきたために。

白い掌は長らく切っていない私の前髪を掻い潜り、やがて額を包みこんだ。間を置かずして、触れられた箇所には弾力性のある柔らかき質感。こちらが高めの熱を帯びているせいか、ヤツの手は微かに冷たく思えた。

「うーん……」

覆うのをキープし、一人眉を潜める墮天使。僅かに跳ねる鼓動を抑えようと努める中、我はやつと意図を察した。検温だ。温度の加減を知りたいなら測れと命令すればよいものを、予告なしにこんな方法を試みけるとは心臓に悪い。おまけに計算抜き行動なので責めようもない。ヤツの真面目な態度が断定の証拠。

「思ったよりもひどい……うん、もつと魔力を蓄えなきゃね」

墮天使は視線を落として、ぽつりと呟く。それはまだ寝ていないとだめ、という解釈で正しいのだろうか。というよりなんでもいいから手を離してほしい、照れくさいった

らない。

「ごちやませになつた想いがうつかり表面に出ていたのか、ふと我を見た墮天使の顔が綻ほころんだ。

「ち、ちくしようめ。世話を焼いたのはお前だけではないからな？　これで対等だということをゆめゆめ忘れるなよ」

「はい」

すかさず忠告するけれども、墮天使があやすように返事したゆえにますます不恰好になつてしまった。嗚呼、ぐうの音も出ぬほど手玉に取られている。欠片でも面目が残っているうちに、我は白旗をあげることにした。言わずもがな、ヤツに悟られぬように。

「私の状態はわかつただろう。これから眠りにつくから放せ」

無慈悲、墮天使は首を振る。手を引つ込めると思いきや、そのまま頭の方まで持つていつて——撫でた。

「この際だから、いつかのお返し」

「……屈辱だ」

本当は心地良い。ちつぽけな悔しきは芽生えても、ふてぶてしく突っぱねる氣力が湧いてこない。

「氣持ち良さそうね。欲望に忠実なのはいいことよ？」

一步間違えば色エロティックにつぼく捉えられれる囁きささやさえも、安らぎ溢れるメロデーに聴こえる。それほどもでに、我は溺ぬれていた。

——離すな、眠くなるかあるいは寝付くまでそうしてくれ。

幼稚な願望が、儘わがままが口をつけて出そうになるぐらいに。この頭を委ね続けたくなる温かさが、ヤツの手にはあつた。

抵抗しないのねと悪態を突かれた件については、割愛させてもらう……。

くくくくくくくくくくく

墮天使に看病(?)してもらったことで病魔の瘴しやうき気は薄まった……のだろうか。酷い目にあつた、と憤るべきか。癒えた、と評するべきか。

「照れ屋さんなりトルデーモンだったのね、あなたって」  
「うわあああその口を閉ざせええ」

無様なり、未だに遊ばれている。前、墮天使に『甘あいツツツ！』と一喝した己を黒刀で斬り裂いてやりたい。甘いのは我の方であつた。穴があつたら入りたい。

墮天使はすごぶるご機嫌だ。優位に立とうとしてはたいい空回りする分、主導権を握る快感は相当だった模様である。

「くそっ！ 二度と病魔には負けぬ。こんな生き地獄を味わうのはもうまつびらだからな」

「素直になりなさい？ ほーら……」

「よーせーとーいーうーにーツツ！」

飛んできた手を間一髪でかわすと、墮天使は悪戯がすぎたわと舌を出した。ぬ、あざとい。おおつとまたしても心をくすぐられてしまった。やっていられない。我は布団を蹴り飛ばし、床に下り立った。

……… 妙だ。忘れてはいけなことを忘れている気がする。

「あれ、こんなところに本が……？」

「はっ!?!」

脳裏に、電撃走る。我が抜けたベッドの上を不思議そうに眺める墮天使によつて、最悪の事態を把握した。反射的に血の気が引いてくる。

「待て待て、待て待て待て待てツツツ! 開けるな、放つておけ。頼む!!」

ヤツの方へ向きがてら懇願、同時に心底祈つた。墮天使が渋々やめてくれる未来を。

「ず、随分と必死に食いつくのね。顔も真つ青にして……フフツツ、面白いじゃない」

「や、やめておけ。開けたら大変なことになるぞ? な? なつ?」

「墮天使ヨハネに隠し事は<sup>はっ</sup>ご法度よ!」

「あああああああーツツツ?!?!」

返されたのは——承知ではなく強行突破<sup>ノンストップ</sup>の意。ヤツの瞳に映るのは、制止を拒否する

つもり満々な輝き。

「えいつ!」

制止すべく接近するも時既に遅し。かくして、禁断の書は開かれてしまったのだつた。

「……へっ!?!」

束の間の絶句を経て——

「ぎゃあああああつ!!」

赤面した墮天使の、悲鳴に近い叫びが家中に響き渡った。

☆

それからほとんくして母が帰還した。ようやくこつ恥ずかしい空間から解放されると思いきや、

「まあっ！……若い、若いわあなた達！　ったくもう、いいわねーっ！」

我と我を看取る墮天使を目にした途端、いきなり母が狂喜。いそいそと茶菓子を置くに出ていってしまった。我には何がなんだかさっぱりである。墮天使は母が舞い上がった意味を理解したのか、どこか困惑したような、なんとも難しい表情をしていた。ヤツはなにかと鋭いようだ。

## 黒騎士と蜜柑少女 — 前の章 —

——墮天使と格闘ゲームに興じよう。前回返り討ちにされた雪辱せつじよくを果たすのだ！

と、放課後直前は考えていたのにツツツ！ 今構えているのは架空戦場への繋ぎ手コントローラー……ではなく、手提げ袋。先程帰還したところ、不運にも母から使いつ走り買物買いを押し付けられてしまったのである。いわく、『ちよつと昼寝したいから』とのこと。有無を言わさぬ迫力さえなければ、キツパリ断っていた。黒騎士つて実はたいしたことない、だど？ ……切り裂くぞ。

さて、それだけならまだマシなのだが。  
「ドロップアイテム行き場なき落ち物め……ふうむ」

我はもう1つの状況下に陥っていた。家からいくらか離れた傾斜気味の歩道の中で、渋っているのだ。買物使いつ走り物に向かう中拾った、財布の処遇を。

おかげで予定を潰された鬱憤うっぷんは収まったが、なかなか決断を下せずにいる。交番に届けるのが定石じょうせきなのだろうが、必ず持ち主の元へと返るとは限らない。かといって、自力



で届けようにもヒントが少なすぎる。

財布は歩道のど真ん中にあり、見た感じでは落とされてからあまり時間が経っていなかったようだった。しかしながら名の記載がどこにも見られず、さらに中身は千円札一枚だけ。他の情報としては蜜柑みかんっぽい色をしていることと、昔ながらのがま口タイプだということのみ。この段階でうろついたらとて、迅速なる解決は現実的ではない。

「ええいつ、力を……迷いの霧をかき消す力を我にツツッ！」

お手上げゆえに祈りを捧げてみる。悲しいかな、充実ちゅうじつ男女我の小さな賭けは虚空へと溶けていった。それどころかたまたま歩道を進み来ていたカツプルに啜はうこうられる始末。咆哮ほうこうの代償は、恥となりて我の精神に乗しかかった。無礼な奴らめ……近い将来歴史に刻まれるであろう黒騎士をコケにしたこと、いづれ悔やむがよい！

徐々に反対の道へ消えていくカツプルを一睨みしたりしながら、我は打開の光を探るも——時はただ刻々と過ぎていく。しばらく棒立ちした末、本意ではないが「先に用を片付ける」という結論に落ち着いたのだった。

財布をポストンバックの中に放り込み、我は改めてスーパ庶民のオアシスの方位へ向き直る、澁々と。母の頼みを押し切つて墮天使の所へ赴くべきだったか。嘆息たんそくしてしまえうだ。

海辺にいた鴉からすが、我を嘲あざけるかのように鳴いて飛び去つていった。残つたのは、一欠片ひとかけらの虚しさよ。

## ☆

平日とはいえども夕刻を意識させ始める頃合いだけあり、スーパーには少なからず賑わいがあつた。人々もそれなりに蠢うごめいている。少々練り歩けば、色々な者の買い物風景が観察できた。

例えば――。

お菓子コーナーから厳選してきたであろうポテトチップスをねだる幼い少年と、その要求を容赦なく断る彼の母と思わしき女性。どこか物寂しげな様子で惣菜ブースを徘徊する初老紳士シニアシエンツル。はたまた、天然水のペットボトルとたった一つのエクレアだけを入れた買い物籠を、せかせかとレジへ運んでいく高校生ぐらいの男も。……こいつに對しては、何故だか妙に親近感を覚えた。

油を売ってばかりもいられない、ぶらつきがてら使いつ走り遂行する。食材集めだ。想定していたより品が減っている。

賜たまわった買い物メモには、上からカレールー・にんじん・じゃがいも・醤油・そして餃子の皮とある。今宵、母がカレーか餃子の果たしてどちらを創造するつもりなのか興味深い、すべてを完了せぬことには始まらぬ。よつてまづは、現在地から最も近い野菜

コーナーを目指す。

幾度となく来ているので、売り場の構造は頭に入っている。右往左往うおうさおうして品を獲得していくような高揚はなく、頼まれたものを集めて会計を通せば終焉。もはや決まりきっているルーティンをなぞるのみ。

つまりらぬのもあつてか、予期せぬような面白きことが起きてくれやしないだろうかと——そこらの人間が抱きがちな願望が浮上してきた。くそつたれめ、腹いせに己の土産も買つていつてやろうか。

通りすがりにも届かない程度のボリュームで、我が愚痴を溢した瞬間であつた。現在進んでいる直線の左右一定の間隔ごとにある別ブースへ分岐する道、その一角に。

——びよん、と一本だけ際立つて生えている橙の根アホ毛が見えた。

びったり曲がりきるところだつたのだろう、それは間もなくして角の奥に消えていった。

「あれは……?」

放つておけず、立ち止まる。少しばかり特徴的な髪の毛など、精々一瞬注目するだけですぐさま忘却する。それでも釘付けになつてしまったのは、捉えた橙に覚えがあつたから。

もしかすると、もしかするやもしれぬ。引き寄せられるように、我は慎重に向こう側

へ行つた人影を追う。買い物の件はどうに頭からふつ飛んでいた。

曲がつてみれば、アホ毛を持つ当人は意外と近くで品を片手にしゃがんでいた。女であつた。男が着ないような清涼感ある軽装と、ゴツゴツとしていない輪郭りんかくから一目で判断できた。けれども重大な部分は、そういった基本的な外見ではなかつた。

「っ……っ！」

頭の方へと視線を移して——我は戦慄した。つい叫びそうになるのを左手で口を押さえることで堪え、半ば無意識あしずきに後退る。まさかとは思つたが、やはり。

——他人の空似たぐいといった類でなければ、この人物は……ツツ！

眼前でしやがむ彼女は、我のよく知る存在であつた。

我は可能な限り音を殺して軌道修正し、それから斜め後ろの角へ駆けた。幸い、向こうはブースの品に集中していてこちらに気付かなかつたようである。どうにか直じかでは関わらずに済んだ。

「ハアツ……ぬウ……こんな形でえええ」

撤退するつもりは毛頭なかつたのだが、姿を確認した途端に足が動いていた。現場か

ら離れるために神経を張り詰めさせた疲労と、急激にスピードを発揮したために上がった心拍が、追って我に重圧をかけてくる。こんな形で出くわすことになるとは想像だに  
しなかったぞ——千歌ねえちゃん。

「……………あ、にんじんだ」

そして何の因果か、辿り着いた場所は野菜コーナー。弾んだ息を戻すのも怠って、我はブースに並ぶ山菜らから無造作ににんじん入りの袋を引つ張る。品定めする余裕は失せていた。

思考の殆どが、彼女の件に割かれていた。あるいはどうすれば遭遇せずに目的を果たせるか、ということばかり。なにしろ、もし次に対峙しても平静でいるのは難儀、そんな確信があったのだ。たとえ間を置いた上でも、だ。

## 黒騎士は蜜柑少女 — 後の章 —

片隅に残る、大切な記憶。幼稚園児という肩書きを持つていた、まだロマンとは縁薄だった時期のこと。不意に透き通った呼び掛けが世界を変えた。

『おーい』

返したのは知らんぷり。人違いだと考えたのだ。今よりずっと不器用だった当時の我に、友など一人もいなかったのである。さらには「己に関与してくる物好きなどそうそういない」——幼いながら、小生意気にもその旨の論を持つていたのだ。決めつけていた、という方が正しいか。

なのに、本人が向いているのは我しかない方角であつた。

『……………え』

ゆえに耳の異常を疑つた。園内の砂場で黙々と孤の作業に耽ふける我に（元は己の行動不足だとかいう話は置いておいて）、微妙な立場の人間に声をかけてくる者が、

『あれ?』

『……………』

『もしもし!』

女の子が、いたのだから。

『……………ぼくをよんでる?』

半ば夢見心地だった覚えがある。それは、我にとつては単なるイベントを越えた未知なる幸運であった。こちらのちんけな心の鎧をわざわざ破つてまで、歩み寄ってきた存在。最終的に心に渦巻いたのは驚愕というより——無上の喜びと行き場のない罪悪感。

『うん!』

手を伸ばす彼女は、ただただ眩しくて。

『おすなばでなにしてるの?』

『……………あなをほってる。どこまでつづいてるのか、しりたくて』

『おてて、まっかだね。ひとりですつとやってたの?』

『うん……………』

『じゃあ、いっしょにほる!』

『そ、そんなのいいよ……どうしてつたの? きみはだれ?』

『ん? ……ちか。たかみちかっていうんだ。よろしくね!』

初めてできた友は己よりも一っだけ年上で、笑顔が輝かしい印象の女の子。ちょうど今と同じく梅雨が近かった季節に生じた、属さず属せぬな我に舞い込んだ革命であった。

以来彼女は狭き殻に閉じ籠ろうとする我を励ましては共に遊んでくれる、一種の「姉」のような存在と相成る。また、この頃姉弟や兄妹いったものに若干の憧れを持っていたのもあって、いつしか我は彼女を「ちかねちゃん」と呼び、慕うようになった。

ただ、彼女が一足先に卒園を迎えてからは関わる機会が皆無となってしまう。なんてことはない。よくあることだ。会えずして時が過ぎるうち、だんだんと疎遠になつて



それが、よもや近所のスーパーで再会するとは思うまい。遠からずも決して近くはない距離に、かつて世話になった先人の姿があるのだ。緊張が拭えぬ。しかも、私の臆病者めいた画策は徒労に終わっていた。ゆつくりメモに記載された食材を揃え、慎重にレジ付近へ出向いた末路は……夢にも思わぬリピートエンカウンター。

つい5秒ほど前のことだ。とあるコーナーから抜けてきて早々面食らったとも。レジの傍で、まさにこちらが遭遇を避けようと考えた対象<sup>課本人</sup>がいるではないか。慌ててコーナーの陰に体を隠したとも。おまけに、なにやら彼女は慌てている様子で――。

「財布がなくて……」

噂をすれば、向こうにいる彼女が何か発した。詳細はわからぬ。ただ、当人の間にハプニングが生じているのは明らかだった。弱った。神のイタズラ、一種の<sup>運り</sup>都合主義<sup>合わせ</sup>か？ ベターにも程がある。変な汗まで出てきた。墮天使が学校を休んだ時とはまた異なる意味で、調子が狂う。

そして、我は。

(……どう出る？ もう他のスーパーに赴くか？)

ブースの陰で開き直って出ていくかを検討し続け、結局息を殺しがてら動向を眺める

に至っている。おそらくその姿はチキンな視察官スバイさながら。

次いで彼女が頭を抱えた。当人に元から漂う活発な雰囲気のおかげで悲壯感はありません。浮かび上がってきていけないけれども、よほどの事態らしい。

(……………つて！)

我が心配するのは違うだろう。こちらの知ったことではないはずだ、だいたいウオツチングなんて性には合わぬのに。

(そうだそうだ、知ったことではないのだ。黒騎士は自ら善行に徹したりはしない！)

もういい、ここそのものから立ち退くのことにする。精神的疲労の蓄積だつてバカにならない。我は影に半隠れした形のまま、身を退き……………

「落としちゃつたのかなあ……………」

彼女に宿る不安の火種が、より一層濃くなるのが見えた。

(いやいやいやいや！ 我は無関係なのだツツツ！)

知らぬ間に彼女のいる場へ切り返しかけていた己の足を叱り、元のポジションまで戻す。もう迷わぬ、我は身を退き……………

「ええいこなくそお！」

放つておけなかった。引かぬ、引けぬ。むしろ彼女へと寄つていった。善行に徹するのではない、例外なのだ。

間合いを詰めていく中、気配を感じたのか彼女が振り向いた。赤く澄んだ瞳がまっすぐに黒騎士こちんちを映す。曇りなき光に僅かばかり気圧されそうになるも、我は堪えて一言絞り出す。

「……ククツ。万事休す、かな?」

「あなたは……!?!」

今度は彼女の顔が困惑に支配された。漆黒グリーブや黒刀、その他諸々特殊な装備を身に包んだ男に絡まれたのだ。普遍から大きく逸脱している分、そうなつても無理はない……のか?

「通りすがりの黒騎士とだけ」

「え、ええつ」

こちらが名乗つて即、一步距離を取る彼女。やはり好印象は持たれなかったようだ。身構えてすらいる。そこまで露骨に怪しまれるとかえつて萎えるぞ。

「……………」

さらには中途半端すぎる空気を打開可能な、次なる言葉が出てこない。千歌ねえちゃんの元へ出たまではいい。いざ近い距離まで詰めて向き合つてみたら、すっかり平静が保てなくなつてしまった。どういいうわけか頬に熱が集まつてしまう。

「ど、どうかしました？　なんだか顔が赤く……」

おそろおそろといったふうには、私の第二声をさりげなく促す彼女。一応耳を貸してくれそうなのに申し訳なくなる。何故だか色々考えてしまうのだ。昔は分け隔てなく接せていたのに、どこから始めていいのか見当つかない。代わりに浮かぶのは、「大人っぽくなったな」「可愛くなったな」などといった感嘆の情たちばかり。

私のことには気付いていないのはよかつた。まったく知らないものを見るような目でこちらに注目している。ほっと安心したような、しゃくせん釈然としないような。

まあ、いつまでもしのごのと考えてはいられない。姿を見せた以上はやるしかないのである。放っておけばすぐにでも逃げていってしまいそうな彼女に、我は辛うじて続ける。

「改めましてこんにちは……」

羞恥の威力とは恐ろしいもので、平凡そのものな素がよみがってしまった。「ハーツハツハツ」とか「フハハハハハ」とか、ああいうのがまるで出てこない。

「えっ？　……こんにちは……」

挨拶は一応返ってきたものの、その表情は固い。彼女からすれば得体の知れない男が転調を繰り返しているのだ、致し方ない。

加圧する焦りからか、呼吸がより苦しく感じてきた。乱れを和らげるだけの酸素が欲しい。揺らいでいては届きもしない願いを暗に抱いて、我は今一度仕切り直しにかか

る。  
「ハハハハハッ！ 困窮しているようだなあ、若き少女よ！」  
「うわっ」

彼女が顔を引きつらせた。

——やりすぎたツツ！

出力がわからぬ。我が我じゃなくなりそうだ。……もうまともな印象付けは諦めよう。深い呼吸を入れて、我は用件を説明する。

「誤解するな。我は悪事を働きに現れたのではないのだ。もつとも、警察なんぞ呼ばれたところで——この黒騎士を押しえ込むなど不可能だが」

「も、目的はいつたいたいなんですか？」

「わかりやすく言えば……助太刀」

「すけ、だち？」

彼女の後退りが止まった。助太刀どころか取捨が付かなくなるところであったが、どうにか話はできそうだった。

「そうだ。絶望に身をよじらせているのだろうか？」

「……はい」

「よし。状況を教えてくれ」

「ありがとうございます」

極端な警戒は消えたか、やがて彼女は数歩できていた距離を2、3歩戻した。会話を続ける表情はどこかぼんやりとしているけれども、これならなんとかなるだろう。

己の口角が上がるのを感じた。こちらが勝手に作った流れではあるが、頼られるというのは悪くない。そして相手は千歌ねちゃん、世話になった恩を気付かれぬうちに返せるとは最高だ。なんとも熱いではないか。よーし善は急げだ、来るならこい。あらゆる内容を告げられようとも、手厚く対処してみせよう。

「えつと……落とし物というか、探し物というか」

「ふむ」

「恥ずかしながら、どこかで財布をなくしちゃったみたいで……」

「へ」

一転、硬直。

彼女より打ち明けられた事情を耳にして、おそらく今年一番の間抜けな声が飛び出した。その所以<sup>ゆえん</sup>、「財布」というワードである。単に聞いただけなら動揺なぞ微塵<sup>みじん</sup>にもしない。にも関わらずスルーしかねたのは、スーパーに来るまでにソレと出会っていたから。もしかすると、もしかするかもしれない。

「……財布、と申すか」

「そうなんです！ 心当たりありませんか？」

焦りを隠しきれぬ様子で問うかつての先輩。心当たりだつて？ むしろ心当たりだらけだ。下手をすれば、解決の鍵をもうこちらが握っているかもしれないのだから。

「と、特色は？」

「えーっと。橙で柄が無くて、がま口で……ちよつと古めな財布ですつ」

彼女から聞き出せたヒントは、まさにぴつたり当てはまっていた。

——道中に拾ったアレ<sup>財布</sup>の持ち主って、ひよつとして。

垂れ幕が上がるかのように、真相の可能性大であるう憶測がじわじわとその全貌を構築していく。こいつはなるべくしてなる運命だったというのか。

嫌なタイミングで朝流し見していたテレビの運勢占いが浮かんできた。私の星座は本日1位。ラッキーアイテムは財布。

「……探し物とは、こいつのことか？」

我はおもむろにポケットを探り、ブツを取り出した。こちらが手に携えたものを一瞬凝視した彼女の反応は。

「ハ、これだ！」

肯定と驚愕。

不自然な肌寒さが体を伝う、たぶん鳥肌が立った。占いはどちらかといえれば信じない方だ。ただ、今日はある程度当たっていると覚えてしまいうさである。ついているかはさておいて、『変なところで』運が回ってきているというのは。

千歌ねえちゃんの丸くなった瞳が我をのぞいた。よほど度肝を抜かれたらしく、そのまま彼女は距離感を忘却してこちらに接近。当初の警戒は馬鹿馬鹿しいほどきれいさっぱり消えていた。そんなことより心臓が持たぬ、我は前に手を添え彼女を後ろにシフトさせる。

「いったいどこで!？」

「え……ああ。曖昧だが、スーパー付近だったのは間違いない」

「よかつたあ……」

心底安堵する様子の彼女だが、絶句から解き放たれた我が返せたのは苦笑だった。彼女を襲った暗雲あんうんを素早く晴らすという、本来願ったり叶ったりな結末に落ち着いたはずなのに。



彼女が探していた財布を差し出せたのも、我が拾ったものが運良く該当していたにすぎない。同じ時刻に我と彼女が居合わせなければ未解決で終わっていた可能性すらある。そう、偶然の連続が最良へと事を導いたのだ。素晴らしいではないか。ではこんなにも腑に落ちないのは何故だ？

いいや、推し測るまでもない。こうもあつさり問題が解決されてしまったことに、不服な部分があつたからだ。

途中から、この助太刀がいくばくか難航することを望んでしまつていた。行き詰まつた暁には、久しぶりにちかねえちゃんの近くにいられる瞬間が延びる……といった不謹慎な想いが息をしていたのだ。力になりたいと奮起、及び接近したところまでなら厚意のみで動いたと断言できる。ただ、内容を聞く寸前までそうであつたかといえば？

……愚かだ。愚かすぎる。あまりに利己的だ。我ながら気味が悪い。

そしてこんな時になつて、歪いびつな思考の基盤もとを自覚してしまふ。すべては千歌ねえちゃんへの炎が燃え上がつていたために――。

「ありがとうございませう！」と勢い良く頭を下げる彼女。続々と込み上げる胸中の訴えを振り切つて、我はいつか使おうとしたためていた台詞を吐く。

「ツいていたな、少女よ」

今、己の面構えはどんなふうだろう。様々な感情が入り交じつてできた、滑稽なものを張り付けていたら……いやまあ、そうかもしれない。

さっきの危機感等々とはまた別でこの場を去りたくなかった。彼女がまだ注意散漫なうちに、別のレジで会計を済ませて帰還しよう。我は手を軽くあげ、彼女から距離を取るモーションに入った。

「さらばだ——」

されど、こういう時にそうはいかないのが世の常。

「おほっ……」

無駄に大きな声をした。音圧の方向を頼りに発された位置を探ると、何メートルか先のコーナーにこちらへ接近してくる者が視界に入った。タンクトップ一枚に短パン、履きやすそうなサンダルの中年親父である。顔は赤い。さしずめ彼は、酔いどれだピエロれであった。

そしてすぐにわかった、酔っ払いの狙いは彼女だ。周りに彼女を除いて若い女がほぼいないし、奴の舐め回すような眼光がそれを圧倒的に主張している。店員、会計しに来ている一般人は……見て見ぬふり。どうやら外部からの助太刀は無いと考えた方が良さそうであった。

さらに危険なのは、よほど安堵しているのか千歌ねえちゃんが自分の後方に無警戒で

あること。まだ我にまつすぐ礼を述べている。

——やむを得ない。

「ツ……ここでは色々と邪魔になる。移動するぞ」

「ほえ？」

血相を変えた我に驚いたのだろう、嬉々としていた彼女がぼかんとした。が、あいにく説明している時間はない。彼女の健康的な腕を掴み、語気を強めて告げる。

「早くー！」

「う、うん」

承認されるが早いか地を蹴った。ありがたし、彼女はこの不意すぎる連行に手を払うことなく付いてきてくれた。

目立たないはずもなく、人々の視線が刺さる。……気のせいか、彼女のも。下手をすれば酔っ払いより我の方が誘拐者や悪人のようだが、この際関係ない。この人を飲んだくれの騒ぎに巻き込むよりはうんといいのだ。

ほぼ秒刻みに、二人の駆ける形跡おとが小さきホールに散って木霊していく。

直行、曲カッがり、直行、もひとつ直行、曲カッがり。

ぶつからぬように緩急をつけながら、レジ方面から反対の開けたエリアへと向かう。

方に一つ奴が追ってくる可能性も考慮し、わざとあらゆる道を通る上で。無差別に潜り込んだせいか、慣れきっている構造が少しばかり迷路のように思えた。

そうして逃避行にすべてを注いだ成果か、スーパールの奥、鮮魚コーナー付近までトラブルなく移動できた。

しかし、一件落着とはいかなかった。

最大の誤算が牙を立てたのである。

「あの」

「……なんだ?」

「あなただって、ようすけくん?」

「ぎよっ!!」

しばらく我に引つ張られていたのみだった千歌ねちゃんから飛び出した爆弾発言。勢いあまって急ブレーキした。斜め後方で正体の核心を突いた彼女は、まだまだ止まらず続ける。

「走ってる時にね、横顔を見てたら気付いたんだ。……そつくりだった。最初は似てるだけなのかなって思った。でも、やっぱりそうとしか——」

「ふ、フフフフ……はははははっ」

笑ってうやむやにしようとするも無駄と悟る。彼女が至って素直な眼差しを向けてきていたのだ。なんらかの答えが必要だった。

「なるほどな。そうかそうか……」

いかにして返せばよいのだろう。わざわざ嘘を吐くのも憚られるし、今更後輩を名乗るのも苦しいものがある。しかしながら的確な己の肩書きも浮かびやしない。無理に黒騎士だと貫いてやれば切り抜けられそうではあるのだが、それを今の彼女にするのは気乗りせぬ。

ああではない、こうではない。パンク間近な回路で逡巡を繰り返した末、いたずらに口を突いて出たのは。

「……だったら、どうする?」

この言葉。

放った刹那に確信した、間違えた。表情を崩さぬよう、真つ先に全神経を注ぎ始める。

——イタイイタイイタイイタイ!

黒騎士と相容れぬ素の我が胸中で嘆いた。一度出た言葉はなかったことにはできぬ。しかも振り向きざまに発したものだから、その絶妙な角度も取り返しのつかなさには拍車をかけていた。彼女の反応はといえば、まさに「クエスチョンマークを頭に浮かべている」というやつである。

「これはだなあ。その、ええ」

どうしてくれようか。千歌ねえちゃんよ、この際苦言でもかまわないからコメントを恵んでくれ。これではただの阿呆ではないか。助けてくれ。必死に取り繕うとするも、果てしなく空振ってしまう。

「えーと、よくわからないけど……」

かなりの間を置いた後、困ったふうに彼女は苦笑して。

「久しぶりだね、ようすげくん」

我<sup>わ</sup>が真なる姿の名を呼んだ。

またも土壇場は——越えられず。

☆

照射のピークを過ぎ、衰えてきた陽光。地平線に負けず、映る景色の先で伸び立つ日

本の頂。そしてそれらには遥かに迫力で劣る地上。

投げやりになりそう中、無益な比較が脳裏を流れる。

輪廻転生したい。すっかりグロッキーだ。あれつきりすっかり記憶がおぼろげになったのはここだけの話である。なんたる前提違い、千歌ねえちゃん是我のことを覚えていたのだ……。

「いやー、まさかスーパーで会うなんてなあ」

「驚きでいっぱいです……」

「ところで、さつきと全然雰囲気違うね」

「あれは……すみません。どうか忘れてもらえたら嬉しいです」

スーパー入り口からいくらか隔たったコンクリート上で、千歌ねえちゃんと我は立っている。あの破り難い沈黙からなんやかんや、外に出たのだ。会計は知らない間に一緒に済ませていた。

たちまち消えたいといえばそうだが、失った何かが多いすぎてそういう気力はからっぽだ。また、もう彼女に黒騎士の体裁を保つメンタリテイは折れた。

本日限定、我は……ああいや、やめた。本日限定、「僕」は「ただの手尾湧丞」。半ば思考を放棄した頭で努力するのは、ひとまず会話についていくことだ。

「今更だけど、私のことって覚えてる？」

「……高海千歌さん」

「おおっつ、嬉しいな！ 幼稚園の頃、一緒によく遊んだよね」

「うん。……あつ、はい」

「そんなに固くならなくても大丈夫だよ」

強張る肩を軽く叩かれるくらいにはダメダメだけど。

「何年ぶりかな。こうして並んでみると、大きくなつたなあ……ようすけくんも、私も」  
「そつそういえば、幼稚園の頃も背比べとかしたっけ？」

「あゝ、しました！ ……前は私の方が高かったのに、今じゃ抜かされちゃってるね。なんだか悔しいな」

千歌ねえちゃんは、あの時と変わらない天真爛漫さを發揮していた。僕はその度ハツとして、ぎこちなく応対するばかりだ。感慨深そうに顔を綻ばせる少女に、狼狽えまくりの少年。第三者から見たら、こんな図が出来上がっていることだろう。

必死になつている間も、時間は止まりはしない。どう盛り上がろうが盛り下がろうが、終わりはやつてくる。無論例外はない。この日スパーで鉢合わせした千歌ねえちゃんと僕の場合もだ。その瞬間は、彼女の突然なる思い出しがトリガーとなった。

「それでねそれでね……あ」



「なにかあつ——」

「しまったああ!!」

アラームの爆音といい勝負の大きな声が空へ抜けた。みるみる顔を青くする彼女から察するに、緊急案件っぽいのはすぐわかった。

「まだ寄るところがあつたんだつた!」

「そうなの?」

「うわあああ……どうしよう」

「とりあえず今からでもそこへ……」

「うん。ごめんね、私行かないと」

「あつ、えと、大丈夫」

戸惑いつつも、あたかも納得したふうには首肯する。実のところ本人の慌てように驚きはしたけれども。

と、ふためいていた彼女が突然冷静になってエコバッグの中を探り始めた。

「……その前に、はい!」

取り出されたのは、全国でも有名な果実。

「み、蜜柑?」

「私の気持ちですつ! ほら、財布のこともあるし」

「そんな……お礼をもらうほどのことはしてないよ」

「いいからー」

躊躇うスキに、彼女は「えい」と報酬を突き付けてきた。僕の手には、ごく普通のサイズをした、しかし元気ある色に染まった蜜柑が乗っかる。その果実は、どことなく彼女のように――。

「それに」

蜜柑に気を取られた僕へ、彼女は続けた。

「また逢えたらなつて」

何も答えられなくなつた。いきなり己に羽が生えて宙を浮遊したかのような気分が、ぞくりと僕を襲つた。昔は屈託のなさこそあれど、これほど胸を射抜いてはこなかつたのに。誰から見ても密かに、その笑顔は魅力に溢れていた。

「こうなつたらダツシユだ！ ……じゃあようすけくん、またねー！」

帰宅するらしいと理解した頃、既に彼女は走る間際だつた。出遅れたと必死に返しの言葉を考えるけれど、嵐のように彼女は走り出してしまふ。あつという間に遠ざかつていく背中を、僕は静かに見送ることとなつた。

「……………いふ」

どれくらいそうしていただろう。知らずのうちに、頬が緩んでいた。

「また逢えたら、か」

僕も帰ろう。受け取った蜜柑を、潰さないようにポケットへしまい込んでから。

夕刻は、未だ空が青くとも——確実に近付いていた。

……それにしても良かった。津島善子に今日の姿を見られていたら、僕はたぶん立ち直れなかっただろう。ああ恐ろしい。

## † 舞いし羽は墮天使と黒騎士をも搔き乱す †

無人な排汚トの牙城レの個室内に、またも意図せぬため息が抜けた。

「くそッ」

やってしまった、軽く白壁を殴り付ける。腹痛をダシに4限目をサボろうとしていることへの憤りではない。ちっぽけな後悔はとうに錆び付いた。裁きたくあるのは、ふとすれば出てしまう息吹。

おそらく、胸中に留まって消えないやるせなさがそうさせるのだ。もしも近くに手頃な石と川などがあつたなら、水切りでもしたくなるくらいにはやるせない。

戻るとしよう、昼放課になるまでいたところで仕方がない。我は居座る器から腰を上げた。

便穴ソコは空っぽだ。紙もなければ汚物もない。透明な水が天井と己の顔を映しているのみ。我は何しをに來たのだろう？

頭を振って水洗の引き金に手をかける。清掃の渦潮が暴れ始めるのを耳奥で感じがてら、我は解錠を済ませる。

と、個室から出て気付く。

「流す必要なかったんだった……」

——そう、このやるせなさは。

『また、逢えたらなって』

あの一言から来ている——どこまでも柔らかかった声音が、忘れられぬ。

それだけではない。ここのところ動きも悪くてかなわぬ。咄嗟に素で応対してしま  
うのである。つまるところ、普段通りに振る舞えない。

買い物での件を機に。

僕は……おおっと。我、であった。

我は……おかしくなっていた。

授業<sup>学修空間</sup>では。

『問4を——手尾』

『ふあ!?! え、X || 12』

『まともに答えただと! いや、不正解なのはいつも通りだが……!!』

スクールブレイクアウト

放課でも。

『手尾くん。黒板消すの、日直の仕事、忘れてるよ』

『……あ、ああ、悪かったね。すぐやるよ』

『う、嘘……ぜんっぜん偉そうじゃない?!』

酷い有り様である。どうしても集中力を欠く。僅かにでも気を緩めていれば、授けられた蜜柑と微笑みを回想してしまう。

結果、

「おい、ボールいったぞオ！」

「……………は？ えぶはっ?!?!」

「ぶぶつ、黒騎士さんに大ダメージい」

「あんの馬鹿がっ……誰か手尾を保健室に！」

醜態を晒す。

授業を疎かにしてまで考える時間を設けたのに、なおも駄目だ。鼻血を垂らすという不恰な絵を体現してしまったことさえ今は問題にならぬ。

鼻から下を押さえて立ち上がり、我は空いた手で駆け付けた保健委員の肩を借りる。すまないなと断りを入れると、当人はぼそりと問いかけてきた。

「君さ、色々大丈夫？」

横を向けば想像通り、なんとも表現に困る顔。我は自嘲気味に笑った。

「すなわち変、と？」

「え？ 一応そういうことになる、のかな」

「ふ……誉め言葉として受け取っておこうか」

「うーわ」

熱い掌返し？ 黒騎士の前では無力なり。

……平静を保てなくなって数日になる。冗談抜きで対処せねばな。

「やっと解放か。まったくもって長かった」

「同感ね。しかも1ヶ月後には期末テストよ……」

堕天使と対峙する時を除いては。

いざ向き合うとなると色々引き締まるのだ。ゆえにヤツの正面で乱れを見せたことはゼロ。

ちなみに、ここまでの間でヤツから深りを入れてきたこともない。同クラスなので私の綻びは目にしているはずだが……。助かるというか、不可解というか。

「で、どうだったのよ。さんっざん危惧してたテストの結果は」



「訊くまでもなからうて。第一貴様には関係ない！」

「大アリよ。テスト3日前に泣きついてきたのはどこの誰？ さ、恐れずに白状なさい」

「断固拒否」

けれども。

駄弁る傍ら考えに耽る時間は唐突に断たれた。

だらだら通ううちに集合地と化していた禁じられし外部屋学校屋上に居座る、我と墮天使の前に。

——その元凶旋風は起きたは現れた。

「ぐつつ……」

「うわっ！」

一はじめにぶおおつと耳を抜け、二ふたに圧の追撃を体感。虚を突くに至ったその勢いは、図らずとも我らの顔を伏せさせた。

してやられたこちらが次に捉えたのは、母なる大海に馴染深き町並み。

もう一つは。

「うそっ……!?!」

青ざめた堕天使がすべてを物語っていた。ちよつぴり晴れ間のぞく曇天には、我らの手届かぬ天の領域には……ヤツがいつも髪の毛の団子に刺している黒羽。

「……飛んだな。いつもお前の魔玉を際立たせている漆黒のソレが」

「っ……お、追うわよリトルデーモン!」

「勝手に決め——」

「早くっ!!」

「う、承った!」

凄まじい剣幕になった彼女に促され、胡座あぐらを崩して立ち上がる。我がようやく駆け出した頃……核を奪だされし失羽の堕天使は、既に屋上の扉を蹴破らんとするところであった。怒濤のアップテンポで先を急ぐヤツもヤツで、ある意味旋風のように、その感想は胸に留めたが。

発端すなわち、大自然の挙動。闇討ちよろしく現れた旋風<sup>敵</sup>は、騒<sup>敵</sup>がしくも和やかな放課後の余韻を断ち切ったのである――。

~~~~~

拝啓地球に生きる人々よ。唐突ながら問う。風は好きか？

我は好きだ。当たり前すぎて意識されることが殆どだろうが、風とはとんでもない存在だと思う。時には流麗に、時には荒々しく、時には何よりも穏やかに世界を吹き去る。

生き物が誕生するより遙か前から、大きく変わることなくマイペースに悠<sup>と</sup>久<sup>き</sup>を駆けつけてきたこの存在には――尊敬の念すら抱く。

「いやー本当にツ、ぐうの音も出ぬほどになあああつ」  
 「足を動かして。見失うわよ！」

無駄に風が暴れがちな本日放課後、心に立て並べた皮肉を吐くゆとりなし。家路につく者が大半の中で、滑るように天を舞うモノの確保に邁進する墮天使と黒騎士が1名ずつ……。曰く墮天使の「アイデンティティ」なる黒羽それを追っていた。

悲しいかな、寄るつど風が吹いて振り出しになるため歯痒いつたらない。あれから何分か連続で休みなしに駆動中で、過酷さはもう持久走の領域と表せる。

「戻って、戻りなさいーい！ 私の片翼ー!!」

「離脱してもいいか？ 我一人が手を貸したとて望みは薄いぞ」

「だめっ、すつごく大切なものなんだから！」

黒騎士サイドの我、できれば帰還したくある。しかし隣で並走する墮天使サイドの津島善子ことヨハネ、それを許さない。一応振り切れぬこともないだろうが、そうすると翌日きつと今以上の面倒を被こうむるのでやめておく。

「代用品似た羽でカバーするのは？」

「同じのは他になくもないけど……でも、そんなのはたくさんなの！」

妥協案も、ヤツが眉を歪めたところからしてなさそうだ。ところで追跡が続くのはも

うよいとして、ヤツの含みある物言いが引つかかった。

「なに？　するとあれは長らく愛用し続けてきたモノではないというのか」

「さ、3枚目かなあ……なんて」

「さすがに冗談であろう？」

「……………」

「まさか……？」

「最初はすつぽ抜けたのが排水溝に。次のは鳥に拐われちゃって……アハハハ」

「うむ、すまなかつた墮天使よ」

なるほどひどい。失礼ながら思う、今回も奪還不可能だったり……？　思えば決闘し

たあの日もいきなり転んでいたし、もしや薄幸か？

乾いた笑みを浮かべる墮天使だが、追う足をまったく緩めていないのがまた大したものだ。遭った不運にめげず立ち向かう精神、惜しめない称賛を送りたくある。

さて。ヤツのみでは、ヤツ自身の傷口に塩を塗る結果を迎えてしまうかもしれぬ。ほどこどで帰還しようかと考えていたが、悲惨な事例を聞いて気が変わった。二人がかりで果たして羽を取り戻せるかはともかく、しっかりと最後まで付き合うことにする。

「同情なんていらぬわ！」

かといって、八つ当たりは勘弁願いたいがな。一転して訴えかけてくるよはまだよし、ただしその調子でポカポカ叩き始めるのはやめろ。地味に痛い。

「そんなことより、今こそ黒騎士の本領を發揮してもらいたいものね。ほら！ すんごいジャンプして羽を掴まえるとかっ」

「な!? んなことでき……いや。言っていないかったか？ 我は特化する力により異なる。」

「……………ふーん。ならしやうがないわね」

「理解を示したか。そうだ、しやうがないのだ。身体強化を行使したいのはやまやまだが」

「本当なんでしやうね？」

「あつ、ああ。神に誓おう」

……………俯瞰した気分でいられるのも束の間だった。我もひどかった、別ベクトルで。少なくとも見苦しく余所を眺めるしかなくなるぐらいには。

「……………なあ。貴様も墮天使ならなにかしらの能りよ」

「天界墮天条例により、地上で力を解き放つことは不可能」

「しかし」

「天界墮天条例」

「……………」

でもって、この話は流すべきだ。うむ。

そんな折。風が弱まり、運ばれていた羽が減速し始めた。順当にいけば無事に道上へ落ちそうであった。

「しめた！」

紛れもないチャンスを隣の当事者は無論見逃さない。我を眼中から外すと、ヤツはすかさずスパートをかけた。

勢いを削がれ、下降する羽。息を弾ませながらも着々と隔たりを無くしていく墮天使。ヤツがあと十数歩詰めれば追跡は終焉する。誰からしても、元鞘は必然と断ぜられそうであった。

ただ。

……ただなんというか。どうにも腑に落ちない。

うまく事が運びすぎてはいなかるうか。確かにこの状況から羽を逃すなどほぼあり得ない。それでも何か、嫌な予感がしてならないのである。

もしもだ。

あと一步、というところで彼女が災難トラブルを呼んだら？

過度な懸念だろうか。勝利の約束されたであろうシチュエーションから、敗北の線をとどるなど。

だが。日常では巻き込まれにくい事案、被験確率1%を下回るであろう惨事……それを引くツキを、堕天使が本当に持つとしたら？

馬鹿な、考えすぎに違いない。そもそもヤツに「不幸体質」かどうかを聞いたことはない。保障などどこにある。かつての件や今回、聞いた話を合わせたところで――

(……いや)



訂正、確信した。惨事は起こる。ヤツがここまで露呈した片鱗薄幸らしきものは、まごうことなき片鱗薄幸であった。間違いない。追跡は現状では決着しない！

何故なら。

……ヤツが行く先に、障石害があつたから。

「墮天使！ 迂闊に飛び込」

「ふぎやっ」

叫ぶも、遅し。持てる力を余すことなく羽の奪還に急いでいた彼女は、足掛トラップストーリーけ小石を回避できなかつた。付近にある、昨日の雨でできたであろう水溜まりに倒れ込まなかつたのがせめてもの救い。

「い、つたあ……」

「言わんこつちやない！」

もはや宿命なのかと、苦い想いで墮天使の元へ駆ける。致命的な怪我はしなかつたよ  
うで、我が着くより早くヤツは動いた。

掌や膝小僧はそうだが、今回は若干顔の方も擦すったようで、高めな鼻が微かに赤くなっている。体勢を立て直しながらも、墮天使は後方の石をきつく睨み付けた。ダメー  
ジよりも行き場のない怒りが勝ったのだろう。

ところがヤツの注目対象は、ほとんくして変化した。

「湧丞、羽は……？」

我にかえった墮天使に問われて、最も肝心なことを再認識する。羽だ、羽はどうした。  
想定外がさらに発展する前に動かなければ。

あちこち視線をさまよわせるまでもなく、例の物は見つかった。幸運にもまだ風に煽  
られてはおらず、しっかりと行く先に着地中、いや着羽中。

「……お願い」

「任せろッッ！」

我は真つ先に脚部へ力を込めた。長い前髪が揺られて邪魔になるけれども、ずらす暇  
はない。僅かでも油断していたならばやられる。いつ、何が起こるかかわからぬのは世の  
常だ。

風を警戒した上で、羽へ詰め寄っていく。幸いにも標的の軌跡は変わることなく、距  
離は目と鼻の先というところまでになった。

その時である。

黒羽が落ちるであろう地点の少し先、視界の奥にトラックが留まった。

「んん？」

直感でしかない、それでも我は踵を返しがてら墮天使のいる方位を確認した。どうせなら呼吸でも整えるつもりなのか、当人は転倒したのとほぼ同じ位置にいる。真横には水溜まりだ。

そして反対には、ヤツ側へとこれから進むトラック……。

「……さては」

ピンときた。我はひとまず羽を無視し、全速力で彼女の元への引き返しを開始した。平穩無事ならばよし、想定した通りならヤツにはまず間違いなく――

疲労してきた足に鞭打つ。元々そう遠くないのと、フルパワーで全身を弾ませたおかげですぐ墮天使まで近付けた。

が、迫る相手速し。それなりにあつた差はほとんど失せてしまった。耳を抜ける震動の大きさが、それをしかと教えてくれる。間に合うかは賭け……いいや、間に合わせる以外の用件は要らぬ。ひた駆けるのだ。

走る、疾<sup>は</sup>走る。緩めず地を踏みしめ続ける。空気抵抗に負けじと腕振り、熱く乾ききる喉を息をもつて制する。独特の重低音を鳴らすトラックは、滞りなく墮天使への肉薄する。

手を伸ばせばどうにかヤツに届きかけるくらいまで縮った刹那、トラックの先端と己が並んだ。互いがすれ違うまでもう僅かかない。

「墮天使！ 身構えろー！」

「何？ なんでこっちに……！」

警告するも空振り、顔を上げた墮天使は突然のことにとたじろぐのみであった。

——まだだ！

「うおおおおおっつ!!」

こうなつてはいちかばちか。墮天使の正面まで出ると同時、爪先を起点に体を横へ捻<sup>ひね</sup>る。

直後、視界の隅に映った小浪<sup>こなみ</sup>が背後から——

「へっ、へへえ、つくづく……厄介事に縁ありだな」

乱れた息遣いを誤魔化しながら、我はニヤリと言い放つ。

何が起こったのか理解しきれていないのだろう。トラックが通ったスペースに焦点を定めている墮天使。しかしその線はほとんどなくして泥水を滴らせる我へと集中した。

「びしょ濡れじゃない……」

「だが見てみる。貴様はどうだ？」

聞いて墮天使は目を丸くするが、我としては満足この上ない。すんでのところで危機を救う……こんな場面、想像することはあっても体感したことはなかった。

ノーダメージであることに気付くと、ヤツは驚いたように口を開けた。その素晴らしきリアクションに、嘔み殺していた我の狂喜は爆発した。

「回避できたろうツツ！ 降りかかる不幸を！ 嬉しく思うぞ、貴様が無事だなアアア」  
「え」

「フツ、フフフ……ハハハハハ！ ああ。こんなに嬉しいことはないね！」

前面と背面の温度差が生む気色悪さも勲章。いつになく我は黒騎士をしている。どちらかといえば聖騎士寄り？ 知ったことか、なんとたつて最高だ。古の木製グラス片手

に祝杯を上げたいほどに。

「……………」

「ん、どうした？ ……そうか驚いて言葉も出ぬのか！ よいよい。我を讃えるのは後でも構わないからな？」

それでつい。興奮して口を出た綾もヤツの様子も、完全に失念していた。

「じゃ、じゃあ。今のはその、守ってくれた……………つてこと？」

「ぬ」

消え入りそうな声音が過つたことで初めて、騒ぎ巡る血が落ち着きを取り戻す。

そわそわ。我を見ては目逸らしを繰り返す、変に弱つた墮天使が降臨していた。錯覚か、あまりない身長差がやけに大きく見える。

事情はどうあれ把握する。ちよつとした誤解を招いてしまったらしい。

「あのままだったら、きつと天からの嫉妬をまた身に受けていたわ。それを予感して、盾になって、こんなふうになって……………」

墮天使の内容がある程度正解だとしても、大筋は自画自賛からくる喜び。ゆえに撤回すべく口を開こうとした。

にも関わらず。

「……黒騎士って伊達じゃないのね」

そうするより早くヤツは、ヤツは――。

声が小さい、なんだか照れくさそうだ、口元がもによもによしている。

実況じみた感想の数々が、何かをはぐからしたがるように胸中を飛び交った。それでいて涼んだはずの脈動がまた熱いのは、単なる思い過ぎなのか。

「箸の借りは……これで返したからな」

歯切れ悪く答えられたのは、しばしの絶句を喫してからであつた。

奴の危機を思い浮かべ、助太刀すべく向かったこと自体に偽りはない。とはいえ不思議なもので、もうわざわざ解説しようという気は起こらなかつたのだ。むしろしたくなかつた。

成す術なく棒立ちしていると、黒いハンカチを頭部に、それでいて優しく投げかけられる。

「ま、まあ及第点ね！」

追って塞がれた視界の向こうから聴こえる、上擦り気味な評価<sup>こえ</sup>。  
タオルの方が色々と都合がいいだろうに、とは言わなかった。

「ハンカチまで黒とはな」

代わりに、逸れた指摘だけが喉を通った。

「あっ!!」

「な、何だ急に!」

「そういえば羽は!?!」

「……………あれはまだ反対方向に——げっ」

なお無情。我らが急いで振り返った頃、羽は着地点から舞ったところであった。長い



隙を作ったのが仇。我らはまたしても……嗚呼。

「そんなあ〜」

墮天使が崩れ落ちる。追いかけて始めは雲多かった空だけ、いつの間にかすつきりしているのがまたイヤらしい。

取り逃がした心持ち、ただ虚しく。ここまでにおける必死の追いかけては何だったのだろうかと氣にする余裕なくして。

果てしなく遠くへ旅立つ黒を、我らは見送るのだった……。

「いよいよ引き下がれなくなつたようね。掴まえにいくわよ、リトルデーモン？」  
「そうだ、ちと用事を思い出した。さらば」

「あつ、コラ！ こつちよこつち！ どっか行くなあー!!」

旋風強し。

墮天少女とただの少年  
—前の章—

生き残った残り少ない蟬たちの、斉唱みたいに重なった数多の叫びが微かに耳穴を抜けていくのを、なんとなくリズムカルだと楽しんでいてぶつかつた。

『いたっ』

『わっ……！ す、すみません』

『気を付けなさいよね』

散漫状態から解き放たれ、横に注意を戻せば。

『まあいいわ。それより！ 私と一緒に——墮天しましょう？』

シニヨンに刺された黒い羽、制服後ろに黒い小マントみたいなもの、黒を基調とした……その他多数。色々と纏つた、浮世離れた少女がそこに。

——かっこいい。

俊敏に体をしならせ、謎のポーズを決めた彼女の姿は思考にとどまらず、有象無象に徹するを良しと決めつける、自分の中で順調に育っていた一種の概念をぶち壊した。

「……………」

瞬きする間に世界が暗転して。もうそこは自室であつた。

——久しぶりに見たな、原点の記憶。先日スパーで再会した彼女に抱いているのとはまた別種の憧れ。ありのままであり全力なヤツの姿は我が我<sup>黒騎士</sup>となる勇気を授けた。

ヤツは覚えていまい。あの時の我は今と比べ髪型や雰囲気はかなり違う。

それにしても。いつもなら……この夢を見たとき、くすぐったくなるのだが。

我はベッドを降りて、目覚まし時計脇に置かれた箱を手取る。



教室の扉をくぐって、雑に机へ荷物を放る。墮天使はもう着いていた。まだ眠気が抜けきらないのか、だらしなく突っ伏している。

「目覚めよ」

「……………」

「目覚めよ」

「……………」

「ふむ……………」

「聞こえてるわよ！……………」

三回目の呼びかけをする直前、勢いよくヤツがこちらを向いた。寝癖ひとつない。ぐうたらしていることが多いわり、こういうところは妙にきっちりしている。

「基本的に用はない」

「だと思ったわ……………」

「いつか失くした黒羽、の代用品だ。次にお前が満足するものを見つけたら、つなぎにでもしてくれ」

「……………」

「ん？」

「いや！ 何でもないのよ？ ベっ別にもう持つてるとかじゃなくて」  
「持つているのか」

と、少し離れた位置から、まあまあ聞こえるポリウムで声が割り込んできた。

「お前ら、ほんと仲良いよなあ」

「まーたバカツプルがなんかやってるよ」

そう、意地の悪い奴らである。名はよく覚えていない、どうでもいいから。ただ始業式の邂逅でげらげら笑っていた人間のうち二人であることは確かだ。

「……………」

「有象無象の戯れ言など意に介すな」

こいつもこいつでいろいろ真に受けやすいからか、奴らの囃し立てにはいささか困っているらしい。うるさめな口がすっかりだんまりだ。

「それにしてももう持つているとは……………まったく、手が早いな」

「……………ごめん」

「謝るな、らしくもない」

軽口を叩き煽るつもりがなおのことへまこませてしまった。なんだか、最近空回りばかりしているような気がしてならない。

(有象無象、か)

席に戻らず、教室を出て階段の方へ足を進める。始業する頃には戻る前提で。

「ちよつと、どこ行く気?」

滞りなく一段目に足をかけようとしたとき、靴の摩擦が成す廊下への反響が我を制止させた。わざわざ首だけ向けずとも、相手はわかる。

「霊鳥と話にな」

「ふーん……始まる前には戻りなさいよ」

「ああ」

適当な理由を残し、我は歩みを再開した。漠然とした己への嫌悪感がピークに達した状態で対峙するよりはいくばくか良いから。

そうして二階から三階、段差を往くうちに屋上に出た。誰もいない敷地はひどく狭く思え、無関係ながら辟易した。

ドアを閉めて踏み出した途端、風がやや強く抜けてきて、つい顔をすぼめる。目に至ってはしゅばしゅばもする、さては軽度のドライアイだろうか。それでも、海から流



れくる潮の薫りが最も印象的だ。

もう何度嗅いだかわからないぐらいなのだが、やけに気に留まって仕方ないのは夏が近いからなのだろう。なんとなく、海を見たくなくなった。

始業鐘  
ベルが下からこちらまで木霊してきて一瞬罪惡の念にとらわれるが、今更走つたとて間に合わぬ、居座りすぎたのは後で省みよう。

背丈7分目ほどのフェンスに手をかけ——よじ上つてみる。立てば映る世界が高くなり、普段の位置では半端に遮られて見えない広大な蒼が一望できた。

重心が不安定なことを除けば、良き眺めである。何故今までこうしなかつたのかと後悔するほどに。

『墮天使は地上を見通すのです……！』

——ふと。9、10ヶ月前の件がフラッシュバックした。

そういえばヤツは我より先にここの全貌を知っていて、誰よりも晴れやかに佇んでいた。あの頃我は奥底に秘められた情熱のようなものに蓋をしたまま気付けずにいたというのに、ヤツはすでに墮天使で……。

陰もないゆえ、日に日に本領を發揮し始めつつある太陽の、焼けるような光を全身に

浴びる。おかげで額に、制服の中に却熱の雫が滴ってはくるが、なにやらかえって心地よい。

「はははっ、抜け出すというのはつくづく重い」

つい、出来心で。などと人が称するものに、我は夢中で突き動かされかけていた。

「……らしくないのはどつちよ」

だから、後ろから背中ごと貫くような鋭い声音が聴こえて、大いに硬直した。

バランスに細心の注意を払いながら首だけ振り返れば、墮天使がいた。呆れたような、怒ったような、睨むような、とにかく形容に困る面持ちで。

## 墮天少女とただの少年 —後の章—

悪戯を働いたところを見つかり言葉を失う小童こわづはのように戸惑う我へ、墮天使は口を開く。

「まず降りること。私ならともかく、危ないわ」

「よ、余計なお世話だ」

よく高所に上がってみては悦に浸ることが多い自分を柵にあげた上での、正論であった。咎められるものだと身構えていたものだから、拍子抜けだ。しかし彼女の覇気のないジト目はすぐに真剣な光を取り戻した。

「……何かあったんでしょ？ というかまあ、顔に書いてあるけど」

相槌を打つ。もうはぐらかすも、頑なに否定するのもしなかった。墮天使は私の抵抗なき肯定に多少安心したのか、ほっと一息ついて。

「……話してみなさい」

あやすように、私の肩へと手を置いた。



「なるほどねえ……」

「そういうわけだ」

「口調そのまんまじゃない」

「癖、みたいなものだ。いずれ直る」

吐いてしまえば楽になるとは誠である。かくかくしかじか打ち明け、今は完全にいつものノリというか、刺々しい感じをなしに我と墮天使は会話している。もつとも、墮天使がひた耳を傾けてくれた部分が大きいが。

嗚呼、終わった。黒騎士になるに至った原点が墮天使である点を「憧れた者がいる」とぼかしたことで、千歌姉ちゃんへの情が狂いの根本的原因であることを除き——だいたいを伝えてしまった。胡座を崩し、寝転がって我は言う。

「所詮は真似事、格好つけだ。我は黒騎士でもなんでもない。……わかつたら処分がひどくなる前に教室に戻れ」

雑な追っ払いを受けた墮天使は腕を組み、なにやら思考し始めた。内容は推し量り難いが、我をもう認めることはないのだろう。もしくはそうあってほしい。

墮天使は真なる友を求めていた。対し我は彼女の在り方に憧れて半端、刀で例えればなまぐらの状態で近付いた。裏切りとまではいかずとも、取り返せまい。

海より少し淡い色をした青空を眺めていると、ヤツが急に立ち上がった。

「ひとつだけいい?」

「よかろう」

「もしかして……憧れた者って私?」

7月直前のむし暑くも穏やかな気候に癒され、大きく息を吸い込もうとし——我はむせた。

「……えっ」

冗談だったらしく、訊いた本人が抜けた反応をしている。せめて安らかな解散へと持ち込もうとしていたのに、墮天使の奴め最後まで計算外だ。

「っ、そうだよ。去年の9月廊下でぶつかったときだ。そこで墮天使、お前を知り……。覚えていないだろうがな」

「……うーん、うん。あの時ねあの時」

「言うな。虚しくなる」

なお覚えてはいないらしい。話を合わせようと尽力するさりげない優しさに、我は諦めて制止した。

「あれっ、待って。憧れ……つてことは……もしかしてヨハネのことを!？」

「ないな」

「ちよつとはたじろぎなさいよ!」

「あくまでまだ見ぬ存在とし抱いた憧れだ。ふふ……まあ確かに魅力的だとは思うぞ?」

「バカにすんなーっ!」

両手をあげたりとややオーバーアクションで怒る堕天使をいなし、気付けば共に笑いあう。よくあることが、今日ばかりは心苦しい。

「……じゃなかった。戻るわよ、リトルデーモン。急がなければ上位存在による迫撃が——」

ふと授業を抜けたことを思い出したのだろう。ヤツが着いてくるよう呼びかけてくる。

「先に行つてろと言つたらう。我はもう少し外気に触れていく」

「ここに来た意味ないじゃない! 連れてかないと私まで怒られるのよ? そんなの嫌よ」

「そうか、やはり抜け出した我の連れ戻しを頼まれたわけだな? ……後日詫びてやる」  
 「いいから行くつ!」

が、乗らない。乗ることができないのだ津島善子よ。断れど粘れど我を連れ戻そうとする彼女の、くいくいと袖を引く手を軽く払って、我は言い放つ。

「津島善子」

「なに、改まつて。あと私はヨハネ!」

「では墮天使ヨハネよ。よく聞け。……もう我をリトルデーモンと呼ぶな。今日限りで契約を取り消させてもらう」

宙に混在する酸素が半分にもなったのか、などとあり得ない事象を疑うくらい力が抜けた。今になって、唇がだらしなく震えてくる。

墮天使からの引つ張る力が弱まり、なくなる。追及するわけでも、すぐにアクションを起こすわけでもなくただ静かに、深く煌めく紫の瞳で、地面から動かない我を見下ろした。

曇りのなきその光に両の目を合わせられず、視界を閉ざす。ヤツが呆れて無言で去り、心配が遠ざかるのを待つ。……こんな時ばかり、墮天使とやらかしたバカバカの欠片たちを連想リコールしてしまう。

さらばだ墮天使。学校及びクラスは同じだが。

「……………へー、いい度胸じゃない」

次に冴えた聴覚に響いたのは、ごくリラックスした応答だった。

思わず終わるまで瞑っているつもりだった目を開け、起き上がる。映る先には……踵を返して我を通りすぎ、つい先刻まで我がいたフェンス<sup>場</sup>に足をかける墮天使が。

「何を……!?!」

私の問いかけに答えず、ヤツは上りきるとポケットを探った。取り出したのは——黒い羽。しかし、既に黒羽はひとひら団子に差している。ますます狙いが読めなくなり困惑していると、ヤツはそれを高く掲げた。



「これ……なんなのかわかる？」

「……いや」

「忘れているというならそれもいいわ——見てなさい」

そして……団子にねじ込んだ。

「羽が……二ふたとなつたな」

「今ので墮天使ヨハネは……リトルデーモンからの贈り物を、想いを享受したの」

そこで今朝、羽を渡したことを思い出した。いいや、それよりも——。

「怒つてないのか？」

「ちよつと！ いいところなんだから邪魔しないでよね」

「え、うん」

「つたく……よつて、今後も墮天使ヨハネに付き従うことを許可します！」

耳を疑った。幾度なく披露されすつかり脳裏に焼きついているあの墮天ポーズをし、ヤツは一言告げたのである。

なおも呆け立ち尽くす我に、墮天使はため息混じりに続ける。

「だいたい、なんで私が怒らなくちゃいけないわけ？ 全部そつちの独り善がりじゃない」

「……あつ」

反論できなかつた。羞恥とも虚無感とも付かぬ不思議な気持ちの沈みように、焦点を丸ごと空に飛ばす。

「湧丞は湧丞でしょ。

私の目が黒いうちは……契約、破らせないんだから」

そうして墮天使後方にて輝く太陽による、白い熱線の眩しきで半目になりかけた時。彼女の指摘が、我の中に巢食っていた底知れぬ闇のような重みを霧散させたような気がした。

ニヤニヤ面になったと思えば、うんうんとうなずく。偽物な黒騎士をあつさり容認した天使は、お調子者の墮天使に戻っていた。「完全に堕ちてしまったようね」とか「決まった……!」とかぶつぶつと呟いている。

依然我は棒立ちだった。強引さや勢いに押された、否。認識のズレに。

我は自分を見失ったことで墮天使のリトルデーモンではいられなくなるものと考え

ていたが、そうではないというのか。

「なによ、文句ある?」

「な……い」

歯切れ悪く出た了承の意が、納得するに足りなかったのか。ヤツはいきなりフェンスを降りると、脱力している我の右手を取り、次いで自身の小指と我の小指とを絡ませ連結させた。

「指切りげんまん……というやつか?」

「下等な人間の中でそう称されてはいますが、違います」

「しかしどう見てもこれは——」

「う、うっさい! 他にいいのが思い付かなかったのよ!」

繋がりから墮天使の体温が部分的に伝わる。白く伸びた彼女の指は、美しかった。

「……ゆーびきーりげーんまーん」

促されるまま、少し固く結ばれた指を墮天使に合わせ上下に振る。ヤツはやたら早口だ。提案しておきながら、いざ始まったからこそ恥ずかしくなったやつだろうか。

「うーそついたらはりせんぼんのーます! 指切った!」

リズムカルに約束は紡がれていき、切ったという語尾を最後に互いの指が離れる。ちようど一限目終了を示す鐘の音が耳に届いてきたが、今更墮天使は気にしないようだった。

「あーあ、あんまり心配かけないでよね」

肩をすくめ、墮天使は屋上出入口へと歩いていく。追いかけていこうにも躊躇っていると、ヤツは進むままこちらをのぞき、面倒くさげにちよいちよい手招きする。やがて出入り口に激突し、体を大きく反らせた。

「……ははっ」

動けずにいた我の所為だが吹き出してしまう。墮天使はというと痛くも痒くもないと主張したいのか、悶絶するのを耐えてドアの真ん中を人差し指でなぞってみせた。

「かなわないな」

「そうでしょう？ 人間風情とは出来がちがつ……あたたた……」

間違はなくヤツは誤解釈しているが、それでいい。悩みやら綻びやらがどうなったかなんて、知ったこっちゃない。

——気が変わったことだけは確かだから、ヤツと教師に灸を据えられに行くことにす

る。

相変わらず前方不注意な奴だな、と悪態をつきつつ。喉がかわくのもそろそろに、フェンス近くから離れるのだった。

## 墮天使と黒騎士は祭囃子を辿る

蒸れた肌にぬるい隙間風を通しがちな夏服に、ようやく馴染みかけてきた7月下旬。

「えー、いよいよ夏休みですが」

終業式  
式典済んだ刻11時前。HRで担任より発されたワードは、クラスを沸かせた。次い

で説明される諸注意からは耳を傾ける者が激減したようだ。我とて右に同じだが。

「クツクツ……」

津島善子とかいうヤツは、既にライフを想像し始めているらしい。非常にニヤついている。めでたいものだ。

外で辺境の大樹たちがざわついている。熱風か、それとも今季脱皮したての蟬の仕業か。頬杖がてらそれを眺めていると、無性に血が滾るようだ。何故なのだろうか。どうあれ、約束された解放はしばし続く。

さて、如何様に食ってやろうか。待ちわびた——過真夏の安らぎ夏休みを。

く　　く　　く　　く　　く　　く

「夏休みよ!? やつとよ、やつーと」

授業がない分すかさずかなバッグを背に、校門を抜けるなり。墮天使はわつと羽を伸ばした。

「来ることなど前々からわかっていた」

「あなたは嬉しくないわけ?」

「愚問」

足取りも軽やかである。1ヶ月もある自由、インドア派といえどアクションの多い彼

女からすれば至上のボーナスタイムとみて違いない。

そんな明らかにハイな墮天使と共にだらだらと坂を下っていく。同時帰還はいつか日課になっていたわけだが、今日をもって長らく機会がなくなるというのは……些か心の空洞を生んだりするのだろうか。

「で、墮天使は課された試練を後回しに安らぎを満喫するのかわ？」

「まさか。まずはさっさと片付けるに限るわ」

「ほう。期日寸前に発狂するクチではないのか」

「あなたのことじゃなくて？」

「ぐ……」

ぼんやり考える間にも、他愛もない話を肴に歩を進める。墮天使は始まった休暇を満喫したくたまらぬ模様で、家に近づくと興奮を高めていた。

相槌打ったり、道端で感極まって墮天使しだすヤツに便乗したりするうち、体感より随分早く分離地点に辿り着いた。

「じゃあね。節度を守って暴れなさいな、リトルデーモン」

「担任みたいなことを……影響されているのか」

「言葉の綾ってもんよ」



学校で会うなり流れて群れるなりしてきたが、特にもう予定はない。基本騒がしく、時にはしおらしくかった津島善子墮天使とも九月まで顔を合わせることはないのである。こうして見ると名残惜しい。

「ん？」

センチな想いがつい顔にでも出ていたのか、墮天使が目を細めた。なんでもないと手振りで伝えると、ヤツは何かをゆらりと間を積めて、これまた憎たらしく肘で我が胸の上を小突いた。

「さては寂しいな？」

「……………」

肯定したつもりではなかったのだが、沈黙を当たりと解釈したらしい墮天使は満足げに我から離れていった。

そういうえば挨拶をし損ねたので、代わりにヤツの影がマンシヨンへと消えるまで見守る。ヤツは途中で半身向くと、手を上げるか迷い……結局、ほんの小さく振った。

……我も帰還するとする。帰ったら一服だ、うたた寝でもしようか。

「さらばだ」

車道の新しくもない標識は相変わらず風情がなく、どうしてやろうかと思う去り際だった。

それがどうだ。

「……絞まらないな」

「まったくね」

夏休みが始まり数日。虫騒ぎつつある、道端で向かい合った我らは苦笑いして。

「なんでこうなるのよ！」

「知るか……」

凄まじい気まずさを嘆く羽目となっていた。前回やたら大袈裟に別れた分恥ずかしいのもある。が、それだけではない。

「ね、ホントに行くの？」

「……そのつもりだが」

墮天使がちょうど近くの喫茶店壁にあるポスターを差し、改め問いかけてきた。内容は内浦の夏祭りについての宣伝だ。

要するに。

だからだし過ぎた挙げ句どこか出掛けてこいと苛立った母に追い出され、たまたま知った夏祭りへ行こうとしたら——遭遇してしまったのである。よりにもよって、ヤツも同じような理由で外に出てきていて。しかも。

「目的地が同じだなんてね……」

墮天使がちょうど代弁してくれた。

そしてご丁寧にもヤツ、浴衣である。得意の黒は珍しくも帯や浴衣生地にある猫といったアクセント程度で、淡い青と純白が映えるラインと模様正方形が基本だ。何気に髪型も後ろ部分を流さず上に纏めている等、やや普段と異なっている。極めつけには団子と突き刺した黒羽はそのままに、儂くしだれた葵い花飾り。よほど気合いを入れて臨んだの

が窺える。

当人いわく装束らしいが、付き添いが居なければ着るのも虚しくないかと突っ込んだところ逆上されたのがさっきの話。

「他にあってはないわけ？」

「貴様こそ」

「着替えてきた意味ないじゃない！」

「話し合いは無駄なようだな」

足向き変え、我は現地の方へ踏み出す。と、ヤツが半歩分前へ出た。

「ふん……」

「む……………」

……あまり疲れてもなんだ、ほんの僅かに加速してヤツを抜く。すると、彼女はまたそれより若干先に。

これは——沼か？

「我はありのままに赴くのみよ」

「ふん、言つてなさい」

歩幅、徐々に大きく。足左右の転換、しだいに疾く。

「ついてこないでよ！」

「どっちがだこの！」

互い顔合わせず吐き捨て、なおも景色の流れは次第にホップしていつて。

ああいかん、これは――

「ふうう……ぜえええ……」

「は……っ……はーっ……」

宵を彩る星のような提灯が、規則的に並ぶ光景。最終的に追いつき越し合いに至った我らは、その入り口で肩を弾ませていた。先程まで空にあつた朱の残り火は、もう満点の紺にすり潰されている。

「……とうとう……退かなかつたなあ……っ」

「っふー……ヨハネが降り立つのは……定められていたもの」

「……もう付いてしまつてはご託もくだらぬ」

「まあ……ね」

人々が横を抜けるなかで息絶え絶え会話する二人組はきつとアウェイにして滑稽。だが並みの者にはわかるまい、密かなつばぜりあいがあつたことなど。もつとも、直ちに考えなければいけないのは成り行きからの双方到着にどう結末を付けるかなのだが。

墮天使の横顔を覗く。静かに呼吸を整える彼女は別人のようだった。黙っていると雰囲気がるで違う。

「おい」

「……まだ息、あがつてるから。できればゆっくりお願いできるかしら」

「いや、いい」

話しかけたはいいものの、こちらも少し息苦しい。仕切り直す。深い呼吸と荒めの動

悸を繰り返したのち、やっと互いに前屈みを崩すことができた。

「ふたて二手に別れましょ……」

「ああ」

ヤツの第一声は個人行動の提案、我は即時に了承した。まさに実行に移そうとしていたことだったから。今更足並み揃えるのにはヤツとてむず痒いものがあるらしい。

「先に行くわ」

「好きにしろ」

現地に着いてしまった今、何もせず帰還するにも勿体無い。しかしこの膠着状態を打破する最も簡潔な案が満場一致、WIN—WINだ。

我は消失点の先まで立ち並ぶ屋台に目を凝らす。予定は狂ったが、ついに勝負所だ。立ち食いルートを決めねばならぬ。

手前の屋台には、熱気に炙られる麺。斜め右に甘汁滴る丸々果実な半端飴、さらに奥では油殻に封じられし肉塊。果ては鮫釣り……こいつはどうでもいいか。なんにしても、隙のない布陣が賑わいの傍らにて奮っている。

墮天使がそそくさと簡易な入り口を横切った。ヤツが人混みに消えたら、我もいよいよ久方ぶりの祭りを堪能すべし駆り出し——

——ぷちっ。

不意に淡白な響きが、妄想をクリアにした。

小さくも近くで立ったものであるのは間違いない。雑踏でもなければ、品を創る過程の摩擦でもない。例えるなら……縄が切れるような音。

「あー……」

イメージが膨らんだとき、既にどこかで心当たりはあつて。喉を締めた低い息が抜けたのは、何歩分が先で一人止まる墮天使の後ろ姿を捉えてすぐだった。

「か、代わりとかつて……持つてたりしない？」

「ない」

半泣き、半笑い。慎重に足を引き摺りこちらに戻った墮天使は、どちらともつかない無念にまみれていた。下駄の鼻緒が真つ二つ、あえて口にはせずにおくのがせめてもの情けか。

向こうから太鼓の連打が届いては、耳に重く残るのだった。



## 墮天使と黒騎士は祭囃子を辿った

背に腹変えられぬ。引き返すにしろ往くにしろ、下駄の致命的欠陥を負った墮天使に残された道は一つしかなかった。ヤツはスマートフォン高中毒性通信機を家に忘れてきたようだし、我に至ってはそもそも持っていない。

「い、いくわよ……」

「もう四度くらい聞いたぞ」

そこで、十字架形態。おんぶともいう。祭典はおろか帰宅もままならぬという悲惨な覆す効果が期待できる。実行する躊躇いさえ乗り切ることができれば。

肩にヤツの手がかけられたので、脚の下部をゆつくり探る。さらさら布地の感触から特定、素早く該当の部分をつまむと熱および微かな脈動が伝った。墮天使はもつとやさしく！ とか抜かす、よせよせ不審者疑惑勃発だ。捕まるのだけは勘弁だと墮天使に黙ってもらおうよう仕向けるが、慣れないことにヤツもパニックなのか聞く耳持たぬ。それでもものけぞらぬよう少しづつ引き寄せて、どうにか背負うのに成功した。

「……重厚」

後頭部を、墮天使の掌が鋭く打ち抜く。

「考えてもみる。……30〜40kgの鉄を運ぶようなものだぞ？」

「せめてオブラートに包みなさいよ！」

デリカシー問題だったようだ。ヤツは墮天使である以前に一人の女だということですつ飛ばしていた。ちゃんと気にするらしい。ちよつと箇所が痛むのを反省材料に、我はしっかりとフオローにかかる。

「保証するさ。お前は細い、触れたからわかる」

「っ!!」

この後、また滅茶苦茶怒られた。心とは測れぬものよ。

「お面<sup>あれ</sup>つけてなら……大丈夫」

「いや、本気か？」

なお、祭りには会議の未突入することにした。仮面を被つての条件付きで。

千葉の鼠にピューロランドの山猫。多くに認められながらも時には畏れられる、有力象徴の偽造顔かめんを被った二人組が……大衆の中で異彩を放っている。

浴衣の女と、彼女を背負い歩く灰服の男。彼らが素面を明かさずしているのは、選ばれた力の持ち主たる代償。

特に、男の方は――

「射的よ!」

「ふははははは!!」

「絶対取ってやるんだか……ら」

「あの伝説の黒騎士!」

「……もしもーし?」

「ん、ああ。こちらの話だ」

いまひとつ会話が成り立ってはいない気がするが、さておいて回れ右の方向へ重心をずらす。数歩、微妙な距離を埋めて我は屋台の前で墮天使を下ろす。

ヤツはいそいそと金を押し付けて支配人から銃を受け取ると、勢いよく片手で狙いを

定め、いきなり発砲した。ポージングだけは孤高の銃士——そして、流れ弾は壁で停止。

変わらぬ調子で、残りの三弾は散弾。最後のが標的にかすったのみで戦利品を得るには至らなかった。

「くっつ、あとちよつとだったのに……」

「構えの問題では」

「あの方がカツコいいでしょ！」

終わったのでまたしやがみ、ヤツを乗つける。後ろなら間髪入れず「行くわよ」とのお達し、ヤツめご満悦だ。祭りへのめり込みがおんぶの羞恥に勝ったようだ。

「全っ敗……あとは水風船だけ……」

「……どうする？」

「やってみなくちゃわからないじゃない、さあ次っ」

「貴様ならそう来ると思っていたよ」

急かすようにバシバシ背中を叩かれる。こいつ、元々どんぱちやるのは好きなのかもしれない。

「あーっ!? また破れたあ……」

「待て、諦めるな我がライフを捧げる……頼むぞ店主」

「あいよっ」

「……と、取れたわっ!!」

立ち込める熱気、屋台から吹くたまの煙も悪くない。無邪気な子供のように頬を明るく火照らす墮天使の所為でか、はたまたプラシーボ効果なのか。絞まらぬ成り行きをもう悔いることはなくなった。

## 墮天使と黒騎士の仲違い　―前の章―

夏休みというものは、尊い。学校にて起こりうる試練から解放され、自由や研鑽に浸り放題になるのはもちろん、乾く世界をじつくりと眺めていられる有限の時間が訪れるのだ。

しかし、儂くもある。終わってしまったえばまるで遠い昔の伝説のよう、さらに経てば何もなかったかのように記憶の片隅からも追いやられていく。

事実、今では一般人共を灼く熱気は弱まりつつあり、ふと運ばれてくる空気も潤いを段々失い始めている。薄布切れ一枚を湿らせていたのが嘘のようだ。――朽ちた大樹の葉が舞い散る季節へと代わるのは時間の問題だろう。

「合唱コンクールまであと二週間を切りました。いよいよ追い込み時ですね、他クラスに負けないようこの2年1組も――」

クラスルームの主導者による通達が嫌でも耳奥まで届いてしまう。現実には打ちのめされるほど、夏休み中の無敵であった日々を思い返したくなる。

祭典では鮫釣りに初挑戦したあげく外し、体力増強目的で赴いた水慣れの泉プールでは金槌を公衆面前で露呈し、他夏休み末には侮っていた迎夏の書に徹夜へと追い込まれ……

「ぐ」

とんつ、と机を軽く拳で叩きつける。恥ずかしくなつたからではない。記憶するに値せぬ逸話ばかりだっただけのこと。斜め右数個分向こうの席にいる墮天使が、ちようどこちらをのぞいてきた。こなくそ、へたれているときに限つて。

故にしつしと払うハンドサイン、受けた墮天使はどや顔寄りの微笑みを返す。絶対的にこちらの意図が伝わっていない。テレパスできるものなら訴えたい、照れ隠しでもなければ魅了されてもないのだ。絶妙にポジティブか貴様。

「居残り練習も許可していただきますので、積極的に取り組んで……是非！ 金賞を目指してください」

曖昧ながら、釘を刺すような締め言葉が煩わしい。各々意味違えど沸き立つ民々、墮天使はうんざりする私の様子にきよとんとしている。よい、おそらくヤツには黒騎士の憂鬱などわかるまいて。

積もる不安というものは、存在選ばず毒と成る。足りない集中力すらも削がれ、我は放課後まで一切の動きなしに、歯がゆくもマインドを枯らした。減気グロッキー様々である。

「明日はすべての者が——神でさえも、あるがままに羽をのばす刻……」  
「な、なんだ突然」

………というわけで打開は後回しに、今日のところはさつさと拠点へ向かうべくH  
R終幕直後靴を取ったのだ我は。実際完璧だったとも、墮天使に捕まる以外は。

「わかりませんか？ 世界の活動が止むということは……好機！ 力を蓄えるのにうっ  
てつけのタイミングなのです」

夕方、今宵と跨げば、一般でいう土曜日である。ヤツのいうことはもつともで、何か  
をするには素晴らしいタイミングである。が……この先を聞いたなら、とても実行躊躇  
われる提案が待っていきそうな気がしてならない。

「このヨハネと共に、響撫の箱庭へと赴きましようっ！」

「さては……カラオケか？」

「下界での通称はそうね」

「は、ははっ……」



白目を剥く器用さがあれば、突如失神した真似でもなんでもしたかった。

「……経緯を聞こう」

「ほら、もうすぐ合唱コンクールじゃない。だから練習を……っ！ いいえ、ヨハネの美声を轟かせるにあたって、さらに磨きをかける必要があるのよ」

しかし焦ってはいけない。慌てようものなら墮天使に不審がられてしまうだけだ。我は基本真つ正面からぶつかるスタイルなのだが、すまぬ墮天使よ。今回は同行をさげねばならない。

悟られぬ程度の深さで息を整え、我はほざく。

「殊勝なことだ、尊敬に値する。ただ、我は思うのだよ。貴様の言う美声はしかるべき場面にとつておくべき、とな」

「……どういふことよ？」

「いいか？ 確かに二人ならば、効率よく声を鍛練できるかもしれない。だがそれは、我だけが誰よりも先にお前の音色を知ってしまう」

「えっ？」

思いもよらなかったか大きく眉を上げる墮天使。我は勢いよく畳み掛ける。

「赦されるはずなし。あまりに不公平だ。故に、いち下界人として……お前の歌声に酔いしれる時を心待ちにさせてもらいたい」

「……………」

いい手応え、目をぱちくりさせているぞ。もう一押しである。

「本番までお預けだ。他の皆と共に歌う傍ら、お前の福音が聴けるのを楽しみにしているぞ津島善子……いや、堕天使ヨハネよ」

「湧丞……………」

「我は先に行かせてもらおう。さらばだ」

終始穏やかに語りかけ、さりげなく教室出口へ重心を流していく。完璧である。あとはそそくさと下駄箱で靴に履き替え退散だ。

怪しまれていないか、ちらと横目で確認。ヤツは思った以上にぼんやり……というか恍惚としている。美声は本心だが、お膳立てはわりとでまかせで物を言ったから、いくらか心が痛む。どうやら追いかけては来なさそうであるし、もはや取り返せるものでもないが。

罪状を年季の入った壁になすりつけるつもりで触れ、ついでに反動をつけて。我は居残り練習の準備をするクラスメイトや放課後掃除に勤しむ連中の間を縫って廊下を抜けていく。幸運にもすれ違う影の中に我とゆかりある者はおらず、ほとんくして下駄箱にたどり着いた。

上履きを脱いで我がポストへ。交代する形で手に取った靴を軽く土足区域内に放る。

照準を合わせて素早く推進力の要を差し込み、狙いの緩さから若干詰まりながらも体勢を持ち直して、修兎の踊り場校庭へ出た。

日差しがやや陽の落ちぶれを予感させる色合いだが、空は変わらない蒼に包まれている。戻れる頃合いは間食を楽しめるか否かの瀬戸際といったところになり……「そうだった」。

「胸打たれたわ、リトルデーモン！」

「だ、墮天使?!」

「ここまで主思いの僕にまで成長していたなんて……すっかり見くびっていたようです  
ね」

「誰が僕だ! で、なんだ。もしや我が忘れ物を……否、置き土産でもしたというのか  
?」

わざわざ追いかけてきたらしい津島善子、雑巾が肩に引っ掛かっているのも、制服り  
ボンが消失しているのにもどこ吹く風、両の手を大に広げる。

「いいえ——非も、見落としてもないわ。強いていえば……すっかり墮天している、のかし  
ら」

「つ、津島善子—？」

「クツクツクツクツ……」

稀に見せるあの囁み締めるような笑い。「だからヨハネ！」。よくやる迫真の訂正すらも飛んでこない。そして、すごく後退りしづらい。もちろん普段のヤツはたいてい元気でやかましいのだが、特に今、めいっばいに魔力全開だ。

馬鹿でもわかる。先ほど我が発した自衛の煽てに対し、純粹に感銘を受けたらしい墮天使は、それでも私の同伴を誘ってくれるのだろう。

駄目だ。先手を打ってはつきり断る他ない。これ以上ヤツを、無自覚なる仮初めの喜びで満たさぬように。

「悪いな。言っていないが我は——7日中で最も土の力が強まる明日に乗っ取り、特殊訓練を行う。これは決定事項だ」

……愚かなる我が舌よ、何故決意に背かんとする。いいや違う、我そのものが抗えなかったからだ。墮天使相手だからこそ、『実践に至った瞬間』『引かれる』——そんな悪夢をイメージしてしまって、我は妥協した。ヤツの性格上、あり得ないだろうに。

「……たまつてる課題がある、とかじゃなくて？」

「乱されぬ平和に、近頃うつつを抜かしてしまっているからな。鍛練せねば」

「日曜じゃだめなの？」

紡ぎしは偽とはいえ浅い御用、流れは僅かにしか変わらない。さつきとは真逆、眉をハの字にしよんぼりさせる墮天使。

「察してくれば助かる」

「そんな……だつて……」

「いいさ。機会があれば、またそのうち何処かへ」

「……でも、暇なんですよ？」

紛れもなく、まずい。弁明しようにも客観的にみれば絶対に我がおかしい。用事ないのに拒否しようとしているのと同義なのだから。

「……………」

「な、何か言いなさいよ」

「……………つつっ！」

「あれって嘘だったの!? ねえったら!」

そんなおろおろするんじゃない、我はただただ穩便に――。

「だったら、なんでよ……」

ちよつとだけ、泪をにじませそうな彼女。どうか誤解するな。墮天使の歌声を聴くのが嫌とか、墮天使自体が煩わしいといった問題ではないのだよ。その旨を伝えようにも、頭がこんがらがって、纏まった言い分が外に出ていつてくれやしない。

何かを疎かにした者は総じて、悪手を打つのである。存分に体験している。わかつてる、わかっている。大丈夫だ、容易いだろう。行くのを渋る訳を明かすくらい。

「……いつ、行くまでもないからだ」

血がなくなつたような浮遊感がしたのは必然で、ちようど花壇近くの大木から枯れ葉が墜ちたきたのはきつと偶然で。墮天使が顔を伏せたとき、我はいたずらな破壊を成したと、虚ろに呑み込まされた。

「――と――に――」

最後、とてつもなく小さく墮天使から放たれたひとことの詳細は邪な秋風にかき消されて聴こえずじまいだった。

背を向けて下駄箱へ逆戻りする彼女。我は手を伸ばす勇氣すら硬直に阻まれて、代わりにいつぞやくつついたのかも知らぬ、学ラン胸ポケットについた糸屑を取り除く。

——手荷物を取りに行くのか？ 途中で巻き込んでしまった雑巾の始末はどうした？ 近くに落としたままだぞ、回収していかぬのか？

的はずれな問いかけが、一部だけ急速稼働する思考の中で浮かぶ。

『うわ』

『……うっそ。あつ、いや！ なかなかいいじゃん！』

『へんなこえー！』

躊躇すべの原因が鮮明に脳裏を掠めたとして、墮天使に傷を負わせた事実は変えようもなく。どうして、顔を合わせられるのだろう。

急に吹き出した背中の汗一筋が垂れ切る前に、ヤツとは反対の校門へと、我は足を向けた。

半端なく、肌寒い。——だから秋は嫌いなのだ。

~~~~~

女性用社員の服装を纏ったシニヨンの彼女は——津島善子の母は夜闇の深さが空を塗り替えて少し経った頃、胸中もう冬至に向かっていることに感嘆しつつ、自宅の玄関に到達した。そして即、彼女は違和感を抱く。つい先刻まで自身の上に展開していた空以上に暗い、部屋の明るみのなさに。

事実、フロアの前にあるリビングに洗面所、愛娘の部屋からも光が差していない。まるで誰もいないかのよう。以前あつた嵐による停電の時とはまた異なる全面消灯は、彼女に一抹の不安を感じさせた。

「善子〜？」



しかし既に時刻は18時を回っている。娘が帰宅していないのは少々考えづらく、さ  
ては寝ているなど考えた彼女は何気なく娘の部屋を開けた。

夜中に寝付けなくなるわよ——なんて軽く注意するつもりが、息を呑むことになっ  
た。

「っ、おかえり……」

娘が、うずくまっていたのだから。内職を重ね出来上がった自室の中でいつもの趣味  
にふけることもなしに、ただ目元を雫で照らして。娘は間もなく嗚咽をもらした。

事情はわからない。ただ母は、そんな彼女をすかさず包み込むのだった。

## 墮天使と黒騎士の仲違い　―後の章―

「今帰った」

「遅かったわねえ、おかえり。あ、もしかして合唱コンクールの居残り練習だった？」

「いいや」

「今年は……歌えそう？」

「ああ、吹っ切れるかもしれぬ」

鉛のような足取りで拠点に入れば、心配をする産みの親。悪気はないのだろうが、放っておいて欲しい。

「ふうん。……そうだ、最近善子ちゃんとはどう？　ねっ、聞かせて？」

「仲良しよしだ」

母の勘とは鋭いものだ。目を伏せたら察される、せめて真っ直ぐ会話する。あとは適当に流してとにかく睡眠を――

「一波あった？」

「ぬっ!？」

あっさり看破され、体が固まる。

「お父さんとそつつつくり。あの人ピンチになればなるほど正反対のこと言つて隠そうとするから。あと答え方雑になるし」

「さすがだよ。偉大なる母には頭が下がる」

「いいから、話してごらんなさい」

御託は通用しないことを悟らすような、したり顔と腕組み。降参、我は一部始終を語ることにした。

「ふんふん、なるほどね……」

一通りいきさつを聞いた母は、

「アホかーっ!」

「……っ」

案の定、掌を我めがけ振り抜いた。

「いやいや、ダメでしょ……」

「痛いのはたくさんだ」

ひりつく左腕。こういうのは甘んじて受けねばいけないのに、わざわざ防御してしま  
う己にはつくづく嫌気が差す。

「ガードする元気があんなら行きなさい。夕飯はないと思いなさいね」

「何処へ……行けというんだ」

「わかっているでしょーが、今からいけば挨拶くらいはギリギリできる時間よ」

「断る。もはや資格はない」

母の瞳に激情が滾った。当然だろう。だが、我が駆けつけられるかはまったく別の話  
だ。

「……寝る」

「何言ってるの、あんた」

頼む、静かにしてくれ。もう考えたくないのだ。

「寝ると言っている。どうか、居間へと去って欲しい」

「湧丞っ!」

眠たい、疲れているんだ。放っておいてくれ。悪かったから。

「湧す——」

「ツう!!! わかるもんか! 人並みに歌える者に!!!」

燻っていた火種が爆発した。

吐ききって息があがる。やがて静まり返れば、外で奏でられる虫の合唱が目立って忍び込んできた。……綺麗だ。それでいて、本体たちの基準では考えにも及ばない点なのだろう。馬鹿馬鹿しくなってくる。

「形はどうあれ、善子ちゃんは理不尽に拒絶されたのよ。拒絶を恐れてるあんたにね」  
「っ……」

狂った時間感覚。秒針はいくら進んだか。我の引きずった叫びを責め立てず、母は事実を述べた。胸に訊かずとも、加速するやるせなさをなおも睡魔に預けることは難しくなっていた。

「外の空気吸ってくる」

「補導だけはされないようにね」

「善処するよ」

「あと、お父さんから『お話』あるって。帰ったら聞きなさいよ」

「……ああ」

まったくもって後ろめたきよ。我はあても決めず、再び靴に足をかけた。

くくくくくくくくくくくくくくくく

伏してゐる布団の一部が濡れてきて、気持ち悪い。

『いつ、行くまでもないからだ』

でも、不快感なんでおかまいなしに何度だつて聴こえてくる。初めて手を取り合えたと思つた人から発された、最後の答えが。

いつからか……変わつてゐる、おかしいって見られるようになっていた私。中学二年生を前にして、ちよつとだけ自信がなくなつてきた中で、出会つた<sup>リトルデーモン</sup>彼。

馬鹿にしたり不思議がる皆とは、「普通」とは違つた。  
 (思ひ上がり……だつたの?)

ぜんぶ、ぜんぶ。

まともにも知り合つてすぐ一戦交えて、契約して、病魔にやられたときも助け合つて、過去を聞いて……たくさんの時間を過ごしてきたのに。

(……ひよつとして、もう話せなくなったりするのかしら)

今日はずつと、苦虫を噛み潰したような顔をした。我慢の限界だったのかな。やっぱり、本当は私に合わせてくれていただけなのかな。部屋は星屑だつて映えないほど暗い。風邪を引いて、心細くて泣いたあの日より。

「リトルデーモン、じゃなかったの……？」

コンコン、とドアがノックされる。返事せずにいたらママが入ってきた。

「ご飯食べる？」

「……いらないわ」

お腹は空いたけどとてもそんな気分じゃなくて、ついぶつきらぼうに答えちゃった。ママは困ったようだけれど、黙って戻っていった。魔力を取り戻したら改めて色々伝えなくちゃ。

……いいわ。取るに足らないこと。休めば、平気。明日からリトルデーモンのいない「いつも」に戻るけれど、むしろ孤高の墮天使として、新たな輝かしい日々が――

「つ……うつ……」

ほら、味方だと思っていた人だって何処かへ行っちゃった。でも、いいの。滴る泪だって、乾けばおしまい。私は——墮天使ヨハネだもの。やなことなんて慣れっこなの。

~~~~~

見上げれば、墮天使の住みか。

ぶらぶら適当に回って戻るはずだった。思うがまま歩いたつもりが、いつの間にかここへ向かっていたらしい。ヤツのいるであろう部屋に……光は灯っていない。夜更かしが好きなあいつが、まだ寝ているとは考えにくい。未だに外界だろうか。

「……ちっ」

都合が良いものだ、我含め人間というのは。懸念から傷付けておいて、果ては憂慮か。罵倒よろしく階段をかけのぼる。



……やがて嫌でも一致する高低差。数メートル先の窪みあるスイッチを押せば呼び出した。来てしまった。

引き返すべきだ、掻き回しておいて何ができようか。頭が警告を促しても、吸い寄せられるように進む私の体は、半ば意思と切り離されていた。無機質なロングトーンが響き初めて身じろげたのだから。

「あなたは……手尾くん!」

「ハ、こんばんは」

扉一枚の隔たりから顔を見せたのが万が一にも津島善子だったら、我はどうなっていただろう。彼女によく似た、というよりまるでまんま成長させた姿のような母親が我を認識した。

「ラッツ! ランニング中です!!」

「そ、そうなの?」

意味不明な訪問理由に、墮天使母は困ったように同調した。だから闇雲に突入すべきではなかったのだ。いや悔いるも遅しか。

「頭真つ白になりすぎて、家間違えちやかなー!」

「いいのよ。あるものね、うんあるある!」

困ったように遠い目をしながらも話を合わせてくれている。面目ない、よかつたら惨めな我を赦してくれたら嬉しい。案の定会話は途切れ、互いに中身なき半笑いを交わす。

どうしてやろうか、どうされてやろうかと探る中で、塗り替えがたい気まずさを打ち破らんとするか、墮天使の母は「そうだ!」と手を重ね合わせた。

「いつも善子ちゃんと仲良くしてくれてありがとうね! あの子時々、話してくれるのよ。リトルデーモン1号がくって」

体温が下がったかのような寒気に襲われる。奇しくも、彼女の話題転換が核<sup>タイム</sup>心部<sup>リー</sup>で。

「……つかぬことをうかがいますが、彼女は今?」

「うくん……」

彼女は愛想のいい笑顔を変えずにしつつも、どこか考えるように視線を泳がす。そして、

「実は——ちよつと、元氣なくて」

崩壊<sup>しんじつ</sup>を報せた。

我の愚行に怒り心頭となつて、ストレス発散と趣味のゲームにでも打ち込んでくれたなら、そちらのずつと良かった。

「ご、ごめんね? 私も何か知ってるわけじゃないのだけど……よかつたら、これからも

善子ちゃんと仲良く——」

「あの、無礼を承知でお願いがございます」

「え……？」

「……5分ほど。いえ、2分でかまいません。津島さんとお話をさせていただけないでしょうか？」

人は己に甘い、特に我は。腐った性根も、将来直らぬ可能性は大いにあるだろう。だがいけない。この瞬間を退いては。我みたく傷心トラウマを馴染ませては。もし今宵を機に契約絶ちきれど、津島善子を延々と曇らせるのだけは。

我は鎧を透けば黒騎士どころか一般人にも及ばぬ「卑怯者」だが、行かなくては。……どうか、彼女のもとに」

くくくくくくくくくくくくくくくく

「ん……」

いつの間にか、眠りに堕ちていた。私の意識を呼び戻したのは換気の足りていない部屋の熱じゃなくて、床の摩擦——足音。軽く布団をよけて、体半分を起こす。

「生きているか？」

知っている声。ママのとは違う。ついさつき、もう関わる事がなくなると思っていた人の声。あつという間に目が冴える。

「……何しにきたのよ」

気付けば、そう吐き捨てていた。自分でもびっくりするくらい低く。もやもやした感情がどんどん大きくなって、考えるより早く私の口を動かしていく。

「私に用なんかないでしょ!?! どういうつもりよ!! それとも何!?! まだ私に不満でもあるって言うの? だいたいそうつきとなんて話したくないの! 帰って!」

いきなり叫んだから、喉がじんと痛む。……他のところも。けど、言ってやったわ。これで湧丞は無理に付き添う必要はなくなるし、私だって自由の身。生意気なリトルデーモンじゃなくて、もつと良いリトルデーモンを探せるんだから。

「……だから消えなさい! とつとと出て行って! ……出て行ってよ……」

「……………」

向こうから反応はない。本当に帰るのかな。

ドアの下、僅かにもれる明かりに照らされた影が揺らめく。きつとそこは湧丞のいる場所。つまりは動いたということ。……やっぱり、帰るんだ。

「なになが『憧れた』、よ……」

こみあげてきた熱いものをを堪えようときだった。

「ラッ、ララララッ、アア」

スカスカで、ひっくり返りっぱなしの音っぽいものがして――。

くくくくくくくくくくくくくくく

唾然としたはずだ。

「ひどいだらろっ……」

「……いい、今の何？」

戸惑いすぎて、ヤツが普通に問い返してきたからまず間違いない。たまには不協和音も役に立つ、おかげさまで話はできそうだ。

「我が黒騎士の誇る特殊音波さ」

「歌、声……？」

「そうだ」

「もしかして頑なに行きたがらなかったのって——」

「まあ聞け」

墮天使を制し、続ける。ここからは手尾湧丞として。

「僕はどっちにしても嘘つきだ。だから、これから伝えることを墮天使さんがどう受け取っても、文句はないよ。だから——まず。」

「ごめんね、墮天使さん」

……ドアの向こうから返ってくるものはないけれど、どうやら彼女は聴いてくれている。

「こわかったんだ。また、自分の声で誰かに嫌われるのが。それで意地張った。でもさ、

同時に……墮天使さんを信じきれなかったってことにもなるんだよね。さつき僕を誘ってくれたのは、昔の人達じゃくてあなたなのに」

「正直あんまり頭は冷えてない。でも、あなたに伝えるのは今しかないと思って来たんだ。……善子ちゃん。あわよくば、聴きたい。あなたが歌うところを」

キイト、ゆつくり甲高く擦れて数ミリだけ、隙間が作られる。真つ黒な闇に紛れて、潤んだ紫が廊下の明かりを受け色濃く光った。

「普通にしゃべりなさいよ……」

「いや普通って……まあ、僕たちの間じゃ今の口調は異端かもね」

「……今度は、嘘じゃない？」

「あなたはいつだって純粹無垢だ。墮天使さんの判断に任せるよ」

「墮天使さん……ってのやめて」

今度はさらなる軋みと共に、一枚の板とノブが軽く僕の腕にぶつかる。現れた彼女は制服のままだった。目の下は腫れて、髪の毛がくしゃくしゃだけど、少し怒った顔は見慣れたものだった。

「解けた？ 誤解」

「どーかしらね」

「僕さ、打ち首？」

「多くは語らないわ」

——ありがとう。

あえて、卑怯者は尋ねる。

「……んん。つ。今宵更ければ、休刻の土に皆埋もれる。出し抜く好機だと思ふのだが……赴かぬか？ 共に響撫の箱庭へ」

「やーよ」

「ふはは、振られたか」

「ただし、ヨハネの歌いっぷりについていけるなら話は別っ！」

墮天使は胸ポケットから黒羽を取り出し突き刺して、腰に手を当てた。すれ違いからの破壊とはいえ、まだ傷は癒えきらぬだろうに。

「あと、罪の分だけチヨコを進呈しなさい」

「いくつ望む？」

「10000個くらいは固いわね！」

「ああ、よかろう」



「本当に用意する気!？」

雨降って地固まるとはいかぬかもしれない。しかしヤツと決裂したのは、過去の重石へ少しの踏ん切りをつけさせてくれたのだった。

墮天使とその母に挨拶し、屋城をあとにしたところから時計が一回りした。区切りつくなくなり腹が空いた効果に煽られ、我はあらゆる始末を済ませた上で食事でありついたのである。

箸で生ぬるくなったハンバーグをさばかんとし、勢い余っておかしな切れかたになつてしまった。

「そういうわけで悪いが——」

ああそういえば。晴れやかな思いで拠点を跨いだせいか、玄関に靴を脱ぎ散らかしたままだったぞ。後程整えなくては。

まさしく他人事のように、親父による『お話』を別なる考えごとで我は切り捨てる。

「すまん、湧丞」

もとい切り捨てたかった。我が失態につき、大目玉を食らうとばかり思っていた。てつきり。

浮かない顔をする親父よ。例えば了承代わりに味噌汁入ったお碗に口をつけるのは、果たしてクールかね？

合わせだしの深みを舌がなかなか捉えない。では、単に我が満身創痕なのだろう。

色々あつたが、明日は堕天使と音色を交わすのだ。チヨコも授けねばならぬ。早いところ回復に臨みたい。

切に願う。

## 墮天使と黒騎士と聖なる夜

木枯らし、すら出涸らし。

近海に飛び込まれば氷塊となろう、屋内とて温もりをないがしろにすれば絶対零度が牙を向く。正確な気温は一桁だったか。空気のみならず笑いまでも乾いてしまう。世にはまだ上……いいや下があるというのだから。

「ありえんな、カーディガンが薄布切れのようだ」

「もうちよつとあつたかいの着てきなさいよ」

「環境変化に適應するためには、自然そのものに身を委ねるのが手っ取り早い。……そういうお前は大胆不敵な『墮天使』の癖に厚着か？」

「翼が凍えていて、どうして墮天できるかしら？」

「ふっ……精々ぬくんでいろ」

墮天使と皮肉に笑い合う間にも、指先爪先の鈍化は進む。鼻頭をほんのり紅くする彼女は本当に芯が冷えてやまないのだろう。強情という一種のフィルターも機能停止するほど、大地は冬極まったのだ。

もつとも、冷えるだけで荒む我ではない。他に拍車をかけている要素があるのだ。

「クリスマス？ いや、ちよつと用が……」

「そろそろだなー、今年はどこ行く？」

「じゃあさ、集まってパーティーね！」

——暖房効かぬ教室で囁かれる、<sup>X</sup> 聖夜の誓い。

「浮ついてるな、まったく」

「んー、別にいいんじゃない？ 楽しいなら」

本当にやりきれない。墮天使も言葉とは反対に唸って頬杖だ。そうか貴様もなのか。わかるぞ疎外感。残<sup>アウトロー</sup>り者は間接的に淘汰される、虚しきかな。暮冬の摂理はいずれ骨身血肉まで滅ぼすのではなからうか。

(……いや、クリスマス……か)

思い至った。人々が灯雪の星に魅せられ、共存する聖夜……「いい機会」だ。半ば衝動、声をかける。

「とはいえだ、墮天使」

顔を向けたヤツは土でも食卓に出てきたみたいなの、しけた引きつりスマイルを張り付けていた。同じ立場ながらその不思議な威圧感に完全閉口しそうになるも、我は互いに籠ポッチリ脱出できるのであろう手段をもちかける。

「今世紀は生憎、我とてその住人。……あえて、あえて興じてやるつもりなのだ、キリストへの崇拜を建前に沸く俗世の聖夜にな。我は赴く。クリスマスだと騒ぐ、馴染みの街へ——貴様は来るか？」

あくまで、処理の難しいやつかみを払うがためだった。一週ついで「通達」をさりげなく完了させられればという考えもあった。我にとつても、ヤツにとつてもWIN—WINと、ひとえに軽く。

思惑通り墮天使は便乗。余裕生まれれば早いもので、太陽と月は数回空を巡り、聖夜と名高き日はすぐにやってきたのだが——。

「賑わってるわね……」

「っ……ああ」

「で、どこ行くの？」

「……ああ」

我が拠点からそれなりに近場、沼津駅。

所詮は田舎、行事で人々が集うにしろたかが知れているもの——昔見たうろ覚えの脳内風景からきた悔りは、我にしつべ返しを喰らわせた。

脱力したまま沼津駅周辺に自転車脚題の方舟で到達した途端飛び込んだきたのは、防寒具などよりよほどあたたかくなりそうな、豊かな表情に包まれた連中だった。雪が降っていないのはまだ幸いだったかもしれない。

……だけならまだいいのだが、質のみならず比率も想像を超えていた。家族友人らで来ている者はいいとところ二、三割。他は愛の傀儡がほとんどなのである。

『いいか。街に駆り出し、それらしく集団に溶け込む。マインドを焦がされそうな今の外界に適応する覚悟こそ、虚無の極寒に対する防御なのだ！』

誘った先日にああ謳った我。なかなかどうして決まっていたものだと、到着早々に自

惚れるはずがッ!

「四面楚歌!! 逃れられぬ業ア……ッ」

片膝をつく。所詮形から入るだけでは、真冬を春の零れ陽みたく優しい光と代えて渡り歩く猛者たちに紛れられるはずもなかった——

「ちよつと! 聞いてるの?」

肩をぶんぶん揺らされ、完全敗北の余韻から解放される。墮天使が眼前に回り込んできていた。

「ん、ああ……」

「ほら——付いてらっしやい」

墮天使はぐつと我の腕を持ち立ち上がらせ、引きずりかねない勢いで我を連行する。元の体勢が悪かったおかげで、そのまま互いの腕を組む形になった。外観だけみれば遊びにきた男女——なるほど。どきどきに紛れて墮天使め、あたかも空気に適応したような形態を素早く作り出した。肉を切らせて骨を絶つとはやるではないか。

「ふー……さむつ。動かないと死ぬわよこれ」

「墮天使よ、お前は格差を体現したような人波をもつとしないというのか?」

「こんなもんでしょ、クリスマスは」

「たくましいな」



まさにプロフェツシヨナル、そして「それより」と澄ました顔で、ヤツは見えてきたゲームセンター電子娯楽の踊場を指差す。色彩乏しいコートを照り返しだけで暖色に染めるような、光の応酬が凄まじいあそこで雌雄を決さんとする腹積もりか。

——滾る。滾るぞ。

「30——何の数字かわかるか?」

墮天使ははやっていた歩みを止める。

「開戦し、貴様を戦意喪失させるまでの秒数——だ」

「む……!」

彼女の紫に焔がちらつく。墮天使にとってかなり自信のある分野への宣戦布告、ヤツが燃えないはずはない。

「返り討ちにしてやるわ!」

気持ちよいくらいにそうこなくちやな応答、無事火蓋は切って落とされた。

「速いッ!」

「ターボはレース（ゲーム）の基本よ、リトルデーモン……!」

「ぬっ」

今日も今日とて、易々と勝たせてはもらえなさそうではあるが。

~~~~~

果てて小一時間。

流れてくるトレンドな楽曲になんとなし耳を傾けながら、露点浮き出たグラスに口をつける。雪崩れ込んできた水は喉を強張らせる……が、すこぶる良い。乾きが季節という垣根を上回ったか、ここに来るまで勝負に熱中していた影響は大きかった。

「ふー、……ふー……」

ヤツはヤツで、ついさつき運ばれてきた無糖珈琲修羅なる黒を吐息で冷まささんと奮闘している。立ち上る湯気が弱くなるのをすっかり確かめるのも忘れない。さぞかし舌を灼いた経

験が多いのだろう、たぶん。

昂りから次の行き場をお互い考えていなかったところ、目につく場所に喫茶店があつてよかつた。

「せつかく冷ましたと思いきや、今度は取っ手が外れたりしてな」

「本当にそうなたらどうすんのよ」

「はは、冗談だ。さすがにありえな——ううむ、貴様に限つては果たして……」

「どうせならはつきり否定しなさいよ……。こわくなつてきたじやない」

渋つて渋つて、墮天使は珈琲をあおつた。コップにも中身にもこれといった予想外はなかつたらしい、いかにもほつとしたような墮天使の深い吐息が教えてくれた。

「う、苦っ！」

「シユガーいるか？」

「……いる」

やれやれ、一息ついて上に視線を移せば木製の天井にいくつか展開する三枚羽のシーリングファン。仄かな暖色の照明が少しかかつていて、とても落ち着く。

と、ちょうど流れていた曲が変わった。某有名女性シンガーのクリスマスソングに。

「元はといえば、今日は聖夜だったな。すっかり失念していたよ」

「あーっ。曲で思い出したでしょ」

「ヨハネアイとやらにはお見通しか」

「ふふん」

シユガーを入れた墮天使が、セルフカットインよろしく誇らしげに指を開閉してみせる。いつ見ても元気なもんだ。しかし、おかげで気兼ねなくあの件を伝えられそうだ。

「なあ。津島善子よ」

「ヨハネー！」

「墮天使ヨハネ——我は」

言いかけ、気付く。空の青さが失せかけていた。

「湧丞？」

「いや、いい。そろそろ行くかうか」

「……うん」

一旦話本題を閉じ込めて、とつくに温まった椅子を立ち離れる。ヤツは特に先を促さずして後に続く、しかし一瞬確かに我が纏う空気の変化に勘づいたようだった。

「せっかくだ。帰還する前に拝んでいこうか、アレを」

「アレって——ああ、知ってたのね」

「聖夜の街へ赴く以上、醍醐味は外すまいて」

参ったもんだ。そんなに神妙な顔をしていただろうか。

~~~~~

「……墮天使よ。この際だ、白状しよう。実は甘酸の爆菜は——私の数少ない弱点のひとつである」

「うっそお!! 昼休みはばくばく食べてたじゃない」

「あの日は克服しようと躍起になっていな」

とりとめもない会話をし、溢れる人の隙間を往く。常日頃してきた、ごく当然な流れも、油断すれば滞つてしまいそうだ。上から紡ぐように飾られたモールとランプの眩しさに焦がされそうなのもまた苦、要するに眩しくある。

……ヤツがこころなしか遠く見える。時折寒そうに白い蒸気を逃がす仕草から、横並びに確認できる彼女のしなやかな歩調まで、惹き付けられてしまう。

その訳が墮天使風聖夜仕様の服装だとか、実は本当に上界から身を落とされた天使のようだからとかだったら、まだよかつただろうに。

なんというか。

「これほど可憐だったか、墮天使って」

つい飛び出した率直な感想が雑踏に消えたのは幸いだった。

さつきからやたらすれ違う者多くから視線が刺さってくるが、だいたいはヤツの方へ向かっている。興味、羨望、色は様々。よく行動を共にするせいで鈍感になっていたが、そもそもヤツはとてつもなく映えるのだ。容姿も、強烈な個性も、節々に現れる愛嬌も。

「リトルデーモンは想像以上に多いようだぞ」

「ええー……だったらもつと世間の風当たりいいと思うんだけど」

「自信を持って」

腑に落ちなかつたか墮天使は軽く唸った。保証すると肩をほんと叩いたら、ヤツはまだまだ怪しみの果て。ほんとだって、煽りじゃないって。

ちようど話題もなくなってきたころ、目的の場に着いた。街道を抜け、普段はのどかな沼津の中央公園内。そこに聖夜ということで設けられた大木だ。

来るには若干早かつたか、歩いてきた場所とは違ってまだ人は疎ら。ライトアップは今かららしい。まだ緑は堂々と目立っている。

近付くと、なんとなく眠りたくなるような薫りが鼻孔から頭へ抜けた。森を想起させる、あの薫り。……人によって好き放題飾り付けられようとも、在り方までもは明け渡ししていないようだ。

「始まるわよ」

墮天使に上着を引かれ、感傷から冷める。我が何か答える前にヤツはもうツリーに集中していた。墮天使と名乗る彼女としてこの手のものは好きらしい。

秒針を刻むこと数回、ちょうど17時。点灯した光が循環するように流れて彩りを変えた。歓声と歓喜が交じった幸福のうねりが、少なからず周りからあがる。

「綺麗ね……！」

「だな」

強いフラッシュに頭から爪先まで照らされる眩しさをものともせず、むしろ半歩ほど詰める墮天使。彼女が釘付けになるのも納得、クリスマスツリーには根本から天辺の星を除き淡くも強い瞬きが迸っている。しかも周りの木々は雪をイメージさせる単色のイルミネーションで景色を作って、一際主役の幹を立てているときた。事実圧巻なのだ。

「まさに地獄絵図」

「どこがよ」

「ある意味、さ。悶え殺されそうだったもので」

「ふふ。まあ一理あるかもね」

なんと心を蕩けさせてくれることか。もつと前から眺めにきたって、よかつたではないか。毎回やっているとは恐れ入る、年に一度のとんでもプレゼントだ。クリスマスツリー、貴様はサンタクロースもどきなのか。



「……えっと」

もうひとたびツリーへ向き直ると、ヤツは急に真面目な顔になった。……墮天使ヨハネとして総括でもするのだろう。感想を振られたら詰まってしまうぞ、我は軽い気持ちで彼女の言葉を待つ。

「来年も——見れるかしら」

全身消し飛ばかと思った。耳が心臓に当たる部分だったら、死んでいる。今の我を現実に還すのは容易すぎた。

「は、はっ。胸打たれたなら、貴様自身が来年も墮天すれば——」

「そうじゃなくて」

「ツ!!」

「い、一緒に。一緒によ!」

彼女一人ならと、もつともらしい筋は断ち切られた。素直さをさらけ出した墮天使は、少し紅い。私の聞き間違いや勘違いなんてことは、ない。

どう答えるべきか。ヤツは、まだ津島善子は知らないのだ。墮天使と仲直りしたあの

日の夜、父から告げられた決定事項。覆せぬ運命。

「では素晴らしいリトルデーモンと共にか。……………いいな」

——僕我はもうすぐ、引つ越この地を離れねばなならない。

「素晴らしいリトルデーモン」に、我は含まれていない。もはや来年、我の姿はない。

「っ、わかったらもう少し前に出るわよ。人間が増えてきたわ」

返事を聞いた墮天使は早めに、誤魔化すように名目を並べ立て、いつもよりもつと強引に我を先導する。ヤツの照れ隠しだとしたらくすぐつたいな。口には出さぬが、少なくとも我はとて照れている。

だが、どうしても、はつきり形にせねばならないこともある。

「墮天使」

ゆえに今日、出掛けるタイミングをもって打ち明けるつもりでいたのに、またもや出

鼻を挫かれてしまった。でも、今回ばかりはしかと伝える。

「んっ。」

墮天使が振り向く。陽炎みたいに勢いでヤツの髪が揺れ、じきにしだれ落ち着いた。きよとんとする彼女を見れるのは、おそらく今回まで。

ここ一ヶ月、伝えるに伝えられなかったが。残酷なり、色々臆病な我と友人関係を築いてくれた墮天使よ。

「さよならだ」

声に、あまり力がこもらなかった。

——ちょうど雪でも降ってきたなら、まだ絵になったのだろうか。

## 墮天使と黒騎士は……

総合してもまあまあ歩いたからか、寒気にうなされ指は明らかな乾きを帯びている。後々痒みに苛まれる類いの乾きだ。墮天使はかぶれひとつない、もち肌か潤い肌か知らないが、荒れとは無縁そうで羨ましい。

早く帰還し、手をヒールしてやりたい。グローブさえあれば……。帰路までもつか怪しいぞ、今歩いている街道がまあまあ暖かくなければ絶対詰んでいた。

とか、呑気なことを考えていなければ平静を保てそうにない。すべてを告げてから、とてもクリスマスどころではなくなってしまった。

適当な話題でも出すかと隣を向くと、墮天使が口を開くところだった。

「さっきの『さよなら』って……」

「墮天使が想像している意味が、おそらく正しい」

「来年はいない、ってこと？」

「小腹が空かないか？ 例えば、アイスを食べるなんてどうだ。いや、拠点での食事に差し支えるか。じゃあやはり真っ直ぐ帰って……」

「じ、実は！ 引越し先は隣町でしたーっ……とか？」

歩みを止めて、驚いたか？ とか抜かせたら、悪い冗談で済んだのだろう。しかし。

「東京だ」

「遠い……」

表向き中学生たる我々には絶望的すぎる距離、そうそう埋められそうにない。

呆けて歩く間に、我々はアーケードを抜けて自転車を押していく。駅のすぐ近くといえどもやはり田舎。一定の区間ごとにある街灯と、さほど多くない建物の明かりは心もとない。

「まだ滑りやすい所がある。気を付けろ」

「わかってるわよ」

「さすがだ」

あれからほとんど会話がない。というより、何を話せばいいか見当つかぬ。

……言うタイミングを間違えただろうか。いや、思うところはあがるが、ギリギリで明

かしていたらお互いにもっと苦しんだだろう。よしとしようじゃないか。

「やはり冷える。……まだ時間はあるか」

「いいけど、どこ行くのよ」

「あそこの最寄りの万物庫マンブツクラにな、少し寄りたい」

墮天使のトーンは低く乗り気じゃなさそうだが、気が変わる前にさっと自転車を詰め、止める。沼津店が目と鼻の先にあつて助かった。外で待つか同行するか訊けば、ヤツイわくさつささと戻つてきてとのことだった。

店内に入ると、効いた空調が寒空に晒され続けた体を早速癒した。かなり回復しそうだから惜しくもあるものの、長居はしない。我は目的の物を手に取り会計を済ませにかか。店員が私の格好を見るや半笑い。放っておけ。

消費者としての責務を終えた我は自動ドアを無駄なくスルーして、墮天使の元に戻つた。

「早かつたじゃない。……なんか買ったの?」

「やる」

ヤツが問いかけるのと同時に、ビニール袋から取り出したものをヤツの空いている手に授ける。我の目的はこれだった。

「……チヨコアイス？」

「まあ、アイスは先ほど我から提案した挙げ句却下したが……オゴリ、というやつだ。煮るなり焼くなり好きにしろ」

「それじゃ消滅するわよ？」

ヤツはやつと、ぎこちなくも笑った。我は無力だ。こんなことしかできやしない。

「では肉まんにするか？」

「んー、じゃあ甘美の氷牙で！」

「より寒くなりそうだが」

「あなたが買ってきたんでしょーが」

だけど、ちよつとだけでも元氣付けば……いいな。立ち食いもなんだということ、我らはそばのイートスペースに腰かけた。

アーケードとがある駅の向こう側とは違い、人の熱はほぼ、照明も頼りない。18時をとうに回った師走の夕刻は、いざ中心部を抜けると底無しに思えるほど酷。どうして

か、今はそれがあまり気にならない。カイロにすら頼りたいほどだったはずが。  
「つめたっ」

「肉まんじゃなくて良かったのか？」

「失敗したかも……」

「チヨコにつられたのだろう。とことん詰めが甘いのだよ、墮天使」

そそくさと包装を解き、冷氣漂うアイスを頬ばるチャレンジャー津島善子。即返り討ちにあつて怯む彼女は、変わらずポロだらけの愛らしい墮天使だ。過ごす間によく目にしてきた「ありがち」が、ものすごく尊く映って仕方ない。

「ぐぬぬ……肉まんをヨハネに献上したまえーっ！」

「いやだ」

「リトルデーモンの「反逆厳禁！」

「ぐああっ！」

些か短気で、墮<sup>必</sup>天流奥義<sup>技</sup>を仕掛けてくることもしばしばとはいえど。あと今ので互いに落とした。

「うわあっ！ もったいなあああいい！」

「ク……ハハハハッ!!」



「あなたのせいなんだからね！」

「先に手を離れたのはどこのリトルデーモンだっただろうな？」

ちくしょうめ、やってくれる。目尻に情が波立たないようにするのが大変だ――。

~~~~~

聖戦と後始末に追われていたのも、拠点まで戻ってきてしまえば遥か昔のワンシーンに思えてくるものだ。コンビニを前に騒いでいたのが、あつという間に墮天使が住むマシンの入り口だ。

「おい。散々付き合わせてなんだが、晚餐には間に合いそうか」

「なんとかね。最悪、高速墮天するから大丈夫よ」

「おおかたスライディングだな」

「ちーがーうー！」

ただ、いつもみたくヤツと軽口を叩き合うのは変わらない。だから、いい。最後までそれで。

「じゃ。また」

「ええ」

墮天使に一言残して自転車のロックを外す。肉まんだけでは足りなかったから、早く帰って馳走にありつきたい。

「くっ……」

足音がしないなんて、気付かぬわけがない。ヤツのホームスペースはマンション上階だ。エレベーターに向かうにしろ、階段を使うにしろ、動かなければ翼を休めにはいけない。つまり、その場にまだいるんだ。

——後ろ。ヤツを見てはいけないやつだ。

「湧丞っ！」

ほら、どうしたって我は墮天使に敵わない。あつさり反応してしまった。振り返らないのでやっただ。

「わざわざ呼び止めるとは、意地でも肉まんが欲しかったようだな！　ならば、チョコアアイスに流されるべきではなかったのだ」

「ねえ。やつぱり……どうにも、ならないの？」

尋ねてくるヤツの語尾がひどくか細いのは、氷点下の気候にそろそろ限界がきたからだ。「どうにもならない」とは、アイスのことだろうか。——そうだ、そうなんだ。間違いない。アイスのことに決まっている。

「悪いな……ッ」

「たかがアイスじゃないか、いったい何を謝っているんだ我は。悪かったなア！」

ああ——

「だつ、墮天使の慈悲です——今回はリトルデーモンたるあなたを赦しましょう。次は、次は肉まん捧げなさいよ！」

私も墮天使も、寒さにやられて声が掠れている。まったく、聖夜くらい格好良く締めたいのに。

止まるな。行くんだ。ゆえに無駄なくハンドルを握る。

「くく……冬休みは近い！ 運が良かったな！ 時が来たら、いずれ肉まんはくれてやるッ!!」

捨て台詞と共にペダルを踏み込んだ。力強くやったからか、想像以上に素早く自転車がマンシヨンのテリトリーを抜けていく。

「絶対よ。絶対だからね！」

なんかフラグみたいだからその送り方はやめておけ、津島善子。私の叫びは枯らすよ  
うな強風に阻まれたのだった。

12月25日、曇り時々雪。愛の傀儡に対するヘイトから決行したアーケードへの墮  
天は、水雲の奇跡雪が降りそそいできたところで幕を閉じた。

## 墮天少女と中二病少年

開ける前は何気ないドアなのに、入ってみれば魔境である。

「待たせたな」

「怖じ気づかずに来たわね」

深紫のカーテンに外界はシャットアウトされ、周りにはファンタジー全開な凝った金具や敷かれた魔方陣。して、中央。美しくも歪な金具にフィットする蠟燭を携えた、ローブ装備の墮天使。

が、我とて丸腰ではない。黒刀も鎧も装備してきた。

我らがいざ始めんとするのは。

——墮ちた天使と黒き騎士の最終決戦也。なり

「始めましょう……ふうっ」

墮天使の吐息で炎はかき消え闇が覆い……やがて部屋は再び光を灯した。

全速力で墮天使が電気のスイッチを押しにいったことを、指摘したりは決してしない。野暮である。というかかつて指摘したら怒られたからやらぬ。

と、まあ。なんだかんだで我と墮天使は集合していた。あれきりのつもりが冬休みに突入するや悶々とし、合意を元に再会するに至ったのである。

我は剣を邪魔になり得ぬそこらへ立て掛け、魔方陣の一端に腰を下ろす。追って墮天使も隣に座る。

「……………それで、何を？」

「考えてなかったわ」

「奇遇だな、我もだ」

「とりあえずゲームでもする？」

「うむ」

長くも短くも感じた日々は、いつも通りに、それでいて確実に終焉を迎えんとしていた。

「やはりゲームだけは強いな……」

「『だけは』ってなによ『だけは』って！」

結局全敗だった。ゲームセンターでの雪辱を果たせなかったのは痛くもある、とはいえ完敗だ。遠回しな負け惜しみにも気付かず食いついてくれる墮天使の乗りやすさがありがたい。

さきほどまで魔力の満ちた物で溢れていた小さなテーブル上には、お菓子とハーブティーだけが置かれている。墮天使によるとポーション。

洒落た英数字であしらわれた時計の余韻に浸って、ありがたく魔力が満ちる（墮天使談）ポーションをいただく。まるやかすつきりな味わいが広がり、口内が大いに潤った。

「……いつだっけ？」

「明日」

「そう」

我は流れるように答え、ヤツもふーんと頬杖をつく。もはや両者動じぬ。

「達者でな」

「言われなくたって」

昼食を終えてわりとすぐ訪問したのだが、早いものでもう帰還する時間だ。床に預けていた重心を戻し立す。多くは語るまい。対し墮天使はぐったりと肘から机にもたれかかった。

——今度こそさらばだ墮天使。

我は部屋の出口、ドアノブに触れ。

「やっぱまてえーいっ!!」



瞬間、猛スピードで回り込んできた墮天使によって奥へ押し戻された。

「……はは。なんだというんだ」

「儀式よ！」

「悪いが、あまり悠長にしてられん。戻って荷物を纏めるミッションがある」

「すぐ終わる！」

どうしたことが増して唐突だ。こちらまでできた勢いで魔王に刺している羽が落ちたぞ、拾わなくていいのか。戸惑ってる間に、ヤツは思わぬ指示を出してきた。

「目を、瞑りなさい」

「なんだと？」

我は目を瞑る時に起こりうる展開を、人間のドラマや創作から知っている。困惑が動揺に変わろうとも容赦なく墮天使は謳う。

「ククツ……さあ。恐れずヨハネの導く闇に身を委ねるのです」

「だって、それは」

「さあ！」

「つ……」

いや何故だ。あまりにもイキイキとしているヤツの言われるがままにしてしまった

が、とんでもないぞ。

「そのまま」

暗闇の中から墮天モード特有の妖艶な声が聴こえてくる。床に布が大きく擦れた音、ヤツが距離を詰めた証左。

「おいおいおい!!」

「動かないで!」

「んなこと言っても!」

熱が近付く感覚。かなり近い。掌に温度……掴んだのだろうか。次いで柔らかいものでなぞられるような感覚。体が強張って動かぬ。

「うおおおお!」

「はい、開けていいわよ」

最後には墮天使の解放の合図が。まずい、まずいまずいまずい! ……ん?

「……………えっ?」

解放、とな? とりあえず開眼……嗚呼、差し込むライト。灯火の残像ちらつく視界の先にいる墮天使は、我の掌をニヤニヤと示していた。

誘導されて掌上を見やれば、謎の生物クリーチャーが描かれていた。

とはいっても、ポップな外見だ。真ん丸の体軀、黒い点の目玉、のほほんと上がっている口角、頭部には左右にシンプルな曲角<sup>ホーン</sup>。すなわち悪魔……らしきもの。

なるほど。我が目を瞑る間、こいつを描いていたのか。

「うん。何コレ？」

「紋章！」

「おお、紋章。そう……紋章、ね？」

「忠実たるリトルデーモンの証……！」

たいそう満足げな墮天使。

……我はとてつもなく恥ずべき勘違いをしていた。穴があれば——なお破壊して陣地を広げ、なおも中で剣を振るいたくなるレベルの。

「——殺してくれ」

「なんでよっ！ そんなに嫌がらなくたってー！」

「違う、愚者の愚者へと成り下がったのだ。我が」

「へっ？ 何が？」

項垂れる我とすっかり弾けた空気を仕切り直すように、ヤツはひとつ咳払いし、続ける。

「遠く離ればなれになっても、あなたはリトルデーモンだから……。刻むのです」

「墮天使イ……」

「ふふっ……涙は堪えて、胸を張って新たなる地に墮天なさい？」

ヤツはそう啓示し、微笑んだ。

——最後の最後でつくづく天使な奴だ。

だが、だが……!!

「それさえ先に言ってくればアアアツ……」

「湧丞？」

非常に形容し難い、そんな正月明け。

「ちくしょう！　ちくしょう!!　もう絶対こんな田舎還らないからな！　精々リトル

デーモンを増やせよ津島善子オ!!　元気でな！」

「上等よ、二度と帰ってくんなーっ！　だいたい、まだ根に持ってるの!?　いやあんな勘

違いしてたのは意外だったけど!! 向こうで無茶すんじやないわよ!」

「そーいや渡し損ねるところだった! ほら肉まんだ!」

「もういいわよ肉まんは! もらうけど! ありがとう!!」

墮天使と、我、黒騎士はドタバタがてら会合を終え。最後は罵倒エに励ましルを交わし、  
各々の道へと――。

くくくくくくくくくくくくくくく

もう、1年と半分になる。高校生になって、色々あって、新たなリトルデーモンもできて。忙しけれど、充実した日々を私は送っている。

「おじやましまーす……。ここが善子ちゃんの部屋……。なんだか、すごい」

「思った以上に墮天使って感じの置物がいっぱいいら」

「置物ではありません。すべてヨハネが持つ魔力を増大させる器——無視すなー！」

今日は、同級生でありリトルデーモンでもある「ルビイ」と「ずら丸」が私の部屋を見てみたいってことで、遊びに来ていた。ぜんっぜん墮天使グッズたる魅力を理解していないみたいだけど、楽しそうで何より。

「うわあ、剣みたいなのもある！ これも善子ちゃんが……。？」  
「あ……」

と、ルビイが注目した。——西洋風の黒い刀のレプリカに。否が応でも浮かんでくる、真っ黒な彼。

私は少し迷って、答えた。

「いいえ——ある眷属の、置き土産よ」

くくくくくくくくくくく

駅のホームを出て外の空気を吸ったことで、乗り物酔いが覚めていく。

「強敵だった」

手放しで電車を称賛する程度にはきつかった。現地に着いたばかりだというのに。

見渡せば、過去生まれ育った場所へ帰ってきたことを実感する。入り口は大きいわりに、若干閑散とした商店街も、道路。自然寄りのうまめな空気。

……気は進まないが。おもむろに、歩き出す。

用件は他でもなかった。黒刀だ。

最後に戯れたあの日。散々取り乱した果てに墮天使の家に置いて拠点に帰還、荷造りする間も気付けずそのまま引越した、と。間抜けを通り越した何かである。ひとまずは泣く泣く諦め、ずっと取りに行くタイミングを窺っていたのだ。でもって今夏、好機が巡ってきた。

(さて。如何にして回収するか)

考えながら歩いていると。

見覚えのあるものに、足が止まった。

知っている標識。じゃあまさしく今いるのは、かつての通学路で。どっかの墮天使と、初めて決闘した場所。

「愉しく生きているだろうか、ヤツは」

陽が傾きつつあった。決闘は昼だったか、時間帯が違うというだけで随分別の場所に思えてくる――。

「探し物ですか？」



回想していたら、後方から声がかかった。こちらの黄昏る様子だけで狙いを看破するとは大した洞察力だ。

「ああ。しかし特殊な代物でな、一般人には——っ」

応え、出かけた門前払いは。その姿を目の当たりにして途切れる。

「墮天——降臨」

黒基調のパーカーを纏い、かつフードをしていて一部隠れているにも関わらず、誰だかわかってしまったのだ。

「我が秘剣の行方を知っているというのか——何者だ？」

忘れるはずもない。自分でも白々しい。しかしあえて、我は訊く。

ヤツがフードを取っ払う。さすれば顕になる魔玉、無邪気にギラつく瞳。挑発的で危なっかしいシルエットは、パワーアップしていた。

「墮天使ヨハネ——」

「ハハハハツ!! 知らんな、墮天使だと?」

俊敏に一步下がりに、構える。

「物覚えの悪いリトルデーモンなこと。いいわ、再び貴方を墮天使させてみせましょう」  
呑み込むような眼差し、オーラ、口上も。すべてが健在だ。

「フツ、楽しみだな」

相手にとって、不足なし——。

「で、何故こんなところにいる?」

「こっちのセリフよ。まーちよつとランニングをね。最近始め……いいえ、飯の器の強度を高めていたまでよ。あなたは?」

「実は引越す前に黒刀をお前の拠点に忘れてしまってたな、返してもらいたい」  
「でしようね。ほんつと、しょうがないんだから」  
「面目ない」

— 墮天少女と中二病少年 — 終焉

## 番外の章

## 争奪Guiltyジャツジメント

審判、つまり判定を下すこと。

我はとりわけそんなものに興味があるわけでもない。むしろ曖昧を好んだりする性質だ。

「ああ〜ごくらく〜」

「墮天使」

「……なによ」

「弁明は早い方がいいぞ?」

「……………」

やはり建前でしかないのかもしれない。

雪が地を汚そうとする夕刻。暖房なき私の自室。二つの因果が導きしは……疑似の冷蔵庫である。とにかく肌が変に張ってしまいそうでならない。

さて、ここに救済措置がある。寒いと嘆き続けた我をみかねた母が、二年ほど前に用意してくれた一人分のこたつ。団熱の鳥籠暖を取る唯一のスペースである。

そこが強襲してきた者により塞がれ、入れないとしたら。

「なんのことかしら？」

「とぼけるのもほどほどにしておくことだ」

そして、さも当然のように占拠を続けているとしたら。

「眠くなってきたわ……」

「元は我が入る場なのだ。そろそろ温まっただろう、三十と五分も入っている」

「おやすみなさい」

「聞いちゃいないな」

残念ながら空想ではない。こたつに半身を忍び込ませた墮天使が、とてもフリーに突っ伏している。

「よーしどくんだ」

「い、嫌よー！」

したがって、悪という判決を下すのが理。

「私のこたつだぞ！ だいたいゲームしてきた分際で貴様よくも独占しようなど……」  
「寒いから仕方ないじゃない？」

「ああ、だがだめだ。一番寒いのは誰だと思っている？」

「雪国で生きる人間に決まってるでしょ」

「あ……」

納得して顔を背ければ、墮天使はふふんと鼻を鳴らした。しまった、完全に先手を打たれた。

……いいだろう。目的はこたつを取り返すことなのだから。まともに張り合つたとして平行線にしかならないのなら、別手段だ。

我は立ち上がり、次の作戦に出る。

「墮天使ヨハネ様」

「なんか口調変よ!？」

「このリトルデーモン手尾、折り入って頼みがございます」

正面突破は愚かなり、ならば。

「いきなり怪しすぎ……いや、でも悪い気はしない……かも。いいわ、言ってみなさい」  
「近頃、周囲にただならぬ悪寒がするのです。わたくしめはその原因を……異空間の刺

客が成す裏工作によるものと推測しています」

「まさかリトルデーモンを狙って?！」

「いいえ。側近のわたくしはおろかあなたをも滅ぼし、世界を手中に収めようとしているのではないかと」

「どうすれば……?」

嵌め手である。この程度のものにはさしもの墮天使もかからないとは思うが。まあヤツ自身かなり食いっついてるので、適当に続けてみることにする。

「それが本題。心配ご無用、ごく簡単なことです。今わたくしが立つこの絨毯に、結界を張り巡らしていただきたい」

「結界?」

と、呑気していたのだが。墮天使がうずつとした瞬間を我は捉えてしまった。そそれ力を解放したくなったとき、ヤツの中で燃烧が始まったときの——學動仕草を。

「図らずとももうひと押し——いける。」

詳細を教えるに欲しげにこたつのなかで軽くもぞつく墮天使に、我は下衆なる目論みを感じさせぬ戯れ言を並べにかかる。

「はい。奴らの妨害を食い止めるべくわたくしの力を日々込めてはいますが、敵わないのです。しかしあなたの魔力をここに加えることができれば」

「地上は無事……」

「そうです」

墮天使がおもむろにこたつを抜けた。気怠げながらも我の方へやってくる。やがて、ヤツとこたつとの距離が若干開いた。

——今だ！

バックステップ、次いでなだれ込むようにスライディング。慣れた動作だ。こたつや本棚の角に足に体をぶつけることなく、滑らかに決まった。

あたたかみへ、いざ。

「残念だったな！　これよりこたつは我の……あれ？」

奪還を喜びかけるも、何かがおかしいことに我は気付いた。騒がしく流動した血が徐々に落ち着いていくのを悟りつつも、違和感の正体を突き止めずにはいられない。

（低い……？）



温かいことには温かいのだが、これからぬるくなるっていきそうな、ほのかな温度。

「もしや!!」

「……やっぱりね」

嫌な結論が頭にちらつく頃には、もうヤツはドヤチツクな面構えだった。

「あのもぞもぞはこたつの電源を切るために……!?!」

「ヨハネを出し抜こうなんて一万年はやーいっ!」

普段引つかりがちなだけに、衝撃は鎚を喰らったかのようなインパクト。ヤツが……悪魔的機転を利かせるなどとは想像し得なかった。

戦慄する私の背後を、すかさず俊敏な動きで堕天使は取る。

やられた、と口にするのすらも間に合わない。

「さーて。結界を張るその前に、悪事を働いたリトルデーモンにお灸を据えなくちやね?」

「あつ、あつ、堕天使よ。チヨコレート余ってるから取ってきてやろうか?」

ヤツは至つて素直に、公平に。

「拒否! 堕天流鳳凰縛!」

「うぎやあああああああ!!?!」

審判を下したのだった。

## 墮天使と黒騎士、魔の地（校外）へ赴く??

——ジリリリリリリン！ ジリリリリリリン！

眠れし我の耳へ、けたたましい妨害。

「ん……んん？」

十数秒して、我はその正体が目覚まし時計によるものだと理解する。曖昧にしか働かぬ頭で考え——これは昨夜セットしておいたのが原因だと思い出す。

最低限だけ開眼、横たわった姿勢のままかけ布団の中から手を伸ばし目覚まし時計を停止させた。チェックした時刻はちょうど7時。意識は半覚醒状態。再び休息の闇へと沈むのも悪くない。

しかし、またもう一つ思い出した。

「遠足だった、かあ……」

あくびをしながら半身起こし、我は呟く。今日は確か遠足があるのである。したがって学校での集合は早め。

……だとしたら、布団にはもぐらぬほうがいいのだろう。もしそうしたら我は寝坊するやもしれぬ。

「いいや自分を信じよう。我は黒騎士、常人のようなヘマはしまい——もう一度、おやすみだ」

だが、再度眠りにつくことにした。失敗などありえない。何故なら我は黒騎士だから。

ベッドに体を預け閉眼、布団をかぶる。次に覚醒する瞬間こそが我の駆動開始だ。

「……ククツ、いずれ我は黒騎士から暗黒騎士へとクラスチェンジするのだ……ククツ……クククク……」

少々して、意識が底に落ちはじめた。ゆっくりとした良き気分である。現在我は夢見心地ゆえ、無意図に何かしらのうわごとをほざいている可能性があるが——あまり細かいことは気にせずにおく……。

——ガチャツ！

しまさに就寝しようとした刹那、部屋に誰かが訪問してきたのを告げる音がした。

「リトルデーモン、今日は魔の大地へと墮天する日よ？」

間髪入れず続く女の声。それは気取ったような甘い美声。

「……」

我、微動だにせず沈黙行使。きたか墮天使。まあ想定はしていたが。彼女は契約以

来、学校がある日は我を叩き起こしにくるようになった。だからもはやここに顔を出す

のはお馴染みである。

長く眠りたい活動のためのエネルギーを余さず溜めたい我は毎回抵抗するのだが、いつも彼女には根負けしてしまう。墮天使はしぶとい。

「寝ぼすけなのは平常運転ね。ほらっ、目覚めなさい?」

「認めよう、寝ぼすけなのは。お前が先を急ぐというなら我を置いてさっさと行け……ぐう」

早速墮天使が口を開いた。まだまだ眠いので、理由のみ伸べて我は口を閉じる。たとえ遠足だろうが今日こそは折れぬ。我はもう少し寝ると決めたのだ。

「ギリリ!」

墮天使が諦めるはずもなかった。彼女の奇妙な独り言と詰め寄ってくる足音が聞こえたと思ったら、直後我のかけ布団が素早く引つpegされる。

「墮天使奥義・墮天流引離反!」

「うおおっ、よせ! 返せ!!」

4月下旬でも朝はぶるつとくるくらいには寒い。ぬくもりがなくなつて、我はたまらず跳ね起きた。墮天使の方を睨むと、彼女は嬉しそうに略奪した布団を両手に掲げている。

「おのれヨハ——墮天使」

「え!? 今『ヨハネ』って言いかけなかった?」

「っ! 寝ぼけてただけだ!」

「いいのよ……私の名を呼んでみなさい、リトルデーモン」

「くっ——私の負けだ! 起床ればいいのだろうツツ!」

やられた。普段はやかかさぬ呼び方をしてしまいそうになった気恥ずかしさを誤魔化しながら、我はベッドから飛び降りる。墮天使は勝ち誇った顔で布団を返してきた。なんだか最初の頃と立場が逆転しているように感じるのは気のせいだろうか?

「……だが名は善子だ」

「善子言うな!」

根負けした我は、その後のそのそと荷物の確認をはじめた。着替えるのは後。黒騎士が間抜けに忘れ物などできまい、荷造りが最重要なのだ。

「湧丞く、あなたの水筒持ってきてあげたわよ……って、まだ着替えてなかったの!」

「ん? ああ。荷造りに手間取っていてな。というか、なぜお前が我の水筒を?」

「いや今言ったし! 手伝ってるの!」

「ハハハッ……」

「もうー」

墮天使はついでだとか言いつつも助太刀してくれている。こいつ、ぶつきらぼうだが心優しい奴なのかもしれぬ。それと性格的に「天使」の方に近いとも思える。だがそれよりも、我には気がかりなことがあった。作業の手を緩めぬようにしつつ、我は墮天使に問いかける。

「墮天使、そのくまはどうしたんだ？」

「こ、これは遠足が楽しみだったとかじゃなく……」

「楽しみだったんだな、墮天使？」

「ちがつ——」

あわてふためきながらも否定を示そうとする墮天使。どうやら楽しみだったらしい。わかりやすすぎる……。

が、そう決めつけた我が愚かであった。

「ふっ、ふふふ……。この眼の下のモノを、人間風情のくまと一緒にしないで。これは昨宵——ヨハネの魔力と地獄の念波を共鳴させて使い魔を召喚したときに出来た代償よ!!」

「なにいいいっ!?!」

たじろぎながらも墮天使が明かしたことは、とてもただ事などではなかった。我は動揺した。

「そんなバカな！ 本当なのか？」

「ええ……も、もちろん」

墮天使は肯定する。妙に彼女の齒切れは悪かったが、それはこのことがそうそう外に公言できぬ話だからに違いない。

我は――

「使い魔とはカツコイイではないかあツツツ!!」

「とつ、当然でしょ！ あーっはっはっはっはっはっ！」

感銘を受けて、舞い上がった。

「な、なんとか誤魔化せたわ……」

何かを墮天使がぼそりと言っていたが、はしゃいでしまっていた我はそれを聞き取るに至らなかった。

20分ほど経て、朝食と荷造りを終えた。今から学校に赴いてたところで集合には余裕がありすぎるが――墮天使が行こうと急かすので、早くも出発することになった。



……のだが――。

「嘘でしょ!？」

「悪天候、か。確か雨天の場合は……予備日に延期」

「朝に家を出たときはちゃんと晴れてたのに……」

家から外に一步出てみると、あいにくの超豪雨。ダイナミックスコール辺りの地面にはもう大きな水溜ま

りが何カ所もできており、独特の湿り気と二オイがひどく充満していた。おそらくは準備している間に降り出したのだろう。たまたま自室のカーテンは閉めきっていたし、なにより必死だったので気が付かなかつた。

「……遠足は雨天中止だな。このままだと通常授業、お前が持っている遠足の荷物とは別の用意が必要になる。不本意かもしれぬがお前はひとまず帰れ」

「そんなーっ!」

雨の勢いが衰える雰囲気は全くない。こうなつては仕方ないぞと我は墮天使に促すが、墮天使は切実な嘆きをあげていた。結構落ち込んでいるようだ。ただ、彼女の横顔には――絶望だけではなく、こうなるのをどこかわかっていた。諦め。の色があるように見えた。

……と、ここで一種の推察が生まれた。我は確かめるべく墮天使に問いかける。

「お前、さては薄幸か?」

すると墮天使はぎくつとしてこちらへ目線を合わせた。凶星らしい。

「決戦した日、お前は何もないとこで転んだよな。この間帰宅していた時もそうだ。犬のフンを踏んでしまったり……今日だって、いきなり最悪の天候がおとずれた」

「……まあね？　ヨハネは天界の神に嫌われているから、不幸体質なのよ。これは昔っからそうだし、もう慣れっこ」

当てられたのには驚いたようだが、墮天使は澀みない口調でそう返した。

「でも——今日は晴れるかもって、ちょっぴり期待した。いつもいつも行事の日は雨ばかりだったから、起きて窓から外を覗いたときは嬉しかったわ。ああ、今日は神様が微笑んだんだ、って思った」

弱々しくそう言って、彼女は空を見つめる。

——悲しげだった。しおらしい。今、彼女はいつもより墮天使っぽいマイナスな表情をしている。けれどもそのくせして……これは墮天使津島善子らしくなかった。

やつぱり、魔の地への墮天遠足を楽しみにしていたんじゃないか。

「……わかった、我が手を打とう」

だから、なのか。　我はむず痒い気持ちを抑えきれず、気が付けばこんなことを口にしていた。

「手を……打つ?」

「ああ」

ポカンとして我の方へ顔を上げた墮天使に、頷きを返す。

根拠はない。が、我が大技を繰り出せばこの状況を——彼女が悔やむ状況を、変えれそうな気がした。たとえ駄目だったにしろ、全力を出さずして何が黒騎士だろう。多少やっていることが黒騎士とは正反対の「聖騎士」くさくたつて構わぬ。

我は右手に持ち合わせていた黒刀を、晴れ間皆無の広大な天空へ翳かざした。

「いいか墮天使。これからあの馬鹿げた雲々を、我が技で遙か遠方に吹き飛ばす!」

「無理よ! 湧丞だつてわかつてるでしょ?」

虚しくなるだけでも思ったのか、墮天使は我を止めようとした。だが我は、今度は首を縦には振らない。

「ハハハツ……墮天使主人が困っているのに、黒騎士リトルデーモンが黙って屈するわけにはいくまい」

「湧丞……」

墮天使は暫く複雑そうにして我を見つめていたが、

「うん……じゃあなんとかしなさい、リトルデーモン!!」

笑顔で背中を押してくれた。

これで退けなくなった。そして――

「承うけたまわった！　いくぞおおおおお！！」

――闘う理由は、十分だ！

刀を構えて腰を落とし、空気をうんと吸い込む。

空気は脳に、肺に……やがて全身のすみずみに行き渡って、我に力をみなぎらせた。

狙いは天空一点。我は黒刀を振り上げ、全てをぶつけた！

「あまねく邪雲共、散り去るがいい――

〃スカイズファイナーレ・ブレイドツツツ!!」

くくくくくくくくくくくく

「ここからは自由行動とします。指定された範囲内であればどこを回ってもいいですが、それ以外の場所には行かないでください。また、14時までにはバスに戻るよう！」

目的地に到着して停車したバス内。担任が全体に諸注意を促している。皆浮わつい

た心境にあるのか、真面目に聞いている者は殆どいない。

現在は遠足中。ただし遠足が施行されたのは豪雨の後ではなく、予備日。

……要するにあの日、何も起こせなかったのである。技がまるで通じなかったのだ。空があんなにも強き存在だとは。我は退けることができるかと信じていた。

「湧丞、班の皆とバスの外で待つてるわよ！」

「う、うむ。すぐ赴く」

まあ、幸いにもこうして予備日が快晴になってくれた。墮天使も楽しそうである。結果的には問題なしだ……ただし、我はある誓いを心に刻んだ。

「もう空とは当分闘わんツツツ！」

我は出てきそうになった悔し涙を堪え、席を立つのだった。